
Heretic

Hiyoko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Heretic

【Nコード】

N1437T

【作者名】

Hiyoko

【あらすじ】

憂鬱な現実から逃避し、VRMMOゲーム《Arcana Knight's Online》の中へと潜り続けた主人公。防御ステータスを捨て、成長ポイントを火力に振り分けて特化させた紙装甲の彼は、皮肉にも他のプレイヤー達から“不死身”と呼ばれ揶揄されていた。

彼はある日、ゲーム内で一週間に一度行われる攻城戦の後、とある出来事が原因でプレイ中のVRMMORPGに似た世界へと迷い

込んでしまっ。

自身の知っているゲーム世界と比べ、栄えたモノもあれば衰えたモノもあるその異世界^{アスガルス}で、主人公が偶然知り合った浮浪児を鍛えつつ、他の冒険者達と臨時チームを組んで迷宮の探索、冒険等をこなして行く異世界物語。

魔法使い系の最強ノチート物です。

この小説には、おっさん、少年が多分に登場致します。稀にシヨタっ子に抱き着かれたりと、BL臭いギャグシーンが含まれる回がありますので、苦手な方はご注意下さい。

ステータス説明（前書き）

質問が多かったのでステータス説明だけざっと書いて見たり。

そのうち別ページに移動すると思います。

ステータス説明

そのうち、ちゃんと作ろうと思いますが、今更《AKO》ステータス説明等。大雑把な物なので齟齬が生じるかも……大体こんな感じなんだな。と、雰囲気伝われば幸いです。

Str:――攻撃力や筋力に影響。

ウェストポーチ内のアイテム重量制限にも影響する。（インベントリ内は制限無し）アイテムは重量設定があるので最大所持量と、現在所持量の割合に因って攻撃速度、回避率、移動速度、自動回復量増減。

そして、最大所持量の90%を超えると攻撃不可、HP継続ダメージ発生――等のデメリットが発生するので大事な能力値。

武器の効果を最大限に発揮するには武器に設定された一定の値が必要。（足りなければ攻撃速度、威力減）弓を扱うにも一定の筋力が必要な為に、魔導師系のプレイヤーもサブ武器用に必要最低限振っている者が多い。

Strを上げる事に因って解禁されるスキル――各種攻撃スキル、種族ダメージUP、攻撃力上昇等。

Vit:――最大HPや防御力に影響。

微量だが、毒、麻痺、出血等の物理的な状態異常耐性にも影響す

る。

V i tを上げる事に因って解禁されるスキル——最大H P上昇、防御力上昇、種族ダメージ減、物理系状態異常耐性上昇等。

種族ダメージ減系は、対応する魔物から致命傷を受け続けなければ上がらないので熟練度上げは茨の道、マゾ以外お断り。頑張れば頑張る程報われるスキル。

D e x：——射撃系スキルの攻撃力、命中率、詠唱速度、盗み、製造スキルの成否に影響。

D e xを上げる事に因って解禁されるスキル——命中率上昇、攻撃軌道視覚化、詠唱短縮、盗み、各種製造スキル等。

A g i：——回避率や移動速度に影響。

A g iを上げる事に因って解禁されるスキル——回避率上昇、移動速度上昇、攻撃速度上昇、隠密行動系等。

I n t：——最大M P、魔法、属性攻撃ダメージ、妨害系スキル等の成功率に影響。

I n t上昇に因って解禁されるスキル——各種魔法、属性攻撃等。

武器には魔力を攻撃力に変える素敵魔装備等も存在する。
そちらの攻撃力はInt依存。

R s t : —魔法耐性に依存。

微量だが、呪詛、沈黙、恐慌等の精神的な状態異常にも影響。

《A K O》は魔法を使って来るモンスターも少なくとも無いので意外と重要。

R s t上昇に因って解禁されるスキル——魔法耐性上昇、属性耐性上昇、精神系状態耐性上昇等。

やはりV i tと同じく耐性上昇系スキルは致命傷を受けないと熟練度が伸びないので上げるのは苦労する。

二つのステータスが一定になるのが解禁条件のスキルとかも有りますが、細かい所は割愛します。私の脳が爆発します。

00・Arcana Knights Online 1（前書き）

3話まではプロローグ的な話が続きます。
初めての最強物？

00・Arcana Knights Online 1

理不尽だ。

俺の二十とそこの人生に於て、今まで何度この言葉を吐いたか——とても数えきれた物ではないが、今回の出来事は今までのそれを軽く笑い飛ばせる程に常軌を逸脱している。まさに悪夢だ。

——ゴッ——

側頭部に鈍い痛みが走り視界が揺れ、身体がふらつく——なんで俺がこんな目に会わなきゃならんのだ。

VRMMORPGと言うものをご存知だろうか？

昔から空想のうちにしか存在しえなかった物だが、人類の技術の進歩と言う物は留まる事を知らず——20XX年某日、ついに仮想現実体感型ゲーム——ものが実現化されてしまったのだ。

俺がガキの時分だった発売当初こそ、VR機器は高額な上に巨大で、とても一般人に手に入れられる代物ではなかったが——徐々に小型化されるに伴い値段も安価な物へととなり、俺は全国の黒い人達御用達の日焼けマシン程のサイズになった筐体を購入した。

高かったただろうって？ 勿論無理して買ったのさ。正直俺は、仮

想現実に逃げ込み現実を逃避しなければやってられなかったのだ。

高校時代からコツコツとバイトで百万を貯金し、高校を出てからは船舶の電気工事士として指導者からのスパルタ教育の元、海上巡視艇から軍艦——果てにはLc a c（エア・クッション型揚陸艇）等の製造、整備に明け暮れて僅か二年でそれなりの役職と貯金を手に入れたのだ、が——。

父親はリストラされニート化、母親は間男と遊び狂い実家は借金に塗れ、長男たる俺に金をせびり来る始末。

唯一の救いと言えば、中学時代から付き合っている——現在同棲中の彼女の存在だった。

辛い仕事も彼女との将来の為の資金だと思えば頑張れたのだ。——しかし、ある日久々に仕事が早く切り上がり、彼女とゆっくり出来ると思えば足早に帰宅してみれば、だ。

「……そちらはどちら様でございますでしょうか？」
「ち、違うの、これは——」

俺が素っ頓狂な言動になってしまふのも仕方ない。目の前には裸でベッドの上に横たわる愛しい彼女と、無言の見知らぬ男——どう見ても事後です。本当にありがとうございました

当時の俺は、お互いに相手が悪いと眼前で罵り合う男と彼女に、それはそれは辟易としたものだった。怒りが湧くとかを何周も通り越して笑いが込み上げた。

拳げ句の果てには、急に逆ギレを始めた彼女に『貴方の帰りが遅

いのは浮気しているからでしょう？ —— だから私もやり返したの」と、訳の解らぬ事を言われる始末。

『俺は悪くない』と彼女を置いて一目散に逃げ出すような男に自分分は負けたのだなと思うと、己の首をかつ切りたくなる思いだった。そんな状態で仕事がまともに熟せる訳もなく、己の不注意で右足を全治三ヶ月の骨折——。社長や同僚が必死に引き止めてくれたのだが、どうにも居た堪れなくなり退職。

——それから二年間、汗水流して働き蓄えた貯金を消費しつつ、現実から逃げる様にしてひたすら仮想現実^{レグルス}にダイブ（接続）する自堕落な日々を過ごした。

周囲をグルリと深い堀に囲まれ、重厚な城壁に護られた巨大な砦——中からは剣撃や爆音、そして悲鳴が幾重にも^{こたま}飴し喧騒に包まれている。

俺は入口の近辺に次々と人が転移魔法で現れては突入を繰り返す様子を、正面の丘から頬杖を突き眺める。

「《斑鳩》に《にゃんこ団》に《みくたん親衛隊》……その他多数。——競争率高過ぎだろ、今日は祭か？」

砦に入っていく大手ギルドのエンブレムを確認して嘆息を漏らす。

「ま、”不死身”サンなら大丈夫っしょ、この前みたいにサクッと

宜しくう」

隣で俺と同じ様に手の平で傘を作り入口の様子を眺める狐目の男が、なんとも気の抜けた口調で語りかけてくる。

黄色の短く跳ねた頭髪に赤い軽装を身体の要所にだけ身につけ、その容貌は明るく人懐こい印象だ——彼の足元には一対の双剣が大地に根を生やしている。ギルド《Alice》のサブリーダーのジローと言う男だ。

「Lv30代に期待せんといってくれい……ステはまだしもHPが低すぎる」

俺は鼻唄混じりでご機嫌な様子のジローに肩を落として答える。

——現在俺は、二年前からサービスを開始したVRMMORPGゲーム《Arcana Knights Online》（以下AKO）の攻城戦に、ギルド《Alice》の傭兵として参加している。

ミッドガルズと呼ばれる大陸を舞台にしたこのAKOは他のVRMMORPGの例に漏れず、剣と魔法——そして少々の男の浪漫（？）を含んだ人気作だ。現状での最新作と言う事もあり、正確な数は知れないが常時接続者はかなりの物になると思われる。

このゲームはMMORPGと言うジャンルにしては珍しく、Lvupの必要経験値なるものが低く設定されており、レベルキャップの100までは割と誰でもすぐに達する事ができる。

そしてLvが100に達したプレイヤーは転生クエストを達成す

る事によって、転生一回につきステータスポイント（以下Step）のボーナスポイント（BP）100を入手して（現段階ではボーナス入手は10回までで、最大1000）再びLv1から育てる事が出来るのだ。

かく言う俺も現在転生10回目のLv32だ。——まあ、実際はLv1につきStepは2上昇していくので能力的にはLv532相当と言うことになるのかな。

—ピロン—

偵察娘：『——ジローさん、城主の《クレイモア》は全滅したみたい。今は《斑鳩》が籠城ちゅー、《にゃんこ団》は撤退して他行った』

軽快な電子音と共に連絡用を開いていたチャット窓に、砦の偵察に行っていたメンバーからのメッセージが表示される。

そろそろ皆も眺めるだけでは痺れを切らす頃だろう、メッセージを確認したジローがゴホンと咳ばらいをしてギルド員達と向き合う。

「——さて、そろそろうちらも参戦するとしますかねー、皆さん？」

「待ってましたー！」

「ぶっころー！」

ジローが号令を掛けると、それまで退屈そうに鎮座していた《Alice》のギルド員達が意気揚々と立ち上がり、次々と奮起の声があがる。

本日は『ギルドが現在保持している砦に誰も攻めて来なくて退屈

！——と言う嬉しいのか悲しいのかよくわからん状況に陥ってしまった為に、防衛組と遠征組に別れての運びと相成ったのだ。

言うまでもなくこちらは遠征組で、俺を入れて総勢33名になる。色んな所属ギルドが入り乱れての乱戦になる事を想定し、皆一様に一点突破型の身軽な装備をしている。

「そいじゃ作戦は手筈通り、”不死身”サンが敵の後衛を無力化しつつ敵にタコ殴られてる間に皆はパパッと玉座を占拠、そのまま終了時間まで引き籠もります。——あ、後衛には前衛が一人護衛について進んでね」

「俺がやられるの前提だもんな……」

まるでこれからピクニックに行くかの様な陽気な物言いです。ズローを一瞥し頂垂れる。

アハハハ、と双剣を担ぐズローを尻目に、俺は腰のポーチを開いて回復薬等の不備が無いこと確認して愛用の杖を握り締める。周りでは転移魔法を使える者達が次々と詠唱を始め、地面に砦前直通の転移魔法陣が幾つも現れる。

「GO！ GO！」

次々と光りに吸い込まれて転移して行く仲間達に続き、俺も魔法陣へと飛び込んだ。

00・Arcana Knights Online 2

まるでエレベーターに乗った時の様な緩やかな浮遊感の後——先刻まで居た丘から800m程離れていた砦の入口まで瞬時に転移する。

砦攻めの新たな参加勢力に周りの視線が集中する。

「おっ、不死身きた」

「今日こそ死なす！」

……などと穏やかでない会話が聞こえてくる。——ちなみに”不死身”は不本意ながら俺のあだ名で、周りのプレイヤーから皮肉を込めてそう呼ばれている。

『人気者は辛いつすね』

ジローがニヤニヤしながら《whis（個別会話）》を飛ばして来るのを力無く見据えると、何を思ったのか彼は細い目を見開きウインクしてくる。——無視しよう。

ゾンビ：突入しま

チャット画面を開いて仲間呼び掛けると、彼らからは『逝っちゃって下さい』『不死身サンまじゾンビ』『抱いて！』等と暖か

い激励の言葉が表示されるのを流し見てチャット画面を閉じる。

ジローに目配せし、互いに頷くと隠密効果のあるフードを頭から被り入口に侵入する。

開け放たれた城門を潜ると、そこは轟音が響き渡り、魔法やスキルがド派手な演出で飛び交い混沌と化して居た。近接武器を持った防衛側の前衛が攻め側を罅迫り合いに持ち込んで牽制し、それを後衛が弓や魔法で安全で攻撃の届かない高台から集中砲火を浴びせて一蹴。

さらに防衛側の後衛3名が入口に向って広域魔法の波状攻撃を仕掛けている為、攻め側の後衛は相手を攻撃する間もなく一瞬で蒸発——強固な護りを展開していた。

俺は斬り合う人と人との間を擦り抜け、広域魔法を詠唱する三人を射程範囲内に収めれそうな位置を見つけてそそくさと移動する。

『……ジロー、配置Ok。入口狙ってる三人潰すから、カウント10から宜しく』

『あいよ——Ok。10……』

こちらの準備が出来た事を告げると、各自に伝令の旨を告げたジローが秒読みを開始する。——俺の役目は安全圏から広域魔法を唱える3人をカウント0までの間に無力化する事だ。

『……………9……………』

現在魔法発動中の一人は省き、最初に狙うのは現在詠唱中の隣の男だ。

「『神の鉄槌』」

詠唱短縮によつて単語発動可能にした魔法が《ツール・ハンマー破滅の錫杖ルインズ・ゲート》と呼ばれる——なんともアレな名前の愛用武器の穂先から、青白い軌跡を描いて目標に向かって突き進む。

詠唱中だった相手の男魔導師はノックバック効果のある《ツール・ハンマー》の直撃を受けて高台から転落、ポリゴンの欠片となつて空中に四散する。

「え………？」

「不死身きた！ 止める！」

それと同時に俺の隠密効果が効果を失い、敵のど真ん中に姿を晒す事となった。俺の突然な出現に呆けて固まるプレイヤーも居れば、すぐにこちらに斬りかかつてくるも見知った顔も多く見て取れた。彼らから繰り出される斬撃をこちらも杖でいなし、呪文の詠唱に入っていた二人目に、すかさず《ツール・ハンマー》を直撃させる。

「二人やられた！ 本隊が突っ込んで来るぞ！！」

砲台役の二名が戦線離脱した所でやつと敵方から警告を促す声があがる。すぐさま重鎧と大盾で武装したプレイヤー二人が最初に俺が無視した女性魔導師を護る様にして射線に立ち塞がる。

「……ま、関係ないけどー」彼ノ者ヲ拘束セヨ」
「うひゃあ?!」

指定した対象の動きを拘束する魔法を発動し、詠唱に入っていた女性魔導師を力付くで縛り上げて詠唱を中断させる。

《バインド》発動中はこちらの動きも制限されてしまう為に袋叩きにされる恐れがあるが、こんな時の為に悪戦苦闘して編み出した固有魔法を披露するには持って来いだ。

「こんな公衆の面前で亀甲縛り……だと?! なんと云う鬼畜」

「ハラスメントだ! 死ね!」

「バインドにこんな未知の領域が……けしからんッ」

「俺も縛ってくれ!」

「おい! やり方を教えろ——いや、教えて下さい」

「いつそ、一思いに殺してえッ」

一部（主に女性プレイヤー）を除いて評判は上々のようだ。俺の苦勞も報われるぜ……近々スクロール化して販売してみようと思う。
——さて、俺の役目は果たした。後はジロー達に任せるとしよう。

「ひゃっはーっ!」

「高台を優先攻撃、前衛は切り込め! 一気に大広間まで突破する」

入口から《Alice》の面々がなだれ込んでくる。……なんと
言うか——見紛う事なく盗賊のノリである。

《Alice》の射手達が身軽な動きで点攻撃の単体魔法の弾幕
かい潜りながら矢を放ち、残った敵方の魔導師は今更広域魔法を唱
える時間など無く、次々と数を減らして行く。

「不死身サンおつです、二人置いて行くんで、そのまま入口で足止
めお願いしま〜」

敵方の大剣使いを斬り伏せて双剣を肩に担いだジローがこちらを
一瞥してウィンクし、直ぐさま踵を返して奥へ進んで行く。

俺が一々答えるまでも無く、大量の敵さんに周りを囲まれて居る
ので、否応無しにここに張り付く事になる。摺り足でジリジリと近
付いて来る敵対プレイヤーに不敵に笑み、前方に突き出した左手の
五指をゆっくりと折り曲げる。

「きつく縛られたい奴から掛かって来い」

00・Arcana Knights Online 3

耳障りな鈍い風切り音を鳴らし、圧倒的な物量を伴って振り下ろされる巨大な戦斧を愛杖で無造作にかち上げ——そのまま相手の胴を力任せに薙ぎ払う。

「ぐお……ッ」

『《Armor Break!!》』

戦斧男の身体は城壁まで吹き飛び——彼の鎧の破片が光りの粒子になり四散してシステムメッセージが鎧の破損を告げる。

「こらー、魔導系の癖に重装キャラをホームランするとか卑怯だぞ、チート自重しろ！」

「うつせ、縛るぞ！ 1対多数で卑怯もクソもあるか、勝てば正義っ……！」

ギルド《斑鳩》に所属する知人の女が後方から野次を飛ばし、まくし立てる。

——俺が周りに”不死身”だの、”チート”だのと揶揄されるのは偏に月単位で出現するボスドロップの固有装備を数個、運良く所持していると言う理由でだ。現実で幸せになりたかったぜ……。

本来ならば例え隠密状態であろうと、他の後衛の様に最大HPの低い俺は入口に入ったが最後、例に漏れず瞬殺されてしまうはずなのだが――。

ルインズ・ゲート

《破滅の錫杖》全ステータス2倍　V i t上昇分HP切り捨て　MP減少30/5sec

《アニメリング》物理被ダメージ9割減　精神異常無効　魔法被ダメージ10倍増

《アイギスリング》全魔法無効　物理異常無効　HP半減

この装備達のお陰で、俺に魔法の類いは一切効果がなく、いくら殴られようとも致命傷を受けない――まあ、ドロップ品を使用していただけなのでチート性能と言えど合法だ。文句は設定した奴に言えい！

しかし、絶対無敵という訳でも無く最大HPは極端に少ないのだ。"不死身"と揶揄されるプレイヤーが全プレイヤー中で最もHPが低いとは中々皮肉が利いている。

このゲームは自由度が高く、職業なんてモノはなくてスキル制、LvUpで得られるポイントはプレイヤーが好きに割り振れる。

しかし、特殊なスキルの発生条件が使用武器の熟練度+対応ステータスが一定の数値に達している事――と言う条件が着く為に幅広く便利なスキルを覚えようと、スキルは十人十色で個性が出るのだが、能力値は必然的にバランス型のステータスになる者が多い。

その点、防御系のステータスに割り振る必要が一切無い俺は、極

端に攻撃に特化した能力値になっているので短詠唱／低威力の魔法で敵が吹き飛び——脅力はそこいらの近接キャラよりも高いと言つとんでも性能になっている。

わかりやすく転生回数10回目、同Lvの魔導師、近接プレイヤーのテンプレ的ステータス割り振りの数値と並べるとこんな具合だ。

Level:32

STR	220	50	262
VIT	8	140	150
DEX	250	202	250
AGI	220	150	250
INT	406	320	50
RST	8	250	150

左から俺、魔導師、近接のステータス（装備上昇分除く）となる。

——こんな感じで、魔導系で在りながら脅威の耐久性を持ち、唄って殴れるプレイヤーとして悪名高くなってしまっているのだ。

《ソニック・ピアッシング》

「……クッソ、当たんねーッ！」
「『爆ぜろ』」

騎乗槍と大盾で武装したプレイヤーが繰り出す連続突きを躲し、

掌に爆炎を纏わせて対象を吹き飛ばす《ナパーム・ブロー》を駆使して態勢を崩し、杖で追撃を掛ける——杖の性能のお陰で優位と言えど、装備中はMPが常に消費される為に長期戦の場合はMPを節約しなくてはならない。

ジローから玉座の間を占拠したとの連絡を受け、後は残り10分間を防衛すればこちらの勝利だ。

残り時間が少ない事もあり、どんどん攻め手の数が増えて行く。攻城戦は皆を防衛するだけの勢力はなくとも、終了時間までの間に玉座に置かれた宝玉に最後に触れたギルドが城主となる。

そして、それを狙った者達——所謂”レーザー”と呼ばれるプレイヤー達が途中から多く殺到し、入口の戦闘は熾烈を極めて居た。

チャットウィンドウを開き、思考入力モードに切り替えて仲間に呼び掛ける。

ゾンビ：数が多い、どうするよ？

じござる：拙者の超絶 抜刀術も、この数じゃ本領を發揮出来んていざる

二郎：広間の方も大変です アイテム代経費から落とすんで、大技目一杯使いまくっちゃって下さい♪

魔女娘：心得た。不死身、私に続き給え——雷雨を頼むぞ

高台の上で呪文の詠唱に入った尖んがり帽子の魔女っ娘に右手を挙げ了承の旨を伝え、俺も詠唱に入る。

「……」 全てを凍てつかせる魔狼の咆哮よ、我に仇為す者共に氷雪の嵐となりて吹き荒れよ——」

「えっ、なにそれカッコイイ、俺も考えよう……」 全てを穿つ……
「——ダメだ、出てこねえ！ 以下略！」

《ファイアフル・ガスト》

魔女っ娘ちゃんのすんばらしい（厨二）詠唱が終わると辺りに氷塊を纏った巨大竜巻が発生し、魔法耐性の低い敵対プレイヤー達はポリゴンの欠片となり四散し——生き残った者達も《状態異常・氷結》になり身動きが取れなくなる。

《ヴォルテクス・ストリーム》

そこに俺が発生させた雷系呪文が追撃をかけ、一気に畳み掛ける。一面一帯に激しい紫電が耳をつんざく轟音と共に降り注ぎ、生き残った氷結プレイヤー達を次々と飲み込んで行く。

程なくして雷雨が止み、エフェクトの粉塵が消えて視界が晴れると、俺達の前に生き残った敵プレイヤーは存在しなかった。

「フッ、ざつとこんなもんじゃ」

「拙者等に盾突こう等、100年早いぞござるー！」

「……ござるも働けよ。さっ、続けて行こう」

本人のキャラと反比例する控えめで慎ましやかな胸を得意げに張る魔女娘と、さも自分が一掃したかのようなドヤ顔で威張りなさるオッドアイの二刀流剣士サマと顔を見合わせサムズアップする。

後で魔女っ娘ちゃんには、俺の詠唱も発案してくれないかと頼んでみるか。

「喰らえっ、必殺の——」

「……万物の根源たるマナよ——」

「男はどつく！ 女は縛る！ やらいたい奴から掛かって——」

そんなこんなで無事に終了時間を迎え、ギルド《Alice》の遠征隊は勝利を納めたのだった。

00・Arcana Knights Online 3（後書き）

物語中のチャット名等^{センビ}はプレイヤーのキャラ名ではなく、チャット内の名前です。

一応。

00・終わりは突然に（前書き）

長くなってしまったので、ここまでがプロローグになります。

00・終わりは突然に

右のこめかみから頬を伝って流れてくる生暖かい液体を手取る。
流れ出す血液と反比例する様に俺の心中は冷え切り、思考が停止する――理不尽だ。俺がいったい何をした？

俺の目の前で虚ろな表情で立ち尽くす元彼女に、静かに蔑みの視線を送る。

酷く憔悴した様子の彼女の左手には俺が夕飯に使用し、机の上に置き忘れていたドレッシングの瓶が握られている。――ああ、あれで殴られたのか。

いてーな……凶器だわ、侮れん。そういや、前にゴルフクラブで殴られた事もあったっけか、と色んな出来事が脳裏に思い浮かんで嘲笑する。楽しいこともいっぱいあったな……。

――どうしてこうなった。

攻城戦を終えた俺は《Alice》の祝勝会に呼ばれて参加する

事になったのだが、ゲーム内にリンクさせている家のチャイムが鳴っている事に気づき一旦ログアウトした。

そして誰かと扉を開いて見れば、付き合っ居た当初と変わらぬ口調で話しかけてくる彼女と久々の再会を果たしたのだ。

まあ、久々と言っても直接的にはって意味でだが。——お互い近所に住んでいるので、彼女が色んな男を取っ替え引っ替えしながら車で一緒に出掛けるのを良く見掛けているからだ。

あの頃と同じように至極親しげに話し掛けてくる彼女に、俺はぞんざいかつ丁寧な物言いでお帰りを願ったのだが、『5分だけ』と扉の前で喚き散らす彼女に圧されて家に招き入れたのだ。——この選択が間違っ居た。

何を企んでいるのか、彼女は過去の美しい思い出を口早に並べ立て、俺に復縁を迫ったのだ。

俺は理解に苦しんだ。

胃をキリキリと締め上げる心理的外傷及び、心労から込み上げる嘲笑を我慢しつつも、男には苦勞してなさそうだが——と訊ねてみれば『それは貴方が迎えに来てくれないから』と、とてもユーモアに溢れたジョークで返す彼女。

ならば、先刻からうんざりするほど鳴り響く鞆の中の端末に大量に保存されている男達の情報を目の前で消去出来るかと訊ねれば——

「それは無理……でも一番好きなのは　くんなの、信じて！」
おい、医者は何処だ。こえーよ、やべーよ。どうしてこうなった。

誰か俺にわかりやすい様に説明してくれ。

俺の心のダムは早々に決壊し、咽が小刻みに震える。そして嘲笑の張り付く笑顔で彼女にはつきりと伝えた。

「お帰りはあちらです」

——その結果がコレ、だ。もう放つといってくれよ、なんで殴られたの俺。

あまりに置いてきぼりな展開に投げやりになりつつ、壁に身体を預ける。青臭い感情ながらも、心の底から愛していた彼女は何処に行ってしまったのだらうと感慨する。

「ごめん、ごめんね……」

流血する俺を見て口元を押さえてむせび泣き、近付いてくる彼女は俺の頭に手を伸ばし、軽く撫でると俺の肩に頭を預ける。

久々に嗅ぐ彼女の髪の毛の匂いに、紛れも無く本人だな——と心中で察し、なんともやるせない気分になせられる。

「……ほんとに、大好きなの……だから……」

「……ああ」

「——私のじゃないなら死んで……？」

冷淡で機械的に発せられる彼女の声、刹那に腹部に感じる熱——そして、遅れてやってくる鋭く擦られた様な痛み。

ゆっくりと視線を落とすと自身の右脇腹に生える赤い柄の様なモノ。

同棲する時に一緒に買いにいった包丁だな——とすぐに認識出来た。こいつ、料理出来なさそうなのに意外と上手いんだよね……同棲前に練習したって言ってたっけ。懐かしい、な。

あんなに好きだったのになんでだろう……頬を涙が伝うのを感じ、俺の身体に体重を預けたままの彼女の頭を撫でる。

「私はっ……悪、く……ない……」

彼女はアイラインが溶けて黒い線を描く顔をぐしゃぐしゃにし、肩を震わせて嗚咽しながら床にへたり込む。

「そーやって、全部人の所為にしてると、男に逃げられちまうぞ」

なんでだろうか……いつもの嘲笑じゃなく、自然な笑みで彼女を皮肉れている。——そう、昔のように。

「ちがつ……き、救急車……」

彼女はよろよろと立ち上がり踵を返すと、足をもつれさせながら玄關へと消えて行った。

「……人間意外と冷静になるもんだな」

赤に濡れた腹部を撫でて独白する。自分に“死”と言う物がこんなにも簡単に降り懸かって来るとは思っても居なかったので、何処か他人事の様に感じる。

そして俺の脳天気かつ、阿呆な脳味噌が『こつち（ゲーム内）じや不死身なのに、今リアルで刺されて、そろそろ死ぬんだぜ？』と言っしょーもない事を思い付き、実行に移してみる事にする。

まさに命を賭けた一世一代のギャグだ、馬鹿の行動力って凄いんだぞ？ 侮るなかれ。

ふらつきながらも、今では俺の生活に欠かせなくなってしまった日焼けマシンの様なVR筐体に寝転がり、蓋を閉じる。

「システム起動」

《……ok・Game cord” Arcana Knight
s Online” Start……》

《Now Loading……》

カリカリと音を立てる筐体の動作音が、子守唄の様に耳に響き――
――視界が暗く塗り潰されて行く。

《Standby ready?》

いつでもどつぞ。と頭で念じると俺の意識は闇に吞まれた。

01・邂逅

微風に煽られた若草がさらさらとせせらぎ踊る。脇には背の低い樹木がぽつぽつと根を張り、枝を広げて一心に陽光を浴びている、起伏の緩やかな丘が遙か地平線まで続き、土が剥き出になった——恐らくは街道だろう。それが緑豊かな草原に一筋の線を引いている。

気持ちの良い天候に両手を挙げて伸びをし、新鮮な空気をたらふく肺に吸い込む。

「——って、ここ何処だよ、つーか、なんで明るいの？」

俺は皆内で落ちたはずなんだけど……時間も22時過ぎだったはずだ。この明るさ——どう考えても昼くらいだよな。

「あー、さっぱりわからん」

混乱気味の頭をがしと掻き、ウエストポーチから《デバイスライザー》と呼ばれる端末——まあ、所謂携帯電話型アイテムだ。

パクンツ、と小気味良い音を立てて開かれた画面に表情された時間は14:32……あれ？ 何この時差。ラグってレベルじゃねー

ぞ、てか俺生きてんの？

端末を操作してフレンド検索を掛ける——昼間でも誰かしらは居るだろう。

《Search...》

『見つかりませんでした』

「うげ、マジか」

ジローへ《whis》（個別会話）も飛ばしてみたが繋がらない。思い当たる奴に一頻り送信を試みてみたが返ってくる反応はどれも一緒だった。

運営にも繋がらん……メンテ中か？ 事前に告知はなかったはずだけど……緊急メンテかねえ。——稀にメンテ中でも入れる事があるって聞いた事がある。今回もその類いだろっか？

知り合いが居ないなら意味が無いな。こんな時間になってるって事は、俺はしぶとくも生きて居るのだろう。——きっと筐体が血塗れになってるだろな……掃除しなくちゃならん。

脳内でシステムメニューを開きログアウトボタンを選択する。

「……ふむ？」

出来ねーな。メンテ終わるまで待つしかないのかねー？ マップを開いても”No Data”と表情されるだけだ。

取り敢えず街に飛ぶか……。

ポータル・ゲート
転移魔法を発動……反応無し。 why?

「……転移もできねーのかよ、他の魔法はどうだ? ——『爆ぜろ』」

俺の左手に橙色の魔力の塊が出現する。単語登録している《ナパーム・ブロウ》は問題なく発動するようだ。

左手を払って魔力の塊を分散させ、今度は右手を掲げて愛用武器をイメージする。すると、光りの粒子が右手に集まって棒状の形を取り、見る見るうちに見慣れた形状へと相成った。

先端にそれぞれ長さの異なる五つ又の刃が取り付けられた禍々しい錫杖——《破滅の錫杖》^{ルインズ・ゲート}だ。錫杖と言うよりも“グレイヴ”や“フォシヤール”と言った槍剣と言った方がしっくり来るかも知れないな。

「武器は問題無し……インベントリはどうか」

愛杖を肩に担ぎ、宙に意識を向けるとすぐにメニューが表示される。試しにポーションを取り出すと、赤い液体の入ったプラスチックの様な物がなんら問題なく実体化した。

どうやら不具合があるのは転移魔法とマップ、そしてログアウト出来ないと言った所か。——《魔装》は出来んのかな? ……試してみようにもゲージが足んないな。

「ま、適当に歩いて見るか。久々に歩いて移動するのもいいかも

知れん」

街道を辿ったらどつかの街に着くだろ。と、物見遊山気分で俺は見知らぬ道を散策する事にした。

「飽きた」

街道を行けども行けども緑一色でいい加減うんざりして来た。今までのプレイで感じる事のなかった身体の疲労感の様な物がそれに拍車を掛けている。

途中で魔物をちらほら見掛けたが、自分より格下相手を恐慌状態にする《畏怖の波動》を展開中なのでこちらに近寄って来る事はなく、俺の散歩は、疲れから来る多少の不快感はあるが安穩そのものだ。

「……お？」

本日何度目かの丘を越えて居る時だった、道を降った先で何者かが魔物と戦闘の真っ最中のようなのだ。

巨大で筋肉隆々な緑の体躯にトサカのような頭飾りのついた兜や無骨な棍棒、重厚な丸盾で武装した魔物——あれは《オーガキング》だな。

んー、オーガキングはでかくてこの位置からでもはつきりわかるけど、戦ってるプレイヤーの仔細は距離が離れててフォーカスしてみてもよく分からんな……。

ここから分かるのは騎乗槍を装備し、馬に乗ったプレイヤーって事だけか。まるで馬を自分の手足のように操作してオーガキングの攻撃を器用に躲している。

アイツは再生力が高いから近接一人だとえらい時間が掛かるんだよな……。ちよいと支援しに行くか。何より他のプレイヤーを見つけた事が嬉しい。ここがどの辺りか教えて貰うとしよう。

面倒だが右手の薬指に嵌めている《アイギスリング》を外して速^イベリジョン・スピード^イ度上昇魔法を自身に掛ける。

攻撃魔法を無効化出来るのは美味しいけど、回復と支援も無効化なんだよな……。再び指輪を嵌めて愛杖を実体化させる。

「よし、——行くか」

軽く杖を振り回して手応えを確かめると、一気に丘を駆け降りた。

元々の俊敏性ステータスの高さもあり、数百mの距離を風を裂きながら一瞬で駆け抜ける。

プレイヤーが魔法の有効圏内に入った事を確認し、すかさず支援

魔法を掛ける。

《ブレイヴ・パワー》

《プロテクション・ディフェンド》

《イベイジョン・スピード》

「……ッ?! 助かる!」

「援護す……る?」

オーガキングの振り下ろす棍棒を無駄の無い動きで躲し、落ち着いた浜みのある声で礼を述べる騎乗の——騎乗の……馬? うま? ウマー?

俺がプレイヤーかと思って居た相手は紛れも無く——

「えっ、ケンタウルス?」

「む、そうだ。別段珍しくも無かるう。魔導師殿、すまんが手を貸してくれぬか?」

白い鎧を身に纏い、腕を差し込む様にして装備する突撃騎乗槍を巧に操り、老練な雰囲気醸し出す壮年男性(?)

「いやいや、珍し過ぎるだろ——《AKO》の種族は人間しかなかったはずだ……いつの間に実装されたんだ?」

『オオオオオオオオ！！』

——まあ、細かい話しは後だ。コイツを片付けてからまとめて聞
くでしょう。

巨大な体軀を大きくのけ反らせて雄叫びをあげるオーガキング目
掛けて杖を構え、詠唱に入った。

01・邂逅（後書き）

初遭遇が美少女ではなく馬のオサーンと言う悲劇。

02・ドリルは男の浪漫

”手を貸してくれ”と言われたものの、オーガキングはケンタさん（仮名）の獲物である。

俺は威力を最大まで下げた^{ファイアーボルト}火炎魔法でオーガキングの気を引きつつ、後方から彼の支援に徹する事にした。

《エンチャント・フレイム》

オーガキングの弱点の炎属性を付与すると、彼の突撃騎乗槍が猛り狂う焰を纏う。

対人戦では先陣を任されてるけど、元々俺は支援が本職なんだよな。付与が成功したのを確認し、オーガキングの臍を杖で横薙ぎにするとオーガキングは体勢を崩して膝を突く。

「——今です」

「応っ!!」

ケンタさんが焰槍を水平に構えて馬蹄で大地を数回蹴り掻き、助走をつけてオーガキングに突進攻撃を仕掛ける。

——ガギン……ッ!!——

「ぬ……ッ」

それをオーガキングは咄嗟に丸盾で防ぐが、衝撃の勢いを殺し切れずに弾かれた盾が宙を舞う。成人男性の身長程の大きさがある大型の丸盾は、一定の高さに達するとピタリと静止し、慣性の法則に従い落下して地面に深々と突き刺さる。

『グオオオオツ』

彼の突進直後の隙を狙い、頭上から振り下ろされる棍棒をファイアーボルトで正確に腕を撃ち抜き、攻撃行動を阻害する。

先程からこの戦法を繰り返しているの、オーガキングはこちら側に一切攻撃を加える事が出来ないでいる。所謂、『ずっと俺達のターンッ！』である。

卑怯？ 外道？ 知らんなあ、これも立派な戦略である。いちいち避けるの面倒なんだよ。

発動中のスキル《畏怖の波動》の効果も手伝ってオーガキングの攻撃頻度は著しく低下し、憔悴しきっているようだ。

戦闘の真っ只中だが――ふと、気になってケンタさんを視姦――
もとい、フォーカスして見る。実は今後実装予定の新種族をテスト中のゲームマスターだったたりして……

――レベル328……だと？！

えっ、どんだけ鍛えてんのこの人。《AKO》の最大レベルは100までのはずなんだけど……。やっぱり運営の人なのか？

——それともう一つ、さっきからどうも頭に引っ掛ってるのがオーガキングの出血だ。

全年齢対象のこのゲームで流血表現は実装されてないはずなんだけどなー。

現実と見紛う程のリアルな出血表現に見慣れぬ種族、通常ではとても到達する事が無し得ないレベル——なんとも嫌な予感がしてならない……。

はは、まさか……な？

——いや、実はテストサーバーに迷い込んだって落ちかも知れん。と言っか、そうであってくれ。

俺は不意に脳裏に浮かんだ雑念を振り払い。深呼吸して早鐘を鳴らす鼓動をなんとか落ち着かせると——オーガキングの顔面にファイアーボルトをぶち込んだ。

『グオオオオオツ！？』

顔面に焰の矢が直撃して視界を奪われたオーガキングは、棍棒を滅茶苦茶に振り回して地面を乱雑に叩き殴る。その都度に大きな震動が発生して大地が揺れる。

「むッ。これでは近付けぬな」

揺られてバランスを崩したケンタさんが踏鞴たたらを踏んで顎を撫でる。

短く刈り込んだ白髪に皺が刻み込まれた灰色の鋭い双眸と、こけた頬——髭は丹念に剃られている。

まさに”歴戦の戦士”と称するのがピッタリと当て嵌まる風貌の偉丈夫だ。

「んじゃ、打ち上げちゃうんで、サクッとやっちゃって下さい」
「ぬ？」

怪訝な表情で首を捻る彼を尻目に、俺は杖を翳して少々長めの詠唱に入る。

まあ、詠唱と言っても小難しい呪文をいちいち唱える必要など一切無く、脳内で自身の使える魔法を選択、後は時間が経てば勝手に発動されるんだけどな。

能力値のDexを上げたり、その魔法の熟練度を上げる事に因つて、詠唱——つまり、発動待機時間を短くする事が出来る。

そして熟練度を極めた魔法は一部の例外を除いて《単語登録》する事で待ち時間をキャンセルし、即時発動出来る様になる。もちろん、一部例外と言うのは広域大魔法の事だ。あんな物が即時発動出来れば敵無しである。

基本的に詠唱中は、それ以外の行動が一切制限されるが、俺はその制限を無効化する《オート・スペル》と言う特殊スキルを習得し

ているので、大規模な魔法を使う時は詠唱妨害もなんのその。杖での格闘で隙を無くす事が出来るのだ。だから”チート”って言われているんだよなあ。

《エクспロード》

—ゴウッ—

発動待機時間が終り、標的指定したオーガキングの足元から真紅の魔力球体が大きく展開し、再び足元に集束—。

—ドオ……ッ!!—

刹那の静寂の後、圧縮された炎素系魔力が一気に解放されて爆散する。

……ッ。こんなに音デカかったっけか？ あー、耳鳴りがする。

耳をつんざく爆音が辺り一帯に響き渡り、爆風で肌が黒く焼け爛れたオーガキングの巨体が宙に浮かび上がる。

「おおっ、見事——参るっ！」

俺が顔を顰めてエクспロードで馬鹿になった耳を押さえていると、ケンタさんは巻き上げられた粉塵と土煙が舞う最中、爆発で大地に穿たれたクレーターに颯爽と飛び込む。どうやら彼は耳をしつかりと塞いでいたみたいだ。

そして、オーガキングの真下に移動して槍を腰溜めに構えようと、彼の全身が目が眩む程に強く発光する。

「ぬうん……ッ!!」

彼が目にも留まらぬ高速で突き上げた槍から巨大な光りの槍が出現し、未だ無防備に宙を漂うオーガキングの胴を貫き、そのまま勢い良く天空へと昇って行く。

——あれは《ガイゼル・ストライク》か。

槍の必殺技的なスキルの代表格で、前に攻撃力特化型のプレイヤーからあれを喰らって死にかけた事が……。確か、超速回転するドリルが出るのもあったっけか。なにその超浪漫。

杖の攻撃スキルにもあんなのが欲しかったな。まあ、近接向けの武器じゃないから仕方ないか。俺も槍の熟練度上げようかな……。

などと俺が独りでブツブツと思案モードに耽って居ると、槍を担いだケンタさんが馬蹄を鳴らしてクレーターから上がって来る。

ああ、そうだ。彼には聞きたい事が山ほどあるんだ。浪漫については後程ゆっくりと熟考する事にしよう。

03・そして男の夢

「すまないな、助かったよ。アレの討伐を依頼されていたのだが、思った以上に手強くてな。ワハハ——」

背後に横たわるオーガキングの骸を一瞥して親指で差し——胸を張り破顔して豪快に笑うケンタさん（仮名）。意外と豪気な人物の様だ。

俺が勝手に戦闘中の雰囲気イメージしてた寡黙で渋い武人——と言う印象は儚くも脆く一瞬で崩れ去り、気さくなおっちゃんと言う認識へと変わった。

彼は馬人間と言う事もあり背が高く、身長170cmちょっとの俺は頭上を見上げないと会話がし辛くてしょうがない。

「……ぬ、そうだ。紹介がまだだったな。ワシはジンバルトと言う。見た通りケンタウルスの戦士だ」

ケンタ——改めジンバルトさんは人好きする笑顔で右手を差し、友好の意を示す。

討伐って事はクエスト中なんだよな。てか普通に自己紹介されたけど、ゲームマスターじゃないのか？ ちよっとかまをかけてみるか。

「あ、ども。俺は不死身って呼ばれてます。えーと、ここってミドガルのどの辺になるんですか？ 草原が広がってるから南部になるのかな……」

俺も右手を差し出して彼と握手を交わし、悪評のあるあだ名を名乗った。彼が《AKO》のプレイヤーなら何かしらの反応があるはずだ。

「フジミ殿か、変わった名前だな。——はて、ミドガルズ？ ……ああ。この大陸の昔の呼び名だな。今はここはアスガルズと呼ばれているが——」

顎を撫でながら眉を顰めて首を捻るジンバルトさん。少々不死身のイントネーションが違う気がする。

——ってアスガルズ？ なにそれ、これって……AKOだよな？
もう直球で行こう。

「えっと、ジンバルトさんは、このゲームにリンクしてるプレイヤーですよ……ね？ 今ログアウトとか出来ます？」

「ぬ、すまん。聞き慣れぬ言葉だ。魔術用語か？ ワシは生憎と魔術用語には疎くてな」

疑念をたっぷり含んで矢継ぎ早に訊ねると、彼は怪訝な顔つきで頭を掻き、然も申し訳なさ気に答えた。

パクンツ。と音を立てて閉じた《デバイスライザー》を収納し、腰を休めるのに丁度良い大きさの石に腰掛ける。丘の下から吹き抜けてくる風が戦闘で火照った身体を冷やし、心地好い。

ふう。と短く息を漏らして愛杖を地面に突き刺す——周りには物言わぬ、オーガキング”だったもの”が六つ横たわっている。

「——《魔装》も問題無く使えるみたいだな……しかし異世界トリップねえ」

蒼天の空を仰ぎ、太陽の眩しさに目を細めながら物思いに耽る。

俺がジンバルトさんからの話を聞いて、現状から推測するに、この世界は俺がプレイしていた非現実仮想空間でのゲームではなく、ログアウト不可の紛れも無いリアルだと言う事だ。俄かには信じがたいけど、彼が性質の悪い冗談を言っているので無ければ、そう考えざるを得ない。

「やっぱ俺、死んでんのかな」

ゲーム脳だった俺の死後の世界か？ よくある異世界召喚と言うやつか？ はたまた、運営のドッキリでした（はあと）とか？

——色々と見解は浮かぶが、判断材料が少な過ぎる。

とにかく、今の自分が置かれた状況が唯一真実なのだから、取り敢えず直向きに現状を受け入れる事にした。どうやら魔法も使えるみたいだし、足掻いてもログアウト出来なきや仕方ないしね。——それに、例えあちら側へ戻れなくとも俺には未練がないのだ。

もしドッキリとかだったらクレームの電話鳴らしまくってやるかな。ネトゲ廃人の時間の余りっぷりに戦々恐々とするがいい。

ジンバルトさんから入手した情報によると、この大陸——《アスガルズ》が《ミドガルズ》と呼ばれてたのは遥か昔の事らしい。

今は神生暦348年らしいが、《AKO》には時系列の設定がなかったので何百年後なのかはつきりしない。

レベルも普通に100以上に上がるらしく、俺みたいに短い詠唱で魔法を扱える者は見たことが無い——と、逆にこちらのレベルを訊ねられたが、彼には相手のレベルを調べる手段が無いようなので同レベル位だと適当にはぐらかしておいた。

レベル328が苦戦する相手にレベル32が共闘出来たつてのはおかしい話である。転生なんて便利なものはなく、レベル上限が高いって事なのかな。

——そして、何より俺を驚かせたのが、俺の持つ《デバイスライザー》に似た携帯端末型アイテムをジンバルトさんが懐からおもむるに取り出した事だ。

《デジタライド》と呼ばれるこの世界の冒険者の必需品らしい。

俺は携帯電話を操作するケンタウルスのおっさんを目撃すると言
う貴重な体験をしたのだ。——なんでもありだな、やっぱドッキリ
だろこれ。カメラ何処よ？

古今から“異世界召喚”と言えば——神の気まぐれやミスだった
り、巫女服着た美少女に単独や、幼なじみ、はたまた性格が正反対
で腐れ縁の友人と召喚されたりして、迷い込んですぐに窮地の美少
女を救ったり、思わず何処で主人公に惚れたのだ？　って突っ込み
たくなるような、やたらと惚れっぽい美少女達を侍らかしてハーレ
ムを作る物だと思って居たんだが……。

そうそう、VRMMORPGから迷い込むってのもあるな。

「あつ、俺だ」

——今の所ケータイ持ったの人馬のおっちゃんしか見てないわ。
いや、滅多とない経験が出来たと思って胸を張り誇ろうと思う。

然もありなん……そのうちきつと何かあるだろう。

ジンバルトさんとは近くの迷宮に用事があると言うので別れた。
彼の話しではこのまま街道に沿って進むと3時間ほどで街に着くと
の事なので、現在街道を辿って北へ北へと北進中である。——ケン
タウルスの進行速度なので、時間は少々当てにならないかも知れな
い。

その道すがらに《AKO》の代名詞と謳われていた《魔装》が使えるか否かを試していた——つまり、俺はゲームのデータでは無く、本物の生き物を殺したのだ。

特にこれと言って思い悩んだり感慨に耽る事も無く、普段通りに倒したことになる。

そもそも、俺は聖人君子なる人格を持ち合わせていないし、現実で実在したような魔物ならまだ幾らか躊躇するだろうが、こちらを全力で殺しに来る棍棒を持った体長6m超えの化け物になんの迷いが浮かぼうか。

——と尤もらしい理由を並べてみたが、単純にゲームの延長だと感じているからだろう。

危険な魔物が我が物顔で跋扈^{はつこ}するこの世界でも、どうやら戦闘を補助してくれる《システムアシスト機能》と能力値はゲームのままみたいなので支障無く生活は出来そうだ。

のんびりと余生も過ごすもよし、この世界を回って見るのもよし、折角のチャンスなんだ。それなりに楽しんで生活出来ればいいんだけどねー。

……あと、異世界に男として召喚されたからには、やっぱあれだろ。お決まりつつーの？

ハーレム！ ツンデレ美少女や、ケモ耳っ娘、妹キャラやら、その他諸々とめくるめくキャッキャウフフな超絶展開ッ！！

——まさに男の夢、至高、パーフェクトラダイスウツ！！

「……くくく、はははっ。——あゝあ、アホらし」

「ご生憎様。俺にそんな甲斐性はないし、また刺されでもしたら次に逃げ込む場所もねえわな。」

「でも、独りっつーのも寂しいよなー」

「欠伸を噛み締めながら腰を上げ、魔力の回復具合を確かめる。——8割。大丈夫そうだ。」

「ま、異世界旅行と洒落込みますかね。相棒？」

「物言わぬ愛杖を背に担ぎ、再び街道を北上する事にした。」

04・お約束

「誰かつ、た、助けて下さい！」

それは青天の霹靂だった。

この日、この時、この場所に（何かの歌の歌詞の様だな）偶然俺が居合わせたのはまさに奇跡、運命——否、必然と言えるだろう。

俺はゲームの《AKO》と、現状のスキルの使い勝手に差異は無いかと吟味、工夫、そして試行錯誤を重ねながら北進を続けていた。

事件が起きたのは、長く続いてた丘陵をやっと抜け、なだらかな森林地帯に差し掛かった頃だ。絹を裂く様な悲鳴と共に、脇の林から飛び出して来たのは——

美しい光沢を放つ黄金色の短い毛髪がふわりと揺れ、スツと伸びた睫毛の下には空を思わす蒼穹の双眸が納まり、陶器の様な白い肌に可愛らしく小振りな唇が映える。

極めつけに思わず護ってやりたくなる様な儂げな美声に、線が細くスラリと伸びた華奢な体躯……まさに、まさに、紛れも無く——

美少年……だとッ?! ふざけんな。

この世界に神は居ないのか。期待を裏切られて愕然する俺にハツと気付いた少年は一瞬の躊躇を見せたが、瞳に涙を滲ませて飛び付いて来る。

「助けて下さい! お願いします」

「やめろ、チエンジだ! まずは期待に心を踊らせた俺に謝れ。そして非を認めるなら性転換してからやり直せ」

無茶言わないで下さい。と、俺の腰に手を回してしがみつくと少年の襟首を掴んで引き剥がそうと試みるが、儚げな見た目よりずっと力が強い。

だが、俺もこんな展開は納得がいかん。負ける訳にはいかない。

もしやこの世界には男しか居ないのだろうか? だとすれば呼ばれる世界を間違えた。《アイギスリング》を外して自分に魔法をぶち込んで死のう。

「取り敢えず、落ち着け少年。そして回れ右して消えろ、話しはそれからだ」

「それじゃ意味ないじゃないですか! ——お願いします……」

おい、そんな縋るような目で見られても……。

——コイツ、よく見れば意外と可愛いじゃないか……ハッ。

なんで俺は惚けているんだ？ もしや俺がヒロインなのか？！
いや、それは無いわ。何より、ナニをお願いされてるのか一切不明
なんだが。

俺はノンケ、俺はノンケ、俺は……。

「——あの？」

「近づ！」

思案モードに引き籠もっていると、息の掛かる距離で顔を覗き込まれていた。このままコイツの近くに居るのはやばい、超えてはならない道をスキップしながら踏み外してやりたくなる気さえしてき
たぜ……。

などと俺が脳を沸かせていると、少年が飛び出して来た方向から
ガサリと物音がして振り返る。

「——見つけたわ、ランス！」

「ひっ？！ トリスちゃん……」

どうやら、俺は死ななくて良さそうだ。茂みから弓を背に担ぐ、
気の強そうな茶髪のパニーテール美少女が出て来た。ふむ、ランス
少年はこの機嫌の悪い少女から逃げて来た訳か。痴話喧嘩に人様を

巻き込むのは勘弁して欲しいものだ。巻き込むだけ巻き込んで結局二人で話し合って和解でもされた日には殺意を覚える。——閑話休題。

まあ、正直面倒臭いが少し位は事情を聞いてやつても良いんじゃないだろうかと思えてきた。何より俺はこの世界について情報が少しでも欲しいのだ。俺は意を決して口を開き……え？

「ボクが一番に見つけようと思ったのに」

「ランス様、急に居なくなっちゃうなんて……酷いです」
「……………」

おい、どういう事だ。後ろからそれぞれ種類の異なる美少女が現れて4人に増えたぞ？！

上から——ボクっ娘、心酔娘、無口っ娘と仮称する事にした。なるほど、なんとなくだが把握した。つまり、そう言う事が。

「ランス君と言ったか。状況は理解した、消えろと言った事は詫びよう」

俺の背に隠れて怯えるランスに微笑みかけ、宥めるようにして頭を撫でる。すると彼の顔色は見る見るうちに明るくなり希望に——

「お前は敵だ。消えろと言わずに、今すぐ俺が物理的に消す。心の狭い俺をどうか赦して欲しい」

染まる事はなく、俺の処刑宣告で一瞬にして青ざめた。

「やれやれ、」口は禍のもと——とは良く言ったもんだよなー。
どうしよう。

「……………」

左右の双剣を巧に操るショートカット無口っ娘の、息もつかせぬ鋭い連撃を躲しながら穩便に済ませる方法は無いかと思案する。——なんでこの娘さんはレオタードみたいな装備なんだろうか？ 相手の判断力を奪うと言う理由でなら効果は抜群だと評価しよう。

無口っ娘の連撃が途切れ、彼女は呼吸を整える為に俺の後ろを一瞥してバックステップする。俺もそれと同時に地面に手を突き、しやがみ込む。

——ブオンッ——

無口っ娘は俺をここに誘導してたのだろう、しやがみ込んだ直後に俺の頭上を、背後から大斧が掠めて行く。すかさず斧を持ったボクっ娘に足払いをすると、彼女は自分の振るった斧の遠心力に身体を振り回されて派手に転倒した。

「……なるほど縞々か」

「っ？！ み、見るなバカー！」

失敬な、ブリーツミニで戦闘する方がおかしいだろうに。――つと、やべつ。

「この、変態っ」

白いフードを被った心酔娘が氷の矢の束を飛ばして来るのを右前方、左後方と稲妻型に回避する。
ジグザグ

「皆止めてよぉっ！ あのお兄さんは誤解だって言ってるじゃないかー」

「アンタは黙ってなさい！」

おろおろと仲裁を掛けるランス少年と、それを睨みつけて叱咤する――トリスだったっけ？

なんでこんな事になったのかと言えば、彼らの会話の流れから推測するに多分こう言う事だ。

ランス少年は最近暗殺者に狙われているらしい。

フェロモンムンムのランス少年の取り巻きである彼女達はランス少年を護ろうと、付きっきりで世話を焼いてるらしい。

そして、それに嫌気が差したランス少年が彼女達の間について逃亡を謀る、そこで俺に出会い助けを求めた。

で、俺が彼女らの前でランス少年に向かって消すなんて言っちゃ

たもんだから、もう大変。愛しいランス様を狙う敵と認識されてしまったのだ。

俺の『誤解ですう、冗談だったんですう』。モテない男の嫉妬なんでしょう』と言う必死弁解も功を成さず、今に到る。

そりゃ、俺を弁護するランス少年の言葉も聴き入れず、非武装状態の人間に本気で攻撃仕掛ける人達からは逃げたくもなるわな。

俺もそろそろ一度に4人の美少女に同時に迫られて（攻撃対象的に）キャッキャウフフな状況に飽きて来たので終わりにするとう。

夕方には街に着きたいしな！。ついでに新作の使い心地も試さねば。

《AKO》で熟練度を極めたスキルは、決められた制限内であれば自分で好きに設定を弄って派生スキルを作る事が出来る。そしてそれを専用アイテムに刻んで他のプレイヤーに習得させる事も可能なのだ。俺の亀甲縛りも予約が殺到してたのにな……。

さて、コイツは使えるだろうか。――対象数設定、固定、追尾……。行けそうだな。

「人の話を聞かない奴は調教だ！！」

04・お約束（後書き）

たまには女に襲われる美少年を助けたっていいじゃない。

05・誰得（前書き）

評価、お気に入り登録ありがとうございます

数字がとんでもない事に……ゴクリ

05・誰得

——対象をイメージ、数は一人につき、……8本でいいか。後は俺の精神力の問題だッ！ まあ、最終警告はしておこうかねー。

俺は両手を挙げて敵意が無いこと示し——と言っか最初から無いんだけども。

「えー、君達。俺の話を聞き賜え。正直ランス君の事は本当、微塵も、これっぽっちも歯牙にかけるつもりはないので、迅速かつ穏便に黙って武器を引いて見逃してくれ」

「——そんなのっ！」

はい、決裂っぽいです。弓に矢を番えながらこちらを睨みつけ吼えるトリス嬢。やだ、怖い。

「そうか、心苦しいよ。俺も出来ればこんな事したくなかったんだが……」

——などと心にもない事を然も沈痛な面持ちで吐いてみせる。関係ないけど腹減ったな。

あー、この世界の女の子って皆こんな感じなのかね？ だとすれば行く先々で俺は辟易としなければならぬ。ランス少年から漂う魔性のフェロモンが人を狂わせる、とかであって欲しい。

まったく。意気揚々と美少女を助けて”The・異世界”ってイ

ベントを体験してみたかったのだが、美少女に襲われる美少年を助けるってなんなの。夢とは斯くも儚く朧げな事が……。

まあ、ハーレムなんて実際苦労するんだろうね。ランス少年も大変だな……めんどくさ。街についたら何食べよう。

「黙れっ！」

夕飯の献立を考える俺目掛けて彼女が放った矢を手刀で叩き落とす。トリス嬢の持つ弓は《必中の弓》、効果は読んで字の如くだ。躲しても数分は矢が付いて来るからたたき落とすなり、なんなりしないと防げない心底鬱陶しい武器だ。——あれってレア度高いんだけどな……彼女のLvは200にも達してない様だし、この世界だと有り触れてんのかな？———そういや、この世界も《AKO》の時と食料品って一緒なのかな。俺、焼き魚好きなんだよな！。

とにかく、彼女の今後の為にもここはビシツと言っておかないとな。疑わしい人物に問答無用で攻撃を仕掛ける様では危険窮まりない。今までどうやって過ごしてたんだろうか。———ああ、肉じゃがもどきも捨て難い、改めて思っけど仮想現実で食べ物の味を再現出来るって凄いやな。

さて、杖無しだとInt値が低くて制御面に多少の心配があるが……発動つと。言わばこれは愛の鞭だ。そして、今日の夕餉ゆうげは焼き魚に決めた。さっさと街へ行こう。

「———人の話しは、きちんと聞きましょう！」

《リグル・ワーム》

とつくに発動待機時間を終え、抑えていた魔力を解放する。《バインド》を更に弄くり倒して改良を重ねたものだ。複数対象を同時拘束可能な頼もしい触手君達である。

ここに来る道すがら色々試してみたけど、《AKO》時代の時よりも設定の自由度が上がっているみたいだ。”対象を拘束”と言う命令だけは不変っぱいから応用は利かないけどな。

——俺、いつかコイツらを自由自在に使い熟して、一瞬で大人数を亀甲縛りにするのが夢なんだ……。

と、戯れ言はさておき、設定の幅が増えるのは大変遊び甲斐がある。本来は光りの粒子帯である為に黄金色をしているが、わざわざ色の設定までしたのだ。——ただピンク色にただけなんだがね。とても……卑猥です。色って不思議。

さて、一人につき8本割り当てられた触手君達が彼女らの足元から出現し、拘束。突然ピンク色のウネウネに四肢を拘束された彼女達は口々に悲鳴をあげる。

「なっ……」

「……………」

「なんだよこれー」

「——魔導師?!」

彼女達は一様に驚愕の表情を浮かべ顔を見合わせる。そういや俺、体術しか使ってなかったもんな。あれだけ攻撃を躲して動いていたから意外に思っただろう。

「うわ〜ん。服の中に入って来ないで〜」

……あれ？ ランス少年なんで君も縛られてるの？ 彼の衣服の中に触手が侵入し、頬を赤らめて身をよじらせている——誰得だよ。それを見てトリス嬢が見目麗しい顔を大きく顰めて憤慨する。

「あんたやつぱりランスをつ！」

謂れない酷い誤解だ、死にたい。美少年を触手で騷る暗殺者つて斬新過ぎるだろ。そもそも俺は暗殺者でもないし、そんな趣味も無い。残りの名も知らぬ三人娘達が俺に向ける視線もどこか冷たいものを含んでいる。

どうやら《リグル・ワーム》はまだ調整の余地がありそうだ。Int値とかの以前に彼女ら拘束する、5人×8本＝計40本の触手をいちいち脳内で制御出来ない、それぞれが好き勝手に身体をまさぐっている状況だ。

考えて見て欲しい。人の腕は2本しかないが、それが急に38本増えた様な感じだ。とても操りきれん、企画倒れも良いとこだ。

——いや、俺はいつか必ずやり遂げて見せる。せつかく熟練度を極めたんだ、とことん突き抜けるしかない。

「下種が」

「……………」

「変態っ！」

「もうお嫁に行けません」

いいや、クリエイターと呼んで頂きたい。ランス少年が静かだと

思ったら恍惚とした表情でビクンビクンと痙攣している——だから誰得だ。

どうした事か……彼がこうなっている状態では、とても穏便に事が運ぶはずがない。そもそもなんで一人だけそんな状態になってるんだよ。俺の状況は悪化の一途を辿るところか、超特急でほぼ直角の坂道を駆け抜けていくようだ。主に自業自得で。

”一刻でも早くここから立ち去りたい”——そう決意した俺に一片の隙もなかった。

「《解除》」

本当に敵意はないと言う事を示す為にランス少年のバインドだけを解除し——

「さらばだっ」

踵を返して一目散に街に向かって駆け出した。距離的にはもう1時間も掛からないはずだ。そもそも最初から関わる事が間違っていたのだ。俺は人の話を聞かない彼女に刺されたばかりである。

暖簾のれんに腕通し——平和にお話し合いで解決出来ないなら逃げるのが一番だ。

魔力供給を断っている所以她女達の触手も数分と保たないだろう。ランス少年には観念して俺の代わりに立派なハーレムを築いて欲しい。俺には無理だ。

嘆息して空を仰いで見れば、少しずつ日も傾き始めてきている。

俺は速度上昇魔法を掛けてペースを上げる事にした。

05・誰得（後書き）

そのうち残りの三人もきっちり描写したいなあ。

06・だがそれがいい（前書き）

ちよつと中途半端な長さです。風景描写が苦手過ぎて発狂しそう…。

06・だがそれがいい

道の左右を鬱蒼と茂る樹木に挟まれた、何処か既視感を覚える街道を駆け抜ける事、数十分。

空が夕暮れの紅を差し、辺りがすっかり薄暗くなって来た頃——森林の切れ目の先に伸びた、なだらかな丘を登ると、途端に視界が開けて思わず息が漏れる程の風景が一望出来た。

丘から見下ろす眼下には、濃い緑の絨毯がいつぱいに広がり、茜色の空との絶妙なコントラストを魅せ、遙か北に視線を向けると雲霞を纏う連峰が壮大な存在感を放っている。

「——はは、すっげー……」

仮想世界でも見事に現実と見紛う様な風景を再現していたが、これはそれとは一線を画していた。——頬を撫でる風も匂いも、微かに肌に感じる湿気もなにもかもが……言うなれば、そう。まさに”本物みたい”と言ったところだ。上空から聞こえる甲高い鳴き声に視線を向けると、逆V字型に連なって隊列を組み飛翔する鳥系の魔物達の姿も見取れる。

俺は街道で覚えた既視感を払拭する為に、景色を眺めながら暫し頭の中の記憶を掘り起こしてみる——草原を越えた先の平地に、北

の山脈の方から東側に流れるの大河と、灰色の石垣に周囲をグルリと囲われた街が見えた。

それが、いつかゲーム内で見た情景と見事に符合した。ここはミドガルズの南部の^{サースクリーランド}様だ。そしてあの街が、南部の交易の中心地《商業都市フランチエス》だ。

……今世界はアスガルズって名前になってるし、街の名前も変わってるかもな。

いや、やつと此処まで来ることが出来たな。速度上昇を掛けて割と本気で走ってきたのだが、途中で休憩を挟みながらの進行だったので、思ったよりも時間が掛かってしまった。

元々ゲーム中にも再現されていた疲労感だが、それは設定されたスタミナゲージなる物が消費されたら身体に僅かな疲労感を感じる程度で、その疲労感は立ち止まってゲージが回復すれば即座に消える物だった。

しかしまあ当然と言えば当然の事だろうが、この世界だとそう簡単にはいかないモノで——歩いてる時には大した疲れを感じなかったが、走れば走る程疲労感は確実に蓄積されていき、ゲームの様にすぐに回復復活とはいかず、しっかりと呼吸も乱れるし、身体の倦怠感も顕著に現れる。

試しに一時的な超高速状態になれるスキルを使用して見たが、結果は言わずもがな、予測通りと言うか……マラソンをスタートから全力疾走する様な物だった。あー、吐くかと思ったわ。

現実の時よりも、ずっと体力は強化されてるみたいだけど、ゲー

ムの時と同じ様に立ち回ろうとすると痛い目を見るだろうな……慢心せずに、これはしつかりとした”現実なんだ”——と、心に刻み込んでおかねばならない。

実際死んでみないとわからんが、HPが0になればリスポーンと言いつ訳には行かんだろうしな。と言つか十中八九死ぬだろ。

色々とスキルの使用感について考察する事も必要かな。いきなり実戦で使って思わぬ事故が起きないとも限らない。——とまあ、頭を使うのは後だ、後。

ともかく今は腹を満たすの事の方が先決だ。人間の身体とは現金なものであり、目的地が見えた事によって身体の疲労感は吹っ飛び——俺の脳内の最優先事項は、好物の焼き魚を胃に納める事でいっぱいになっている。

街の目の前に着く頃には復活した気力も再び擦り減り、身体もずいぶんとヘトヘトになっていた。

ゲームの時はパーティメンバー募集等で活気があった南門だが、ここでは魔物が出る南側からやって来る人は少ないみたいで、夕方と言う事も重なってか人の数は随分疎らだった。東側には海と港町があったと思うので、そちら側から来る人の方が多いのだろうと思う。

「お疲れ様です」

揃いの紺色の制服を着て、槍を持つ二人の門番らしき中年と青年に、軽く手を挙げてアーチ状の門をくぐり抜ける。特に彼等に身分の証明を求められる事はなく、会釈が返って来た。魔物の警戒をしているだけなのだろう。

確か南側にはNPC兵士の詰め所の様な建物があつたと思つたんだが、それは今も変わっていないみたいで、入って左手側には見覚えのある赤茶けたレンガ作りの頑丈そうな建物と大きな運動場様な物があり、そこでは門番と一緒に制服を来た人物達が歩いているのが見て取れた。

色々と観光してみたのはヤマヤマだが今日の所は疲れた身体を労つて、散策は明日の明るいうちに行うとしよう。確かプレイヤーが泊まる事の出来る宿が西側にあつたはずだ。大小様々で、形も色も不規則な石畳が敷き詰められた道を懐かしむ様に踏み締めて街の西を目指した。

幸いな事に移動中に耳に入る会話は全て日本語で理解できるし（まあ、今更だが）、街で見かける看板等の文字もひらがな、カタカナ、ローマ字等で不便はなさそうだ。さすが国産MMOが元の世界と言つた所だろうか……いや、都合はいいけどさ。

「ん、着いたー」

どうやら宿泊施設的位置もゲームと変わっていないようで、俺は迷う事もなく辿り着く事が出来た。南部側の中心都市と言うこともあつてか街は活気と喧騒に溢れ、普段通りゲームをしている様な錯覚に陥いる。

「違うと言えば――」

小さく呟き周りを見渡して見ると、視界に移るのは雑多な人外の人々。《AKO》のプレイヤーの種族は人間しか選べなかったが、街やクエストのNPCとしては色んな種族が存在していた。

そして必然(?)的に美麗なエルフ娘やケモノ耳幼女、他には吸血姫と呼ばれる、とあるクエストで共闘出来るNPCなどは諸兄達から極めて人気が高く、有志を募ってファンクラブなるモノが乱立し、《ケモミミ幼女を愛でる会》に始まり、ミニスカート姿のNPCの周りには正座や体育座り待機で長時間――果てには一日中眺め続ける猛者達までもが現れた。

さすがに他の真つ当なプレイヤーからの苦情が殺到した為に、そのNPCの周りで数分以上静止しているとNPCが恥じらいながらプレイヤーに雷を落として即死させると言う仕様になったが、『だがそれがいい、寧ろご褒美だ』と言った中毒者を多数輩出する事と相成ったのも記憶に新しい。

先ほど述べた基本的な種族以外にも――額に三ツ目の瞳があり、吊り眼が多い種族^{トレス}、耳に魚のヒレの様な物がついた女性だけの種族^{セレン}、背中に翼の生えた《ピユイア》等等。プレイヤーが人間しか選択出来ないと言うのにNPC種族の多さには驚かされたものだ。

いつかプレイヤーキャラとして実装されるのが夢だった種族達が俺の目の前で歩いているのを見ると自然と頬が綻ぶと言う物だ――あのエルフ殆ど裸じゃねーか……けしからん。いいぞ、もつとやれ！

「――つと」

なんとなく周囲の俺に向ける視線が不審なモノになったので、そくさと近くの宿に飛び込むとする。

「いらつしゃいませ。一名様でございますか？」

俺を迎え入れたのは、腰まである黒髪を後ろに撫で付けて縛り、モノクルを掛けた初老の——執事？

「あ……そうです。部屋空いてますか？」

なんでこの人執事服なんだ？ 中の内装は一階部分が酒場兼食堂になった——どうみても普通の宿と言った感じなんだが……いや。気にしたら負けだ。

内心に渦巻くツツコミ衝動を押さえ込み、俺はスルースキルを磨く事にした。今じゃ執事服がデフォなのかも知れん。

「あら、いらつしゃい。お泊りですね？ 空いてますよー」

「（な……に……？）」

と、後ろから現れた妙齡の女性は、普通に動き易そうなワンピースにエプロン姿だったのを見て俺の心に衝撃が走った。……が、こんな事くらいで俺はくじけない。執事の男性を一瞥しつつ女性に代金を訊ねる。

「一泊、何ルクスです？」

「え？ と、朝夕食込みで一泊500ルークからですけど……」

うえ？ ルーク？ …… もしや——俺はメニューを開いてイベントリから《AKO》の通貨である100ルクス硬貨を5枚取り出して彼女に見せる。

「……あゝ。ごめんなさい、お客さん。何処のお金かわかんないけど、うちじゃ——と言うか、この国じゃこれは使えませんよ」

10ルクス硬貨を一枚手に取り、裏表を物珍しげにしげしげと眺めると、女性は申し訳なさそうに苦笑して硬貨を返す。

……つまり、約4億ある俺の手持ちのゲーム内通貨はこの世界ではなんの価値もなく、文無しらしい。

「（俺の、焼き……魚……）」

06・だがそれがいい（後書き）

MMOに限らずNPCモブキャラでやたら人気なキャラって多いですよね！。

宿屋の幼女枠を切り捨て、執事爺を投入。
彼の今後の活躍にご期待下さい（？）

07・そう言う所、嫌いじゃないよ？（前書き）

登録評価ありがとうございます！

07・そう言う所、嫌いじゃないよ？

乳白色系の煉瓦作りの建物が整然と軒を連ね、隣り合う建物同士が、魔石を燃料とする灯籠の備え付けられたアーチで等間隔で結ばれている。灯された燈籠が柔らかな蛍光を放って街頭を明るく照らす。

通りではまだ日も落ちたばかりだと言うのに、顔を赤くして気分よさ気に肩を組んで歩き、すっかりと出来上がってる男達や、鎧等を纏った冒険達のパーティーの団、母親に『はやく、はやく』と、はにかんで手を振り催促する子供、腕を組んで身を寄せ合い仲睦まじげに歩く男女等など——『向こう』となんら変わらなく人が生活しているんだな、と感じさせられる風景に笑みが零れる。

「（なんつーか、良いな）」

元の世界が恋しい訳ではないが、別世界でもこう言う安寧を感じれるのは心底嬉しい。——外にや魔物とかも居るけどな！。

ま、これで俺の隣にも愛しい人が居れば最高なんだがね。幸せそうなカップルが羨ましいぜ……。幸せになれよ——いや、爆発しろ。思わず心がほっこりして毒が抜けちまったぜ……。自重しよう。

「っと、あつたあつた」

賑やかな街の雰囲気を楽しみながら散策する事約10分。剣と盾の絵が描かれた看板を掲げ、外壁に蔦が蔓延った大きな酒場風の建物に辿り着いた。

いやー、一文無しで飯も泊まるところも無いからアイテム売って換金しようって魂胆なのですよ。

宿で執事のおっちゃんに訊ねてみた所、魔物の部位は基本的にギルドとかでしか扱ってくれないらしいわ。ゲームだと買物が出来る店なら何処でも買い取ってくれたんだが、目利きの問題で無理らしい。致し方ないか。

他にも買い取りを行う商人に売り付けるって手もあるらしいが、いちいち探るのが面倒なので却下。ギルドは宿泊施設帯のある西区に居を構えるので、散歩がてらに辿り着く事が出来た。途中の屋台の食い物の匂いに何度理性を失い掛けた事が……。つ。閑話休題。

そんな訳で俺は、両側開きのシンプルな茶色い木製扉を意気揚々と開いて入店。

元々《AKO》と言うゲームのギルドは俗に言う冒険者の依頼仲介所——と言う役割はなく、そこで行われているのは『魔物の素材の買い取り、稀に討伐が依頼される賞金首モンスターのクエストを受けれる』と言ったモノで、基本的にクエストは街中のNPCに話

しかけてプレイヤー自ら探すと言ったスタンスなのだ。

もちろん開発者が巧妙に隠したクエストが発見される度に専用揭示板は祭状態、対応NPCの前に行列が出来るのは毎度の事だった。隠しクエストの最後に出てくる魔法攻撃力のやたら高いボスモンスターの盾にされ、皆で俺をグイグイ押さえ付けるもんだから、途中で通常攻撃の一撃で俺が即死して皆に盛大に噴かれたのも今では良い思い出だ。

——とまあ、ゲーム上では印象の薄かったギルドだがここでは正常に機能しているらしく、一般的なゲームの様にギルドで依頼を受注する感じになっているみたいだ。

扉を開けてすぐに視界に移るのは屋内の中央に鎮座する円形のステージ。このギルドは酒場も兼ねているので踊り子のショー等も行われるのだらう。ゲームの時にも定時がくれば際どい格好のNPCキャラが、楽隊の奏でる民族的な音楽に合わせ妖艶に舞っていたと思う。

ステージを囲む様にして四角い木製テーブルが並び、客層は言わずもがな、おっちゃんばかりで席はほぼ満員だ。異世界にありがちな荒くれ者の集まる酒場と言う雰囲気はなく、皆楽しく飲んでいるようだ。

左手側は半透明な仕切り板で区切られたソファ一席になっており、こちらには若い客層が多く見て取れた。入口の右手側にあるカウンターからウェイトレスの女性が途中でお尻に手を伸ばす客の頭を引っ叩きながら、せかせかと注文の品を席へと運んでいる。いいのかそれ（叩いて）で。

ふむ。俺もショーを見てみたい気もするが、今はギルドだ。と言うか飯だ。魚だ。焼魚だ。後ろ髪を引かれる思いで席の間を摺り抜け、ステージ脇に設置された階段に歩を進める。

幅が広く緩やかな弧を描いた階段を登った先の通路脇には掲示板が張っており、その前で真剣な眼差しで首を捻り、壁に視線を巡らせている人達の姿があった。

俗に言う《依頼書》ってやつだろうか？ 俺も興味本位で彼等の横に並んで達成期間がフリーとなっている依頼書を流し見てみる。

「（どれどれ……）」

『父の仇を取りたいんです。グランザ山脈の《死竜》を討伐して下さい』

——ほう。仇討ちか……。

『求む、オリハルコンの総入れ歯』

——えっ、何を喰う気だ？ そんなに硬い煎餅でも存在するのか。立派な武器になるだろうな。

『チームメンバー募集。年齢20歳前後 種族不問（出来ればエルフ） 支援魔法の使える方 スタイルが良いと尚、良し。 髪の色は〜〜（中略）〜〜そして美少女に限る（出来ればエルフ）』

——具体的過ぎるわ、阿呆。 どんだけエルフ強調すんだよ。……だが、決して自分の欲望に妥協を許さないその心意気や良し。俺、アンタの事嫌いじゃないぜ……？ 陰ながら応援させて貰うとしよう。

『逃亡を謀った《勇者：テルテル》の捕縛。 特徴：人間族 年齢43歳 〜（中略）〜 生死問わず』

——……ッ？！

依頼書は、まともそうな物からこんなの誰が受けるんだよって奇抜なモノまで多種多様な内容となっていた。これを見た感じだと受付で頼めば、割とどんな事でも受注してくれるっぽいな。請ける奴が居るかは別として。

通路を突き当たった先の扉の上を見ると《素材換金所》と書かれたプレートが張ってある。素材の換金を終えたと思われる若い男女の三人組が出て来た。

腕を組んで前を歩く金髪の派手な男女は恋仲かな。その後ろから少し間を開け、前の二人と比べると随分と地味なショートボブの女の子が追隨している。三人とも頬を綻ばせている様子から、手応えのある収入があったのだらうと窺い知る事が出来た。

「（俺もほくほく顔で宿に帰るんだぜ！！）」

妙なテンションのままノブのついた換金所の扉を開くと、宴会場の様な一階部分とは打って変わって落ち着いた雰囲気醸し出す空間となっている。

部屋の中央に円形のモノがあるのは変わらないが、ここにあるのはステージじゃなくてギルド職員が受付をする円形カウンターだ。

紺色を基調としたシックな内装と調度品、ツルツルとしたタイル質の床に天井には意匠を凝らしたシャンデリア。持ち込んだ品の鑑定中に簡単な飲み物を頼めるのかサービスなのかはわからないが、左手側にはドリンクカウンターが設置されている。

右手側にはふっくらとした坐り心地の良さそうな三人掛けのソファーが何脚も置いてあり、大欠伸をして伸びをする男性や雑談に花を咲かせる女性達、優雅にティーカップに煎れられた飲み物を口に運ぶ白髪の壮年男性等が座って寛いでいる。

受付のギルド職員にトランプ大のカードを差し出す青年の姿を見て、俺は安堵の息を漏らした。

「（ああ、よかった。素材の仕様は変わってないみたいだな）」

《AKO》は全年齢向けのゲームなのでモンスターからいちいち素材を剥ぎ取ると言った動作は必要なく、倒した魔物の素材——所謂《ドロップ品》はデフォルメされたイラストの描かれたカードとして各自のインベントリに自動送信されるのだ。

そのカードを用いて装備を作ったり、強化したりと使い道は様々だった。——と、ここで一つ疑問があるんだが、今日倒したオーガキングのドロップが入ってないんだよね……。

倒してから一分程で死体が光の粒子になって消滅……ここまではゲームと一緒にだったけど、ドロップ品の入手は無し。何かカード化する方法が別にあるのかも知れん。要検証だ。

「こんばんは、すみませんけど、これの鑑定お願いしまーす」

「はい、こんばんは。どの魔物の部位でしょうか？」

インベントリ内から所持数に大量のストックのある《黒殻翼竜の外殻》のカードを一枚実体化させて受付の女性に差し出す。

「はいはい、少々お待ちを……？」

女性は愛想の良い笑みを浮かべてカードを受け取り、視線をカードに向けると一瞬の間の後、眉をひそめて表情を固まらせ、こちらを伺うように一瞥して首を傾げ、再びカードに視線を落とす。

「……あの？ 何か……？」

目を剥いて驚愕の表情を浮かべた彼女の唇がわなわなと震え——

「しゅ、シュヴァルジエイド素材~~~~ッ?！」

耳をつんざく彼女の絶叫が部屋に響き渡り、室内に居た者達が身体を跳ねさせて一斉にこちらに振り向く。

……ボス素材はダメだったか……?

07・そう言う所、嫌いじゃないよ？（後書き）

果たして、主人公の腹は満たされるのか……っ?!

ドロップ補足

チームを組んでいる場合はメンバー各員にランダムでアイテム振り分け（ログは見える所にしっかりと残る）

08・出稼ぎって大変

《黒殻翼竜・シュヴァルジェイド》——通称、黒鎧トカゲ。ありていに言うなれば、黒い甲殻を纏った尻尾の長いワイバーンと言った所か。生物的な目に当たる器官がなく、嗅覚と聴力に特化した羽トカゲ様で、《AKO》のボスモンスターの中では中級の強さだ。

飛ぶわ、硬いわ、状態異常が鬱陶しいわで近接系のプレイヤーが倒すのはそれなりに骨が折れる相手だが、魔導師系プレイヤーにとつては魔法が効きやすく、比較的に安全に倒せる上に防具の強化用鉱石を確実にドロップするので絶好のカモにされていた。

誰でも条件さえ揃えれば一時間に一度は戦える事と、出現場所が《クエストダンジョン》で独占出来ると言う事もまたそれに拍車を掛けている。

——つてのが俺の認識だったんだが、こつちだとどんな扱いになつてるんだろうか？ バランスにも困るがレベル200相当の六人チームとかなら、苦もなく終始安定して倒せるはずだ。

最初に見たジンバルトのおっさんのレベルが特別高いっつー訳でもなく、ここに居る冒険者のレベルを見て見ても200近いのはちらほら居るし、別段珍しいモノでも無いと思つたんだがなー。

「幻の——」

「一体何処で——」

さすがに周りのどよめきと視線に耐え切れなくなり受付のおねーさんに苦笑いを浮かべると、彼女もハツと我に返って佇まいを直し、咳ばらいをする。

「失礼しました。あの、こちらを一体何処で……？」

彼女は懐疑心の籠った視線で無遠慮にこちらを窺う様にして訊ねる。

ふーむ、大して強くもない魔物の素材で驚かれ、尚且つ『幻』って単語を漏らす周りの反応を見ると、会う為の条件が明らかになつてないって所だろうか？ それか、とつくに絶滅しちまつてるかってとこだろうかね？

そんなに珍しいんですか？ って質問で返すのは藪蛇だよな。となれば――

「……うちに古くから伝わる家宝なんです……」
「……っ?! なるほど、そんな大切な物を本当に売ってしまったのも宜しいので?」

俺は全身からありつたけの悲愴感を醸し出し、不本意だが然も手放さなければならぬ切迫した事情があるかの様な演技をしてみせたが、どうやら当たりらしい。彼女が憂いた表情で怖ず怖ずと問う。
――や、全然問題無いっす、在庫大量ですからねー。なんかごめんなさい。

「はい……、俺には今すぐに現金が必要なんですっ」

主に夕飯の為に。俺の葛藤の末に迷いを切り払った（かのような）

真剣な物言いに、職員の女性もそれならば、と頷いて了承の意を示す。

「そうですか……、私どもとしましては滅多に市場に出回らない素材を売って頂けると大変助かります。——ギルドに登録はなさってますか？」

「あー、登録してないと買い取り不可だったりします？」

だとしたら登録しなくちゃなー。住所登録とかあったらどうすりゃいいの……。と俺が考えるのも束の間に、女性はカウンター上に置かれたA4大の冊子を開き、まるでパンフレットの様なソレの内容を指し示し説明を続ける。

曰く——ギルドに登録していれば買い取り価格に色がつく。

曰く——ギルドに登録しなくとも依頼を受ける事は可能。

なるほどね。掻い摘まんで説明して貰ったが、かみ砕くとこんなところか。

ギルドは仲介所つてより、“冒険者”つー職業の支援機関みたいな感じ。未登録でも依頼やサービスを受ける事は出来るが、高い初期登録費用と年会費を納めれば携帯端末デジタライズが支給され、ギルドのサービスを割安で利用出来る。登録者の死亡時には残された遺族にギルドから補償金等が支払われるらしい。

……なんか誰でも簡単になれるっつーイメージと違って、しっかりしてそうだな。携帯持ってたジンバルトのおっさんはギルド登録デジタライズ

者って事か。

ちなみに携帯の機能は埋め込まれた共振魔石を利用した念波通話、自分の行った事のある範囲のMAP機能、有事の際の身分証明——等等など便利機能が備わっているらしい。俺の《デバイスライザー》とはまた違った機能みたいだなー。ちと欲しいかも。

登録してないが売っても問題無いとの旨を伝えると彼女は一礼して微笑む。

「では、この札を持ってあちらの席でお待ち下さい。——宜しければこちらの資料もどうぞ」

彼女から数字の6が書かれた木札と説明に使用したパンフレットを受け取り、誘導されるままに空いているソファーに腰掛け感触を確かめる。むう、うちの固い安物ソファーと違って、なんと言う高級感。そろそろ買い替え時だと思ってたんだよね……って今は気にする必要ねーか。

甚く庶民的な自分の思考に内心で自嘲しつつ、ソファーの背もたれに体重を預けて天井を仰ぐ——っは。しかし、この調子じゃ《破滅の錫杖》ルインズ・ゲートに限らず、俺の持つてる他の武器とかもやばそうだなあ。

趣味で使わない武器まで収集してるが、高位のレアドロップ品とか下手すりゃ神器級の扱いされてそうだなあ。素材についても意外な物が貴重だったりするかも知れん、今後はその辺も要注意だな。

「おい、あんちゃん」

ぼんやりとシャンデリアを眺めていた視界が突如塞がれ暗くなり、何事かと思えば俺の背後から強面の大男がこちらの顔を覗き込んでいる。これはあれだろうか？ よくある、ギルドで絡まれた挙げ句、相手を圧倒的な力でのしちやうアレですか？

「……なんでしょう、か？」

「お前……その若さで苦労してんだなあ、グスッ」

恐る恐る訊ねてみれば、2mを超えるであろう大男が俺の頭上で目尻いっぱい涙を溜め、俺の太もも程の大きさのある腕の甲で顔を拭いながら噎び泣く。

……えっ？ この展開は読めなかったわ。もしかして同情されてる？

「——わりいわりい、ちょっとお前さんの事情が聞こえちまったもんでな」

橙掛かった燃えるような真紅の長髪を後方に流し、野性的で豊富な眉毛に瞳孔が縦に割れ獰猛さを感じさせる鋭い双眸は髪と同じ真紅。彫刻の様な造形の逞しい鼻筋に口元からは鋭い犬歯が覗く。

臙脂色えんじのレザーコートを着こなす強面の大男が俺に対面してソファアーに座る。見たまんま赤龍系の《ドラグニル（龍人）》の壮年男性だ。大柄な彼が座ると三人掛けのソファアーも小さく見える。

「ええ。まあ、色々ありまして」

小さじスプーン一杯分程の罪悪感を感じつつも話を合わせる。周りが男泣きする彼に向ける生暖かい視線から予測するに普段からこんな感じなんだろうと容易に推測出来た。

「そうかそうか、俺とこの娘と歳もあんま変わんねえのに……俺の名前はガアヴ。あんちゃんの名前は？」

「俺は……」——「コーキと言います」

「そうか、コーキか。良い名前じゃねえか！」

即興でコーキと名乗ってみたが殊の^{じつのほか}外好感触。よし、今日から俺はコーキだ。……もちろん由来は俺の極めるべき道から取った。悔いはない、本望だ。

その後もガアヴのおっさんと当たり障りのない嘘を交えて他愛ない会話を楽しんだ。墓穴を掘る訳にはいかないので、適当にはぐらかしつつ聞くに徹したが話の内容から特にこれと言って得るモノはなかったな。

唯一の収穫はシュヴァルジエイドは昔から存在こそ噂されているが、出てくるのは古くから残された素材が稀に発見されるのみで、直接討伐して素材を手に入れるなんて事は数百年の間ないらしい。ここから近い事だし、今度検証しに《クエストダンジョン》に挑戦してみるところか。

そんなこんなで、ガアヴのおっさんの『出稼ぎに出てるんだが、たまに家に帰ると居場所がない』——と言うなんとも世知辛い話を聞いてると、俺の番号札の数字である6が読み上げられたので、話を切り上げ彼に別れを告げる。

「おう。俺はこの時間に大体ここに居るから、なんか困った事があったら相談しろい」

「あ、はい——いででで」

のそりと立ち上がった彼がニツと男臭い笑みを浮かべて俺の肩を叩く。ちょ、おっさん力加減考えろ……よ？ 不意に彼が腰に佩びた一振りの刀に目が留まる。漆塗りの簡素な作りの鞘に納刀されているが、俺の記憶が確かならアレは——

「……ガアヴさん、ソレって」

「ああ、コレか？ 《雷切》って武器だ。ヴァリアントヴォルグってデッカイ豹を仕止めた時に手に入れたんだ。結構な業物だぞ、力カッ」

肩を上下させて豪快に笑う彼に合わせて俺も頬を引き攣らせ苦笑する。——《破滅の錫杖》^{ルインズ・ゲート}級の武器じゃねーか！ シュヴァルジエイドの素材より、そっち《雷切》のがやばい代物なんだが……ますますこの世界はわからん。

とにかく色々調べるのは後回しだ。さつさと料金受け取って今日はずつくり休もう。明日市場を覗いて物価の勉強も必要だな……。

暫く座っていた為に生じる四肢の倦怠感を伸びをして払い飛ばし、受付へと向かう事にした。

08・出稼ぎって大変（後書き）

龍人の幼女？　いいえ、龍人のワイルド系おさーん追加です。

華が足りない？　承知の上です、フヒヒ

ちなみに、亀甲 ↓ きつこう ↓ きつこー ↓ こーき
安直でごめんなさい。

09・前途多難（前書き）

遅くなつてごめんなさい、少々文字量UPしました。

09・前途多難

ライティング

照明魔法を封じた魔石のランプが控えめに灯り、室内は心地好い薄暗さに包まれて落ち着いた雰囲気を醸し出す。

20畳程の広さの酒場兼食堂を見渡せば、その風貌から冒険者と思わしき人々が多数を占め、それぞれが気の合う仲間と机を囲んで陽気に食事をとっている。

目の前には淡い水色のテーブルクロスが敷かれた木製の丸テーブル。卓上にはこれまた木製の食器類が整然と並べられ、そこから放たれる温かな湯気と食欲をそそる香ばしい香りが鼻孔をくすぐる。

米が一粒一粒立った銀シャリ、サツマイモや海藻類の入った味噌汁風（無色透明）の吸い物！——そして季節的には春だと言うのに、季節感を無視した目映く銀色に輝く秋刀魚モドキ！

いや、好きだけどさ。風情と言うか、旬と言うか……鯖とかも好きなんだけど！——って異世界だから旬とか、わかんねーや。ゲーム内でも特別な物以外は年中食べれたしな！

結局、俺の売ろうとした《黒殻翼竜の甲殻》は30万ルークでの売却と相成った。“幻”とか大層に言われてる割にはとんだ肩透かしを喰らったが、ゲーム時に店売りした時の価格が7千ステラと

言う事を考えると十分破格だな。

そして思わぬ収入に意気揚々と宿屋に凱旋し、念願の夕飯に有り付く事が出来たのだ。ギルドの場所を教えて貰った事もあったので、最初に入った執事の爺さんの居る宿屋《雪鳥の止まり木》に取り敢えず三日契約で泊まる事にした。

色々と不安もあったが、夕飯に焼き魚の定食を出せると聞いて即決したのだ。ああ、ちゃんとこの世界にも箸があるのが嬉しいな。味噌汁（？）も見た目こそ違うが、ちゃんと味噌の味がするし……。

ただ一つ不満があるとすれば醤油が欲しい。魚は塩味が効いてて十分に美味しいのだが、何か物足りない。……いや、それは贅沢つてもんだな。今この現状に感謝して――

「コーキ様、どうかなさいましたか？」

「おお。何も無いデス、料理美味いっす」

味噌汁を啜っていると、気付かぬうちに執事さんが俺の横に直立して控えて居た。……この爺さん、気配感しないんだよな。味噌汁、噴くかと思っただわ。

突然何事かと訝しげに爺さんを一瞥すると、彼は表情を変えずに何処から取り出したのか白い液体の入った小瓶を取り出して卓上に置き、コホンと小さく咳払いする。

「――コーキ様。こちら試作段階の調味料なんですが、もし宜しければご賞味いただけませんか？」

「ほほう、試作品とな？」

「さようでございます。ユウセの果実を用いて作ってみたのですが、直接お客様に味わって頂いた方が今後の研究の為にもなるので」

そう言う事ならば、と白い液体を一滴指に垂らして味見してみる事にした。……ん？——この芳醇な香りに、口当たりの優しいまろやかな旨味はまさに……。っ。

「醤油……っ！！」

色こそ違うが、この味は濃口風……。だな。そんなに塩っ辛くなくて調度良い風味だ。っーか美味しい、刺身が欲しい。

「いかがでしょうか？」

「……執事さん。あんた最高だぜ」

「——恐悦至極。それと、私めの事はお気軽にバトラーと呼び下さい」

それ、意味的に一緒じゃね？ と疑問に思いつつもバトラーさんにサムズアップして見せると、彼も試作品を褒められて気を良くしたのか、したり顔でモノクルの縁を指でクイツと持ち上げると優雅に一礼する。

異世界人の口に合うのかわからないが、日本人の俺には直球ど真ん中の出来だ。商品化すれば一山当てられるんじゃないかな。まあ、売れなくとも俺は個人的に購入したいと思う。頑張れバトラー。超頑張れ。

「ふつかふかだ、ふつかふか」

バトラー作の醤油（飯）で焼き魚を美味しく頂き、シャワーで汗を流した俺は部屋のベッドを絶賛堪能中。

《AKO》の無駄な娯楽要素が残ってて助かったぜ。浴槽こそなかったが、室内には簡素なシャワールームが完備されていた。確か、西の《ウェストヒートランド》地方は温泉が湧いてて、浴槽がある街もあったな。

はあ。しかし、ゲーム内で飯を食った後にいつもの習慣で、“食後には毎回歯を磨きたい”って神経質なプレイヤー達からの要望から実装されたネタアイテム《歯ブラシ》がこんな所で役に立つと思わなかったな……武器にもなるんだぜ？　これ。

自宅の硬いパイプベッドと比べるのもおこがましい程寝心地の良いベッドに身体を埋め、ベッド脇に置かれたスイッチの役割を担う魔石で照明を暗く調整した天井をぼんやりと眺める。

「——あ、これ布団が良いんだわ」

至極どうでも良い発見に嘆息しつつ、ステータス画面を開く。

「おお……上がってるな」

本日倒した、6体＋半のオーガキングの経験値でレベルが32から35に上昇していた。ゲームの仕様のままならDex（器用）かAg1（敏捷）にポイントを振り分けたい所だけど……今の所、取り敢えずは様子見だなよあ。

防御系のスキルを新しく覚えた方が戦略の幅も広がると思うし――まあ、実際にこの世界の人達の戦い方とか見てから考えるとして。判断材料が足りないとか何とかしたい。

この街に図書館の様な物があればよかったが、ゲーム内で図書館があるのは北の《ノースアイスランド》の王都だけだ。念のためギルドで貰った冊子に描かれた、この街の簡易地図を見ても図書館なる建物は見当たらなかった。

――とまあ、うだうだ考えても仕方ないわな。当面の目標としては、ここらでこの世界の常識（？）を学びつつ、北を目指してみるか。……んー。図書館もゲーム中では専用のクエストが受注できる位で本を閲覧とかは出来なかったから望み薄だが……何もしないよりは、な。

「ふあ……」

とにかく今日は刺されたり、異世界（？）に來たりと色々有りすぎて疲れた。こんなに走り回ったのも学生時代以來だな……。

《デバイスライザー》の液晶画面に表示されたデジタル時計が2時38分を示している。少し早いが今日はさっさと寝て、明日は勉強の為にも市場を回って近場のダンジョンでも覗いて見るとしますかねー。

起きたら今までの事が夢でした！ とか無いよな……？ と多少の不安を覚えつつも枕元に《デバイスライザー》を放り投げ、意識を早々に手放した。何処でもすぐに寝れるって言う図太い神経はこんな時には重宝するね……。

おやすみなさい。

寝る前に夢落ちのフラグを立ててみたが、『現実に戻ったと思っただけど、やっぱりそれ自体が夢だった』——的なイベントも起きずにすっきりと目覚めましたよ。本日も快晴なり。

さて、東区画の市場に来てみたのはいいが。……こりゃ、全部見て回るのは骨が折れそうだな。

街の中央に設置されたクリスタル製の大仰なモニUMENTから——先は見えんが、恐らく東門まで真っすぐ伸びた大通りの路肩には、雑多な露店がずらりと並んでいる。閑古鳥の鳴く南門とは打って変わって大賑わいだな。

ゲーム中じゃ大して需要のなかった日用品や食料品を扱う店も沢山あるみたいだな。ダンジョン散策用にお手軽な携帯食料でもあれば購入しときますかね。

「（――ほお。なるほど、大方把握した）」

たつぷり二時間近く時間を費やし、それなりのレアリティのある武器や防具、アクセサリーを扱う露店や、魔物の素材の買い取りを行っている露店商の価格表を冷やかしつつ東門まで歩いて得られた結論は――“基本的に”ゲーム内の相場と大差はないと言う事だった。

ゲーム通貨の１ステラが何ルーク相当に値するのか良くわからんし、低ランク武具類の相場まではさすがに把握してないけど、露店に並ぶ覚えてる限りの高ランク――と言ってもゲーム中では、中の下くらいのランクの武具はゲーム内より少し割高程度だった。

少々違和感を覚えたのはボス級の魔物から直接入手したり、素材の強化から派生して発展する武具のうち、フィールドや《フリーダンジョン》で出現する類いの品物を見かけける事は出来たが、攻略や発見に色々手順が必要な《クエストダンジョン》産の品物はとんと見かけける事がなく、稀に見つけたとしてもその値段は偉く高額な物だった。

――つまり、あれか。まだ断定するには至らないけど、単純に見られてないダンジョン産の品物が希少価値が高いって事ね。《雷切》や《必中の弓》は《フリーダンジョン》のボスドロップだから出回ってたって訳か。

ふうむ。《クエストダンジョン》で入手出来る品は面倒な分、高ランク武具の強化に必須だったり、性能が一つ秀でてたりするから

その攻略情報は大きなアドバンテージになるよな。本気で搜索を考
えとこ……。

さて、相場については『クエストダンジョン』産のアイテムに気
をつければいいと判断したので、つい先ほど露店で購入した『子供
でもわかる魔法入門』——と言うファンシーな挿絵の入った素敵
な参考書を読んで見るとしうか。

通行人の妨げにならぬように東門の石垣に背中を預け、参考書に
目を通す……やっぱ全部ひらがなのな。

ふむ？ なにぶん子供向けに要点だけかみ砕いた説明分なので、
大雑把にまとめるとこんな所か。

魔法を扱うには生まれ持った才能が必要。

魔法に対しての知識や想像力で効果は増減する。

仮に生まれ持った才能がなくとも、魔力さえあれば『写術書』を
用いて魔導の才能を強制的に開く事が出来るが、使える魔法は『写
術書』で覚えた魔法に限られる。

——正直漠然としててよくわからんな。発動のプロセスとかどう
なってんだろ？ 載ってる魔法も初級のものだけだし……、一般向

けのが欲しかったけど置いてなかったんだよなー。まあ、2ルークで購入したモノだから文句も言えんか。

挿絵の女の子の解説キャラクターが笑顔で嬉々と『えいっ』——って可愛い掛声声をあげて魔物を魔法で焼き殺してる様は中々シールドで面白いが……。現実でもそうだったけど、子供向けって以外と残酷だよな。

《写術書》ってのはスキルスクロールの事だろうな。俺もいくつかは作れると思うけど……。まあ後回しでいいか。

さあて、お次はダンジョン散策としますかね。確か西門の先に広がる樹海の中に初級で洞窟型のフリーダンジョンがあったよな……。

歩いて森を抜けるとなると食料とかも多めに持ってた方が良さそうだな。参考書をインベントリに放り込み、再び雑多人種の人混みに溶け込んで西門を目指した。

頭上の梢から仄かに陽光が差し込むだけの、鬱蒼と樹木が生い茂った薄暗い樹海を中心にそれはあった。

草木の茂ったそれまでの道筋を抜け、土が剥き出しになった開けた空間に出ると、苔がびっしりとこびりついた黒い巨石がズラリと

地表から突き出し、そびえ立っている。

その巨石に囲まれた地下へと進む緩やかな傾斜の先には洞がぼつかりと口を開け、中からは得体の知れない——人外とだけは断言出来る呻き声が岩壁に反響して漏れ出している。

——とまあ、一人で来るにはちと不気味な所だけど、街から近いダンジョンと言う事もあり、周りにはパーティの一大団が多く不思議と安心感が湧く。

……うん？ ソロで来てるの俺だけか？ まあ、ここのは初級の割に状態異常攻撃なんて物騒なモンを持つてるから人数居た方が安全かもな。

ここの魔物程度なら痛手を受ける事はないと思うけど、気を引きしめて行くとしますかね。一応、人目を気にしてインベントリ内から《オクスタンロッド+10》を取り出して装備する。多分大丈夫だとは思うが、愛杖だと悪目立ちする恐れがあるので念のため、だ。

生憎と特殊効果はついてないが、この杖も先端に槍の様な刃がついてるから接近されても十分実戦に耐えうる代物だ。物理攻撃力の高いしね。

——よし、準備万端。いざ、ダンジョン散策！

「はい。そのお兄さん、ちょっと待ってな」

「え、はあ……？ 俺、ですか？」

杖を担いで意気揚々と突入しようとした所、ダンジョンの入口脇に控えて居た兵士のおっさんに呼び止められる。――この紺色の制服は街の警備隊の人か。俺、なんかまずい事でもしたっけ？

「そうそう。君、ダンジョンに入るの？」

「あ、はい。そのつもりですけど、ど？」

随分と柔和な表情で優しく語りかけてくるおっさん。……別に咎められている訳ではなさそうだ。頬をポリポリと掻いて返答を待つと、彼は穏やかな笑顔のままだが幾分か申し訳なさを含んだ表情で続ける。

「ここを管理するうちの決まりでね、二人以上のコンビじゃないと立ち入り許可を出せないんだ」

「えっ」

09・前途多難（後書き）

フリーダンジョンとクエストダンジョンの詳細な違いは次話で出てくると思います

——おっさん率高いのは仕様です。長時間の見張りは重労働ですしね！

10・意識すると気になるもんだ（前書き）

今回の話は借り物のケータイで書いてるので、いつもより粗いかもしれませんが更新優先で投稿します。

10・意識すると気になるもんだ

「すまないね。この中は魔物の数が多くて、単独で入って大怪我する人が後を絶たなくてな。ギルドで登録済みの実力者なら単独での立ち入り許可を出せるんだが、——君は登録済みだろうか？」

……。あゝ。それで周りにパーティーしか居ないのな。俺が呆然と周囲を見渡していると、警備員のおっさんが身振り手振りを交えて説明してくれる。忙しく両手を動かして喋るのは彼の癖なのだろう。

——っはー。ギルド登録か。初期登録費用に20万ルーク掛かるから後回しにしてたんだよねー。身内の居ない俺にはあんましメリットがなかったしな。ギルドってもっと簡単に入れるもんかと思っただが、全然そんな事なかったぜ……。

「いや、生憎と未登録の流れ者なんですよねー。ちょいと出直してきますわ」

「そうか……。折角ここまで足を運んで来たのに悪いね」

頭を掻いて視線を落とすおっさんに、手をヒラヒラと振って踵を返す。どうすっかな。街で一応確認の為にダンジョンの位置を聞き込みして確かめたのはいいが、こんな情報は聞いてなかったなあ。

近場の手頃な岩に腰掛けて周囲を見渡すと、休憩中と思われるパーティーの一団が3組。彼等に仲間に入れて貰えないかと交渉する

にしても、突然現れた身元不明のぽつと出の奴を仲間に入れてくれるかと言つと、期待は薄いだろっし……。

「なあ、アンタ——」

嘆息を漏らして組んだ足の上で頬杖をつく。ぬかったなあ、あんなに冒険心が漲っていたのに思わぬ暗礁に乗り上げちゃった。……ここまで来て何もせずに引き返すのも面倒だしな。ああ、そうだな。隠密スキル使っておっさんの横からこっそり入れば問題なさそうだな。さすがに探知スキルまでは使っていないだろう——多分。

「おいっ！」

……それにしても今日はいい天気だよな。此処は森の中だから日当たりが悪いが、こんな気持ちの良い日は、日光浴びながら昼寝つての良いかも知れんな。

「ム・シ、すんなーっ!!」

「……なんでしょうか、お坊ちゃん」

目の前で小汚い格好のお子様が約一名、ぷんぷんと地団駄を踏んでご立腹の様子だ。

声変わりもしていないので、凡そ歳の頃は11〜13歳と言った所だろうか。薄汚れた布の服を着て、所々がほつれた緑色の外套を纏う少年。額から頭にかけて焦げ茶色の布をターバンの様にグルグルと巻き、そこから癖のある濃紫色の毛髪がピンピンとはみ出している。

薄い灰色の双眸は吊り目気味で随分と小生意気そうな印象を受ける感じのお坊ちゃんだ。——まあ、目付きこそ悪いが、そこは子供補正で全体的に丸まるとして幾分か可愛いげがあるんじゃないだろうか。腰のベルトに佩びた長剣が彼の低い身長に見合わず、随分と不相応に感じられる。

「子供扱いすんじゃない。オレにはネルって立派な名前があるんだ」

「あー……それで、そのネル君が俺になんの用だい？」

「ネルで良い。——見てたぜ。アンタ、洞窟に入りたいんだろ？
なんなら組んでやってもいいぜ。このオレがついてれば百人力だぞ」

へへん、としたり顔で胸を張って鼻を擦るネル少年をフォーカスしてみると——レベルは13、か。ギリギリこの一階層の適性レベルだな。……なんつーか、こっちに來てからやたらと年下に絡まれるな。なんなのコレ、一応確認しとくか。

「ん、わかった。ネルは冒険者志望なのか？ かーちゃんとかはその事を知ってるのか？」

「……ツチ、親は居ねーよ。——んな事よりさ、組むのか組まねえのかどっちだよ？」

眉を顰めて乱暴に捲し立てるネル少年。おお……。何となく予想はしてたが、見事に地雷を踏み抜いたな。——ふうむ、色々思うところはあがるが、渡りに舟ってやつだ。この子が信用出来るかは別にして、様子見だけだしなんとかなるだろう。悪意は感じられないし

な……俺の人を見る目は信用ならんが。にわかには込み上げる嘲笑を堪えつつ、お言葉に甘えて利用させて貰う事にした。

「そうか。悪い事聞いたな、すまん。俺はコーキ。一応、魔導師だ。神聖術も少々かじってる、宜しく」

「別に良いって……プツ。それよりアンタ、その顔で神聖じゅ——イデッ」

パソコンツと良い音を立ててネル少年の頭が揺れる。おっと、あんまり可愛いもんだからつい……。素直な子供って大好きー。

「なにすんだよっ！ “じどーぎゃくたい”だ」

「ほう、難しい言葉知ってるな」

涙目で頭を摩る姿から一転し、まあな。と得意げな顔で威張るネル少年。……なんか、悪い奴じゃなさそうだな。寧ろ大丈夫か、この子？ こう言うやり取りしていると妹の事を思い出すな。実家出てから暫く会ってないけど元気にやってんのかねー。

ともあれ、これで一応人数だけは二人になったが中に入れるんだろつか？ 片方子供だしな……不安過ぎる。俺が頭を搔いて逡巡している、足早にダンジョンの入口に向かうネル少年が足を止めて振り返る。

「なあ、さっさと行こうぜ——あ、俺がリーダーだかんやつ！」

「へいへい、わかりましたよ。ボス」

異世界初パーティー（？）結成だな。気張って行きましょー。ゆるりと腰を上げ、欠伸を噛み殺しながら小さな大将の後に続く事にした。

「うりゃっ」

俺の放った下段蹴りで、ブヨブヨと爛れた赤紫色の肌をした動く腐敗死体——《ベノムコープス》の膝が崩れ落ちて倒れる。そのまま脇から飛び掛かってくるもう一体の頭部を杖で薙いで刈り取り、倒れた正面のベノムコープスの頭部を回し蹴りで飛ばしてトドメを刺す。

「うわ、わっ」

《レイ》

棍棒で武装し、ぼろ切れを纏った子供サイズの人骨モドキ——《スケルトンヌール》と、一対一で斬り結ぶネル少年に追加で襲い掛かるベノムコープスに光弾をぶつけて弾き飛ばす。

「ビンゴ〜」

「余計な事をすんなっ」

指鉄砲を作りバツチリとカッコつけた所で、ネル少年に悪態をつかれる。ちえっ、かわいくねーの。俺の周りは片付いたのでネル少年と骨の戦闘を眺める事にしますかねー。一応周囲に気を配ってみたが、今のとこ敵の気配は無いみたいだな。杖を担いで肩をトントンと叩く——いささか親父臭いが気にしない。

「ほれ。正面、頑張れよー」

俺が指差すとネル少年は頬を膨らませてこちらを一瞥し、言われるまでもないと言った様子で再び骨に斬り掛かる。

——結果として俺達二人はダンジョンの中に入る事が出来た。立ち入りを制限してる割には、子供と二人で入れるって管理が甘いのか厳しいのかわからんな。まあ、一概に許可が降りたと言っても警備のおっさんは甚く心配してたが、俺が高位の神聖術を使えるのを目の前で見せると渋々ながらも立ち入りを許可してくれたのだ。最初からそうしときゃよかったな。

その時の彼の“えっ？ お前、神聖術使えんの？ 嘘だろ？”と言った表情を俺は忘れる事がないだろう。顔面がゲシュタルト崩壊しとったぞ。失敬な、そこまで驚くか、フツー？

そして、ネル少年とおっさんとのやり取りを聞くと、どうやら彼は数日前からダンジョンに入ろうとここに通い詰めているみたいだが、彼とチームを組んだ人間は俺が初めてらしい。こんなチミツ子をダンジョンに連れてくなんて酔狂としか思えんしなあ。

コッソリとおっさんに、ただの冒険に憧れる少年なら一度ここを経験すれば懲りるだろう、立ち入り許可を出すから入口周辺で彼と共闘してやってくれないかと提案され、それを快諾。そうして一緒に入ったのはいいが、なかなかどうして良い奮闘を見せている。

さて、このフリーダンジョン——《嘆きの空洞》は不死系の魔物が多く跋扈^{はいつ}、徘徊するなんとも辛気臭い迷宮となっている。そのお陰で高位の神聖術を扱えると証明して入る事が出来たのだ。まあ、出現する魔物は見た目こそグロテクスな死体の姿をしているが、実際はそういう形態をした魔物と言う分類で、ダンジョン内に腐臭が漂う事は無い。ちよいとカビ臭いが我慢出来る範囲だ。……がまん——くっせえつ。

まあ、その、なんだ。一度意識しちゃうと気になっちゃうレベルの臭気で満たされたこのダンジョンは地下5階まで広がり、最下層にはしっかりとボスモンスターも出現する。光りの届かない地下迷宮だが、壁一面に幻想的な青緑色の光りを放つ光ゴケが自生しているので、照明には事欠かない。足場も平坦で歩きやすいのも嬉しいね。ま、初級ダンジョンだしな！。

そんな初級のダンジョンで何故立ち入り制限をしているのかと甚だ疑問に思ったのだが、入って5分も経てば身体で思い知る事となった。

魔物の出現率——所謂“湧き”がゲーム仕様なのだ。つまり、倒したら倒した数だけ迷宮内の何処かに一定数の魔物が補充されるってワケ。わんこそばならぬ、わんこそんぴだな。油断していると突如横から現れた魔物にガブリッ……おゝ、コワ。

肉体的疲労が少なく、死んでも幾らかの経験値にペナルティーを負って復活地点からリスポン出来るゲームと違って、一度きりの人生で無限に湧き出る魔物と戦い続けるってのは無理ってもんだ。

進入人数制限無しで開かれているフリーダンジョンならともかく、一度の進入に人数制限が掛けられているクエストダンジョンでこの仕様だと難度は高く、理不尽窮まりないだろう。つーが無理ゲー臭い。そーいや蘇生魔法とか使えんのかな？ 覚えてないケドさ。

そんなこんなで、こうして色々と思案に耽っている間にも次々とゾンビや骨がこちらに襲い掛かって来る訳なのだ……。魔法を使うよりも、杖で殴ったり蹴飛ばしたりのが早いのでそうしてるが、流石に疲れて来る。ニートの体力舐めんなよ、コルア。ゾンビコルア。

群がるゾンビを一掃し、隣で漸く骨を倒して剣を杖変わりにして立ち尽くし、すっかり憔悴した様子のネル少年に声を掛ける。

「ネルよー。一旦外で休憩しないか？」

「——ハアハア。もう、ハア。つ、疲れた……のか？ ハア。し、仕方ない、奴だな」

おー、まだ減らず口を叩けんのか。初めてココに入った割にや、

気味の悪い魔物に臆して気後れする事なく闘えてるしナイスガッツ
と言わざるを得ないな。俺なんて最初にここ来た時、正直ビビりま
くってたからね。案外大物なのかも知れん。

10・意識すると気になるもんだ（後書き）

携帯が修理から戻ってくると内容はこのままで丁寧な文章に修正するかもしれません。ご了承ください。

女子分の実装は今暫くお待ち下さい！

11・譲れぬ闘争（前書き）

ひっそりと更新。

誤字、脱字などがあればご報告お願い致します！

11・譲れぬ闘争

外界のまぶしさに眼を細めて天を仰ぎ、大きく伸びをする。服についた埃を払い落としながら俺とネルは薄暗い洞穴から抜け出した。梢の隙間から覗く太陽は頭上に昇り、間もなく昼の到来を告げる。警備のおっさんと本日何度目かの挨拶を交わして脇を通り抜け、鼻に残るカビ臭い洞窟の臭いを緩和すべく外の新鮮な空気をたらふく肺に取り入れた。

「ウム、空気が美味しい——あそこでいいか」

隣で空腹を訴えるネルに目配せすると、彼も小さく頷く。あの後、も戦闘と撤退を3回程繰り返し返した俺達は、最初にネルに声を掛けられた岩場で休憩がてらに少々早めの昼食を取ることにしたのだ。

程なくして昼食の用意が完了し、ここに来る前に俺が露店で購入したサンドウィッチを両手で掴み、それをモクモクとげっ歯類よろしく口いっぱい頬張るネルが、口内の物を飲み込み口を開く。

「コーキってさ、本当に術士なのか？」

「ん？ 目の前で見ただろー。俺は真つ当なマホー使いだ、ま・ほ・う・つ・か・い」

どっしりとした重量感のあるサンドウィッチにかぶりつき答える。

香ばしく焼かれた鶏肉に、卵や葉野菜等の具が入ったサンドウィッチはなかなか美味い。余分に買ったよかつたな！。

「それにしても蹴りの一撃でスケルトンやコープス倒してたし……、そこらのフツの術士には無理じゃねーの？」

「それはアレだ。一撃を入れる瞬間に、俺の内に眠る神聖なパワーをだな――」

次のサンドウィッチに手を伸ばし、怪訝な表情で首を傾げるネルに適当にでまかせを並べて説明すると、彼は『ふうん、オレもそれが使えたら楽なものにな』――と、特に疑う様子もなくサンドウィッチを頬張り始める。

それにしてもこの少年よく喰うものである。俺が一切れ喰ってる間に、もう五切れ目だぞ。成長期か？ 成長期だからなのか？ 少しは遠慮しろよ、この野郎っ。きっとコイツには頬袋があるに違いない。ネルの膨らむ頬つぺたを思いつ切り引っ張りたい衝動を抑えながらも、俺もサンドウィッチを頬張る。

「ムグ……、俺は剣術の才能はからきしだから偉そうな事は言えんケドさ。そもそも、お前さんが振り回す“ソレ”は身体にあつてないから効率が悪いし、なにより疲れるんだよ」

咀嚼したサンドウィッチを飲み込み、少々説教臭いがネルの脇に置かれたブロードソードを指して口を挟むと、彼は鼻を鳴らして腕を組むとそっぽを向く。古びて刀身がくすんだ幅広の両刃剣は重量こそ2kgにも満たないだろうが、小柄なネルの身長の上半分以上もある剣を振り回すのは著しく体力を消費するだろう。

「フンッ。余計なお世話だ。オレはこの剣で頑張るのっ!」

「——正直重いだろ?」

「うっ……」

凶星を突かれたネルが表情を凍らせて後ろにたじろぐ——良いリアクションだ。ネルのその反応が面白くなり、追撃を掛ける事にした。顎を手でなぞり、眉根を寄せて考え込む仕草を見せる。

「……うっ、うるせ——」

「……お前、右腰に佩びてるよな。無理してると、そのうち右足だけ短くなっちゃうぞ。そのままだときつと将来右寄りに傾いちゃうな、右肩下がり。俺なら泣いちゃうね。俺の友人にもお前みたいな奴が居たが、ソイツは今……、——ああ。口にするのも恐ろしい」

「ええっ?! うそ、どうしよう……。オレ、右足だけ短くなっちゃう?」

両手を広げて首を振り、やれやれと嘆く仕草を見せるとネルは慌てて立ち上がり、涙目でズボンの裾を持ち上げて忙しく左右の足の長さを確認する。その恐慌っぷりに笑いを堪える俺、超必死。沈まれ俺の口角、痙攣に負けるな表情筋。

「安心しろ、まだ大丈夫だ。お前さんは左利きなんだろうが。たまには剣を左腰に下げるか、同等の重さの物を装備すれば……」

「そ、そうなのか?」

ネルの肩に手を置いて小さく頷き、優しく諭す様に話すと彼は眼を瞬かせてこちらを見上げる。

「——だが……」

「……だが？」

拳を握り込んで息を飲み、こちらの二の句を鼻息荒く待つネルにしっかりと間を作り、眉を顰めて出来うる限りの悲痛な面持ちで続ける。

「ただし、短足になる」

「な……ッ?!」

灰色の双眸を見開き、口をパクパクさせてこの世の終わりを向かえたかの様な表情を浮かべ地面に突っ伏すネル。なにこの面白いイキモノ。

「……いいんだ。足が短くなっても……。オレ、頑張るんだ……」

何をそんなにこだわるのか知らんが、地面に突っ伏したまま肩を小刻みに震わせてブツブツと呟くネルを見ると、流石に不憫になつて来たのでインベントリ内から真珠大の赤色の宝石が嵌まった指輪——《ストレンジスリング》を一つ取り出してネルに投げる。

「装備者の筋力補助効果がある指輪だ。やるよ、それを装備すると多少は楽になるかも知れん」

「……サイズ、合わない」

おもむろに指輪を摘んで拾い上げたネルは、指輪を左手の薬指に当て行い、前後にスライドさせる。

「待てい、なんで左手の薬指に嵌めようとするっ?!」

「……? 母様は父様から貰った指輪をここに嵌めてたぞ。何か問題あるのか?」

然もここに嵌めるのが当然だろうと言わんばかりにキョトンとした顔で首を捻るネル。問題大ありだ。それにしても……母様、父様ってコイツ何者だよ。実は育ちがよかつたりするのか? ——なんか口が悪いだけの子供じゃなさそうだな。色々気になるが障らぬ神になんとやら、だ。スルー技術って大事だね。うん。

「——んじゃコレ使え、指に合わなくとも首から下げるだけでも効果があつたはずだ」

「でも、こんな高価そうな物……ホントにいいのか?」

更にインベントリ内から手頃な銀のチェーンを見繕い突き出すと、ネルは珍しい物でも見るかの様にそれを受け取り、手の平で指輪を転がして惚けている。

「なんだ、要らんなら返せ」

「返さねーしっ! ——その、あり……と……な」

俺が手を突き出すと、ネルは透かさず指輪とチェーンを後ろ手に

隠す。そして、こちらに目も合わせず伏し目がちにしおらしく何かを言う。よく聞き取れなかったが、小声で礼を言われたのだと思う。――こうしていれば少々小生意気な普通の子供なのに、剣を持って魔物と闘ってるって改めて考えると凄い事だよな。俺がこの時分の頃は野球やサッカーして走り回ってたっけな……。

「そうそう、子供は遠慮すんな。素直に受け取りゃいいんだよ」

「おうつ――じゃあ、最後の一切れもーらい」

昔を思い出し、ちよっぴり感傷的な気分で微笑み掛けると、急に元気になったネルが口角吊り上げてサンドウィッチに伸ばす。

「おつとー？ そいつアちげえだろ。どんだけ喰う気だデメエツ」

透かさずその手を掴むと俺とネルの視線が交差し、互いに睨み合っただけで無言で頷き合う。

「……ふふふ」

「……ははは」

そのまま暫く視線をぶつけ合い牽制し合っていると、ネルがピョンと勢い良く立ち上がり、左手をグルグルと回転させて腰を落とし構える。同時に俺も首を鳴らして立ち上がり、両拳を眼前に上げて戦闘体勢を取る。

「……ハッ、大人気ねエ。大人気ねエよ、コーキ。……ここはオレに譲れ」

「笑止……ッ、負けられない闘いがここにある！ 全力で掛かって来い。胸を貸してやんよ、ネル。……それを譲る訳にはいかん」

不敵に嗤うネルに、俺も手招きして挑発する。一時の静寂の後、樹海に餓えた戦士の咆哮が^{こだま}飜した。——その日、《嘆きの空洞》の前で食べ物を取り合って闘う意地汚い二人の青年と少年の姿があったとかなかったとか……。

寝床の《雪鳥の止まり木》に戻った俺は、茶色い皮張りのソファーに身体を埋めて本日の稼ぎ——1,800ルークの数量を確認し、インベントリ内に突っ込んだ。次に度重なる連戦ですっかりと消耗してしまった《オクスタンロッド+10》に《リペアスプレー》を万遍なく吹き掛けて修繕を始める。

今日の狩りで手に入れた魔物の素材を売った代金は、ネルと折半して一人の取り分がこの額と相成った。一階層しか散策してないのでレベルの上昇こそなかったが、魔物の湧きが多いのでそここの額が稼げたと思う。スプレーの代金を差し引いても1,300か——この感じだと昨日の30万ルークは破格だよな。インベントリ内のアイテムを少量売り払うだけで一生遊んで暮らせそうだ。

修繕を終えた杖をインベントリに放り込んで欠伸を噛み殺す。とにもかくにも、今日のダンジョン探索は色々と収穫があった。魔物の湧きがゲームのままだったり、魔物の素材化は死体に触れて感じる事で何処かの部位がランダムに入手出来る——等等。この世界

のダンジョンじゃパーティープレイ必須だなと心底思う。やり直しが利かない状況で無限に出現する魔物の群れの中に飛び込むなんて行動は、自殺志願以外の何物でもないからだ。

でも、折角こんな世界に来たんだから冒険したいよな。不自由しない蓄えがあっても、俺の性根はコツコツと貯金して通帳の預金が増えることに無上の悦びを感じる小市民なんだよね。俺の装備と能力ならある程度までなら無敵状態だろうが、如何せん体力が保たない。ゲーム内じゃ腹に溜まらなかった回復のポーション類も、連続して飲み続けるのは無理があつた。つか胸やけ起こした。ちなみに味は甘つたるくてトロツとした子供の風邪薬のシロップ風だ——どうでもいいか。

つまり、これからの俺の基本的な回復手段は対象から生命力と魔力を奪うスキル《ゲイン》だけって事になるな。——でもこれって闇系の魔物には効果薄いんだよな、俺って意外と弱点多くね？本気でV i tとR s tのステータスを上げることを頭に入れて置こう。攻撃面はなんとでもなるにしても、如何せん防御面がなあ……特化型の痛い所だな。スキル構成の見直しも必要かね！。

暫く呆然とステータス画面を眺めた後、部屋に戻る前にバトラーに煎れて貰った珈琲で一息入れてベッドを一瞥する。昨晚、俺に安らかな眠りを与えてくれた毛布が不自然に盛り上がり、明らかに“ナニか”を内包しているのは一目瞭然だ。

眉間を揉みほぐして嘆息し、力無く立ち上がって毛布をめくりあげると、シャワーを浴びてすっかり小綺麗になったネルが宿付けの寝間着に着替え、身体を丸めて寝息を立てている。

「——めんどくせえ……」

不意に立ちくらみを起こした俺は、そのまま両手で顔を覆って背
後のソファーへと倒れ込んだ。

閑話・“ネル”（前書き）

1万P突破で急いで書き上げたモノで短いです。

閑話・
“ネル”

深い森の中だけれど、枝の隙間からポカポカとした陽気が差し込み心地好い。すっかりと通い慣れた獣道を突き進んで目的地を目指す。

オレが《商業都市フランチェス》に辿り着いて早2週間。午前中は街の西側に広がる樹海の中にある、ここ——《嘆きの空洞》の前でパーティーを組んでくれそうな人を探すのが日課になっている。

「……むう」

毎日通い詰めているものの、やっぱりオレみたいな子供と組んでくれる物好きな人は居ないみたいだ。人の良さそうな人を選んで声を掛けてるけど、今日も収穫は無し。だからと言って、怖そうな人達に声を掛けるのはやっぱり怖い……。

ギルドで募集をかけようにも、手数料が掛かっちゃうから得策とも言えないし……何より、そんなにお金に余裕もないもん。腰に下げた巾着袋を突いて溜息をつく。“ひもじい”って言うんだっけ……、これ。

「……腹減ったなあ」

クウ。と鳴るお腹を摩って地面に座り込む。この喋り方にも随分と慣れてきた。最初は噛みまくって笑われて……プンプン怒ってたっけ。父様と母様に聞かれたらきつと怒られちゃうだろうな。不意に家族の顔が脳裏に浮かび、目頭が熱くなる。――母様の手料理が食べたい、……父様にまた抱き上げて欲しい。家の皆と遊びたい。

――“ネル”に、また会いたい。

脳裏に浮かぶ幸せな追憶で目尻に滲む涙を拭って頬を叩き、気合を入れる。……うん。もう、皆は居ないんだ。こんな所でくじけちゃダメだよ。オレは絶対に強くなってアイツを、仇を討たなくちゃ。

今日も空洞には入れそうもないから、森で狼や小鬼を狩って力をつけよう。立ち上がって大事な剣を腰のベルトに固定する。……重い。背中に背負えば幾らかマシだけど、そうすると抜剣出来ないし……。うう、まだ“ネル”みたいには上手く扱えないけどオレ、頑張るからね。

「……うん？」

ふと空洞の入口に視線をやると、警備員のおじさんに立ち入りを止められてる男の人が一人……。あの人、旅の人かな？ きつとここに来たばかりで、一人で入れないのを知らな……。

「え……？」

まるで身体に雷が落ちたかのような衝撃が走り、声が漏れる。警備のおじさんに会釈をし、振り返った男の人の顔は――

オレが殺した、とても大切な友人に瓜二つだった……。

閑話・“ネル”（後書き）

読者様の応援に感謝！

12・GAME OVER(前書き)

いつもご愛読ありがとうございます。

誤字、脱字があればご報告下さい！

12・GAME OVER

暫くソファーに寝転がったまま天井板の木目で迷路遊びをし、存分に現実逃避を満喫した所で意識を覚醒させる。背もたれを掴んで上体を起こし、視線をベッドに戻すとやはりそこには身体を丸めたチビツ子一名、すやすやと寝息を立てて転がっている……。

「にやろっ、俺の聖域で寝やがったな……」

最早癖となってしまった動作——額を覆って嘆息を吐く。いささか心労で重く感じる身体を持ち上げてソファーに座り直し、残りの珈琲を一気に呷った。

——以下回想。

《嘆きの空洞》で夕方までゾンビや骨とチャンバラごっこをした俺とネルは、一カ所に固まった魔物の群れの塊——所謂モンスターハウスと呼ばれる、ホラー映画も真っ青の死体モドキの群れを一掃した切りの良い所で街へと帰還する事にしたのだった。

その時ばかりは、流石にネルも半ベソをかいてヤケクソに奮闘してたな。指輪の効果で剣も少しはまともに振れる様になったみたいだった。後でその事をからかうと『泣いてねーよっ！』とスネを蹴飛ばされた。意地っ張りめ。

途中からずっとお前さんが袖が掴んでたからそれを庇って何回か噛み付かれたんだぞ。ダメージは無いが、グロテスクな人型死体に腕をモリモリかじられるのは視覚的にゾッと来るので勘弁して頂きたい。——その後、ネルが散々『腕、大丈夫だったか？』としつこく聞いて来たので毒が回って苦しむ演技をしたら本気で心配された泣き出しそうなネルに『嘘ピョン』とおどけたらしこたま怒られた。流石にやりすぎたか。

そんなこんなですっかりお冠の様子なネルと碌に口を利かないままにフランチェスに帰還。気まずさの余り、途中の露店でお菓子を買い与えてみたら機嫌が直ったみたいだった。現金な奴だ。

ギルドで昨日のねーさんに換金して貰い、ガアヴのおっさんがネルを見ると暑苦しくそうなので、見つかる前に早々とギルドから退散。ネルと金を折半し、別れを告げて宿に戻ったのはいいが――。

「……何故かこのお子様は隣に借りて、あろう事が俺の部屋に侵入人様のベッドで爆睡中です——ってか？」

ついさっきまでは、フカフカだ、フカフカだって布団の上ではしゃいでたと思っただのにな。どうしよう、コイツの部屋に放り込んでくか？

「お……伸びる伸びる」

「……にゅ、ふ、ふひゃい」

ネルの頬を引っ張り首を捻る。眉間に皺を寄せて変な鳴き声をあげるが起きる様子はない。……しかし、放り込むにしても鍵を掛けずに子供を部屋に一人にするのは如何なものかと逡巡しつつベッドの周りをウロウロと歩き回る。

確かにフカフカで気持ちいいのは認めるが、今日会ったばかりの人間の前で爆睡するとは無防備にも程があるだろうに。俺はお世辞にも人相が良いと言われる事のない自負もある。自分で言ってるちよっぴり虚しい。——ああ。そういえばベッドメイキングもバトラーさんがやってるって言ってたな、是非ともその技術を彼から伝授して頂きたいモノだ。

「う……と……様、かあ……さ……」

不意に漏れる掠れた呻き声に足を止める。悪夢でも見てうなされているのか、顔を歪めてシーツを握り締めるネル。別段、俺に撫で癖がある訳ではないが流石に居た堪れなくなっただのでネルの脇に腰掛け、髪ほつそい頭をグシャグシャと撫でる。

暫くするとネルの表情が和らぎ、また安らかな寝息を立てはじめる。寝るときまでバンダナ巻いてるなんて変な奴だな。……あー。今日だけだからな。たまにはソファで寝るのも悪くない。ネルに毛布をかけ直して立ち上がる。

「べ、別にアンタの為にっ——いや、止めておこっ」

ツンデレが許せるのは二次元だけだ。何より美少女に限る。こっ

ちへ来てから、街で可愛い子を見かけるっちゃん見掛けるのだが俺に縁があるのはシヨタつ子とオッサンだけってのは悲しい事だ。女に餓えてる訳じゃないが悲しい事だ。大事な事なので二回――あー、もういいや。めんどくせえ。

どうも寝る前のテンションが可笑しい。なんだかんだで疲れてるんだろーな、俺。欠伸を噛み殺し、寝る準備の為に洗面台へと向かう。

そう言えば、ハーレム少年のランス君は元気でやってるんだろうか？ 結局丸投げして来ちゃったけど、暗殺者の件もあるし大丈夫だったのかねえ。もし、再会でもしちゃった時に取り巻き増えてたらどうしよう。世界の男子諸君を代表して引っ叩きたいところだけど、後が怖いので心の内で呪詛の言葉を吐くだけにしよう。ランス少年は良い奴そうなんだけどね、うん。やれやれ嫉妬とは、斯くも醜き事か……。性格だけでもイケメンでありたいものである。

「コーキッ!!」

「へもすっ」

不意にみぞおちに走る衝撃に、身体が“く”の字に跳ね上がり、肺の空気が吹き出る。激痛に眼を見開けば、俺の上に馬乗りになって悪戯に笑み、こちらを覗き込むネルの姿があった。

「――起きたか？」

「ク、ソガキがッ」

にやろう……、ベッドからダイブしやがったな。痛みで呼吸もままならないままにネルを捕獲し、羽交い締めにする。

「何か言い残す事はあるか？」

「はなせー。フランさんに飯の用意が出来たから、コーキ起こす様に言われたんだよー」

羽交い締めから抜け出そうと上半身を擦るネルが首を後ろに倒して俺を覗き込むので、俺はネルの額に顎を乗せる。あー、フランさんがね。

「こら、乗せんなつ。おーもーいー」

知るか。このまま顎で額に風穴を空けてやる。ネルの言うフランさんとはこの《雪鳥の止まり木》を、バトラーさんと二人で切り盛りしている若き女主人の事だ。特別美人と言う訳ではないが、気さくで気立てが良く、いつも明るく愛嬌のある彼女は引く手数多だとか。……全て本人談だが、と付け足しておく。

彼女の両親は極度の放浪癖持ちで、経営を娘一人に丸投げにして旅するのは忍びないとの理由で、両親の古くからの友人であるバトラーさんに白羽の矢が立ったのだとか。……フリーダムな両親だな、おい。閑話休題。

了解、了解。それで起こしてくれたと、成る程……情状酌量の余地があるな。——判決。

「因って、お前をくすぐりの刑に処す」

「えっ、ちょ。どこ触って、うひゃっ?! あはっ、あははは」

左手をネルの脇に回す形で抱き上げ、空いた右手で脇腹をくすぐり倒す。ほう。軽く肌を撫でただけでこのざまとは……なんと言う敏感肌。ほれほれ、ここか? ここがええのんか? ……それにしても軽いなー、コイツ。飯食ってんのか? ——食ってるな、人一倍と言わず何倍も。

そうして、ネルがグツタリするまで教育的指導（くすぐり地獄）を加えた所で彼をベッドに解放。さあて、朝飯が冷めちまう前に着替えて降りるとしますかね。

「……コーキのバカ、えっち」

「何がえっちだ、阿呆。あれしきで根をあげるとは貧弱貧弱う」

「おやおや、これはこれは……お楽しみの最中でしたか——大変失礼致しました」

……は、い? 背後から聞こえる、大変渋みがかった声に振り返って見れば、最早お馴染みとなった執事服をパリッと着こなす初老の男性——バトラーさんがドア前で、その皺の目立つ顔に笑顔を貼付けて立ち尽くしていらっしやる。

お楽しみ……? 何がだ? と周りを見渡す。横を一瞥すれば、

ベッドの上で俯せになって俺を見上げ、（笑い過ぎて）顔を赤らめて潤んだ瞳で（笑い過ぎて）肩を上下させ、熱っぽい吐息を吐くネ。その衣服は（笑い過ぎて）酷く乱れている。

視線を下に落とせば着替えの為に、シャツのボタンに手を掛ける俺の手と、そこから覗く胸板。――全身の血の気が、一瞬でサアと音を立てて引いて行くのが分かった。

「……ッ?! 違う、誤解だ。俺はナニもっ」

俺の申し開きに『わかってますとも』と彼は全てを見透かし、それでも尚、慈愛に満ち足りた――そう。まるで聖人の様な笑みを貼付けたまま頷く。いいや、その顔は絶対にわかってねえっ!! 頼む、後生だ。俺と眼を合わせてくれ!

「大丈夫です。フランお嬢様にはこの旨、上手く伝えて置きますのでご安心を」

「大丈夫でもないし、安心も出来ねえっ!! ちなみに参考までにどう上手く説明するのか詳細に語って言って貰おうか。今すぐにつ!」

「ふおっふおっふお。これはこれはコーキ様。このバトラーめに任せて頂ければ万事休す、でございますぞ」

「休してどうする?! そこは解決してくれ、そこはかなくなっ」

「なあ、何が誤解なんだ?」

「お前はこれでも食べてなさい!」

怪訝に首を傾げるネルにインベントリ内からペロペロキャンディを取り出し、口に突っ込む。

「……ん？ 美味しい」

——結局、宿泊契約の延長でバトラーの口を封じた俺は、ネルに手を引かれるままに朝食を腹に納めるべく食堂に降りたのだった。……朝から酷く疲れた。まったく、油断ならん爺さんだ。

無事に一般人としての尊厳を守って朝食を取ることが出来た俺は部屋に戻り、ホッと胸を撫で下ろす。

「それで、お前さんはこれからどうするんだ？」

そして三人前の朝食をしっかりと胃に納めてご満悦の様子ของネルに訊ねる。人の部屋のソファーに腰掛けてよくそんだけ寛げるものだ。

「どうするって……オレはコーキと一緒に行くぞ」

「なんでそうなるんだ？」

だって、俺がリーダーだし。と自己中窮まりない発言を然も当然の如く言い放つネル様に、俺は暫くこの街に滞在するが、北を目指

している事を説明する。その間、先刻のペロキャンが気に入ったのか、再び所望されたので素直に口に突っ込んでく。

「ふうん。北って事は、コーキは戦争に参加するつもりなんだな」

戦争？ とネルに続きを促すと、何も知らないんだな。としたり顔でネルが事の経緯を説明してくれた。……なんかコイツに言われると腹が立つ。ペロキャンを取り上げようとしたら失敗した。コイツの食い物に対しての反射神経には目を見張るモノがあるな。

曰く——王都のある北の《ノースアイスランド》と、魔族領と呼ばれる東の《イーストダークグラウンド》は、ここ数年の間国の境界での小競り合いが絶えず、予測される先の大戦に備えて王都で傭兵や義勇兵を募っているとの事らしい。……なんだそりゃ。

多くの亜人が住む東エリアが魔族領って事になってんのか。まあ、確かに見た目が禍々しい感じの種族があつちには多かった気がする。ゲームの設定では両国は友好関係を築いていたはずだが……、北の地を統べる王——シグルドが東側の間者に暗殺され、王位を継承するはずだった姫もそれと同時に消息不明。

その後は、妾の子である第二継承者の王子が云々で以下略。——
と言うのが巷に流れる風評らしい。それ、本当に東側が関係してるのか？ なんか陰謀の臭いがプンプンするんだが……やだねー、権力争いってやーっ？

ともかく。今現在、北側への出入国は制限がかかり大変厳しいモノらしい。傭兵として入国したら最後、兵隊サンとして戦争に駆り出されるんだとさー。嫌過ぎる。至急プランの練り直しが必要だ。

だが、もし仮に本当に東側が戦争を仕掛けてきているものだとして、北が戦争に負ければこちらにまで戦火が及ぶ可能性もあるってか……。幸いな事に東側からこちらに来るには北側をグルリと経由するしか道が無いが、あまり樂觀視も出来んな。

「どうした？ 難しい顔して」

キョトンと飴を片手に首を傾ぐネル。逆にどうしてそんなにお気楽なのかを俺は問いたい。ってまあ、この歳だし仕方ないか。どうやら俺の異世界冒険は物見遊山気分では送れないらしい。うーむ、ままならんね。

「よし、ネル。いっちょメシ代稼ぎに行くか」

「そうか、やる気になったか。付き合うぞ」

「取り合えず、ソレ（飴）喰ってからな。危ないから」

「おう」

非戦闘を謳う国の出身としては、出来るだけ平穩に暮らしたいもんだ。活気溢れる通りに行く市井の人々の往来を、頬杖について窓から見下ろし、心底そう思ったのだった。

12・GAME OVER（後書き）

辛くもコーキはゲームオーバー（人生的な）を回避しましたとさ。

13. だって男の子だもの（前書き）

誤字、脱字などがあればご報告お願い致します！

13 だって男の子だもの

時が経つのは早いもので、俺がこの世界に来てから早一週間が経過した。

「コーキ、グラゴイズがそっち行っただぞ！」

「りょーかい、必殺・お星様になあれ」

「だだの薙ぎ払いじゃねーかつ」

雰囲気が大事なんだよ、雰囲気が。俺の薙ぎ払いで全長が5m程もある腐敗した大蛇のお化けが壁まで吹き飛び、朽ちた身体の一部が崩れ落ちる。それでもライフを削り切るには至らなかったのだから《レイ（光球）》をぶつけると、グラゴイズの巨体が断末魔を上げてのた打ち回り活動を停止させた。

「うし、お疲れ」

「ちえ、オレが倒そうと思ったのにさー」

周りの敵が全て片付いた事を確認し、止めを俺が取った事に対し、

口を尖らして抗議するネルと拳を打ち合わせた。

当初の予定であった、“王都の図書館”を目指すと言う計画がおりゃんになってしまった為に、取り敢えず生活の地盤を固めるべくネルと《嘆きの空洞》で修練を重ねつつ、その周辺でこなせる範囲の依頼をギルドで受注する日々を楽しく過ごしている。

正直、始めはネルとは暇潰し程度で組んでいたのだが、この頃は満更でもないと思えてきた。相変わらず生意気な事には変わらないが、こと戦闘に関してはそれなりに信頼関係を築き、互いに指示を飛ばし合わなくとも連携が取れる様になって一種の爽快感を覚える様になった。

そして、俺のレベルが41、ネルのレベルが29に成長した現在、空洞の地下4階層が俺達の狩場になっている。予想ではここまで来るのに、もう少し時間が掛かると思っていたのだが——ネルは強くなる事に異常なまでの執着をみせた。

初めのうちから常時フル支援魔法を掛けて戦闘を続けるのはネルの為にないので、補助は大量の敵に囲まれた時のみに止めているのだが、それを除いても持ち前の動体視力を武器に真っ先に切り込み、常に自分の限界を超えようと躍起になっている風に感じられる。

向上心があるのは良い事だが、何と言うか……危ういのだ。一応、初見の魔物には突っ込んで行かないし、俺の援護が必要無い程度に気を配っているみたいなのだが、その行動に若いでは済まない気概を感じるのだ。——まあ、その辺もネルなりの事情があるんだろうが……どうしたもんか。ただの冒険小僧じゃないのはなんとなくわかったけど、このままだといつか無理して死んじゃうんじゃないかな。

うか。

こうして組んだのも何かの縁だし、なんとか無茶しないように軌道修正させたいもんだけど、普段は遠慮なく絡んで来る癖に、あんまり突っ込んだ質問すると壁を作りやがるからな！。とにもかくにも、俺と一緒に居る間は気を付けてやりたいと思う。なんだかんだで俺は弟が出来たみたいでコイツの事を気に入ってるのだ。

「どうした、コーキ。お前も手伝えよー」

魔物の素材を回収し終えたネルが怪訝な表情で訊ねてくる。

「いや、何もー。——お、次の敵さんのお出ました」

仄暗い通路の奥から先程のお化け大蛇に、一階に居た動く死体が灰色の色違いになった《パラライズ・コープス》や、青い炎を纏った骸體《スキュラ》等がワラワラとこちらに向かって進行してくる。

「1、2……えーと、いつぱい来たな。どっちが多く倒せるか競争だな」

「ぶっ、早々に数える事を諦めてやんの——夕飯代でも賭けるか？」

うるさい、と悪態をつくネルに肩を竦めて呪文の詠唱を開始する。今日の夕飯は唐揚げ定食にしようと脳裏に狐色の好物を思い描きながら……。

しっかりと勝負の厳しさを教え込み、夕飯の奢りが決まって不機嫌な様子のネルとギルドに換金に赴いた時の事だ。俺は掲示板に貼られた一枚の依頼書に興味を惹かれた。

——依頼内容：《クレイル樹海南西部の探索》

フランチエスの西に広がる大樹海に隠されると言われる、“黒盲目竜の顎門”^{あぎと}の搜索、及びダンジョン内の探查。私の長年の夢である秘境探しに協力して下さい。受注希望者の方は受付にて詳細を確認後、明日朝8：00に西門前のベンチにて。依頼者：商人ペルポイ——契約期間：2〜3日、基本報酬：5,000ルーク。

依頼書の下には、術士が残り一名——と書き加えられている。黒盲目竜、つまりこの世界で幻と謳われる《シュヴァルジエイド》のねぐら搜しって訳か。拘束期間の割に基本報酬が低いのは、あまり成功が見込めないからなのだろう。場所はあってるんだけどなー。入口の開き方の手順が面倒臭いから、きつとその所為なんだろうがうーん。そのうちクエストダンジョンに行きたいとは思っていたし、もののついでに受けてみたい依頼だよなあ。

「ずいぶん真剣に眺めてるなあ。何か面白い依頼でもあったのか？」

「ああ、ちよつとこれを受けてみたくな」

俺が掲示板を眺めている間に換金を済ませたネルが戻って来たの

で、依頼書を指して興味を促す。

「……ん？ これ、コーキしか受けられないじゃないか。しかも三日って！ 黒盲目竜の顎門なんて噂だけで、実在しないって話だぞー」

「でも、実在しないはずの素材はあるんだよな」

うつ。と、たじろぐネルに人差し指を突き付けて伝説の秘境探索こそが男の浪漫だろうと熱く語ってみたが、『そんなの探すより、空洞で稼いだ方が堅実だね』と真面目に諭された。……意外にコイツの思考は現実的みたいだ。しっかりしてて嬉しいよ。子供の癖にっ。

ちよっぴり浪漫を分かち合えない事に一抹の寂しさを感じつつも、掲示板を流し見て手頃な依頼を見つけ出した。——臨時チームメンバー急募。前衛求む。《嘆きの空洞》の地下3階層が狩場です——。3階層の魔物くらいならネルは十分に戦えるな。ネルに依頼書へ注意を促し、説明を続ける。

「ともかく、ネルも俺以外と組んでみる良い機会だと思う。これからもずっと俺と一緒に組んで行く訳にも行くまい？」

「なんだ、コーキはオレの事が嫌いになったのか。……この浮気ものーっ！ー」

人通りの多い通路でネルが涙ぐんで声を荒げる。一瞬で周囲の空気が凍り付き、チクチクと突き刺さる視線を浴びる俺は、ネルを小脇に抱えて通路の奥へと一目散に逃げ込んだ。

「違っわいつ、誤解を招く様な事言っな！ つーか何処でそんな言

葉覚えるんだよ」

「フランさんだ」

「わかった。彼女には後で、よく苦情を言っておく。——まあ、色んな人と臨機応変に組むのも勉強になるぞ。闘い方にも幅が出るし、一期一会のチーム戦つても意外と悪くないもんだ」

MMOゲームじゃ臨時パーティーなんてのはざらだし、初めて顔を合わせるメンバーで見事な連携が取れば、役割の決まった見知った相手との安定プレイとはまた違った達成感と充実感を得ることができる。——まあ、そんな事は滅多にないのだが。

「……三日だけだな？」

「ああ。ただし、無茶は厳禁な。普段みたいな闘い方してるとネル、お前だけじゃなくてチームメイトまで怪我するかも知れんから、足並み揃えて周りにも気を配ること——いいな？」

わかったよ。と口を尖らせて返事をするネルの頭をわしゃわしゃと撫でるとそっぽを向かれた。可愛くねーの。実際、良い機会だと思つので、これを機にネルには自愛を学んで欲しいものである。

翌朝、昨晚のうちに自腹で三日分の飲食物を準備した俺は、ネルと別れて待ち合わせ時間より20分程早く西門前のベンチにたどり着いた。数日契約の仕事の場合、ギルドに登録していれば、受注時に依頼主が預けた経費が支度金として支給されるのだが、俺の場合はギルドに登録していないので事後申請と言う事になっている。経費の持ち逃げを回避する為だ。

ギルドに登録すればメリットもあるんだろうが、有事には兵士として召集される事もあるし、俺みたいな住所不定な人物はギルドにそれなりに貢献しなけりや登録は出来ないらしい。そりゃ、そんなお手軽に市民権や身分証変わりになるもんが発行されれば犯罪者垂涎だわな。ああ、世知辛い。

暫しベンチに身体を預けて小鳥の囀りに耳を傾け、日光浴を満喫しながら、黒盲目竜の顎門攻略用の最適なスキル割り振りを設定している、西門から背に大きなナツプサックを背負った恰幅の良い中年男性がこちらに歩み寄って来る。

「依頼を受注して下さった方ですか？」

「ええ、コーキと言います。専門は後方支援です」

柳色のハンチングを被り、立派な口髭を蓄えた中年男性が本日は宜しく願いますと人好きする笑顔で右手を差し出して来るので、俺もそれに笑んで応じる。この人がペルポイさんか。名前はえらく可愛らしいが、横にも縦にもデカイ愛想の良いおっちゃんと言った感じが。首の見えない肉感たっぷりのアゴはさぞかし触り心地が良さそうだ。

「えーと、この依頼はあと何人来るんですか？」

「そうですね。伝承通りだと顎門へ入れる1パーティーの人数は6人までとの事らしいので、コーキさんと私を入れてあと4人ですか。——なんでも、ギルドの話では目も眩む様な美少年と少女の4人組が引き受けてくれたとの事です……」

ふう。と心なしか不安げに息を漏らすペルポイさん。まあ、これから伝説の秘境探そうってのに少年少女と俺みたいなのがメンバーでは心配にもなるわな。――はて？ 目も眩む様な美少年……まさか、な。不意に脳裏に浮かぶハーレム少年の顔を消し去り、ペルポイさんに気になった事を問い掛ける。

「“伝承”って言いましたが、何か顎門についてのヒントがみたいなものがあるんですか？」

「ええ、クレイル樹海を抜けた先の小さな農村に伝わる口伝がヒントになっているのではないかと思ひましてな」

ビシツと興奮気味に人差し指を立てるペルポイさんが興奮冷めやらぬままに続ける。

――大地を穿つ雷動石が轟く時、三賢者は黒き獣の内腑を求むる。

――宵闇に臨む勇者達は贖罪の焰を点し、猛き狼の首級しゑいを掲げて朽ちた聖木に命を捧げよ。

――されば、十字の袂にて慟哭の顎門あぎては開かれん。

長い年月を掛けて仰々しくなってるが、手順はゲーム中となんら変わってない事にホッと息を撫で下ろす。そして、瞑目して己に反芻させるが如く、一字一句を噛み締めるようにして言葉にするペルポイさんに、俺も大きく頷いた。

「……浪漫ですな」

「おお、わかりますか?! 私の妻や娘は理解してくれないのです

が
―

秘境の話になった途端に、鼻息荒く碧眼を輝かせて口伝についての自分なりの解釈をあれよこれよと説明するペルポイさんと俺は堅く腕を組み合わせ、すっかり意気投合してしまったのだった。

13. だって男の子だもの（後書き）

前回の投稿は不評だったみたいなので、精進致します…ッ。暫く冒険となります。

14 . そんなレベルで大丈夫か？（前書き）

更新遅れちゃってごめんなさい。

三種類作った14話のうち、悩んだ末にこれを投稿します。

14 . そんなレベルで大丈夫か？

“ 噂をすれば影がさす ” と言う言葉がある。『 人の噂は、ほどほどに 』 と言う古人の教訓、所謂格言だ。

例えば自分が噂をした当人でなくとも、目の前で友人などが誰かの噂をしていると、その話題の主が不意に登場してしまった時など、その場になんとなーく漂う気まずさに、思わず閉口してしまうものである。

これは成人するまでに誰しも、一度位は経験した事があるのではなからうか。

——とどのつまり、だらしなくポカンと口を開き、半目であれよこれよと思いを巡らせる（現実逃避する）俺が、何を言いたいかと言つと……。

「あーっ！ アンタ、あの時の！」

それは、ペルポイさんと出会って数分しか経ってないのだが、すっかり彼と数年来の友人の様に打ち解けてしまい、浪漫（冒険）についての話題に花を咲かせて語り合っていた時の事だった。何処か

で見覚えのあるポニーテール娘が目を見開き、俺を指差して驚愕する。

「えっ？ あ……あの時のお兄さん!？」

遅れて彼女の後ろからひょいと顔を覗かせるのは、見目麗しい絶世の金髪美少年。

「（ベタだ……ベッタベタだ）」

おや、お知り合いですかな？ と訊ねるペルポイさんに、俺はただ無言で引き攣った薄ら笑いを浮かべる事しか出来なかったのだった。

「私達四人が——」

「ええ、宜しく願います。私は——」

ポニーテールの……なんだっけ。——そうそう、トリスだったかな。彼女がペルポイさんと挨拶を交わしている所を見ると、やはり残りの同行者達はランス少年一行で間違いないようだ。

……あれ、四人？ 一人足りなくないか？ ランス君に、弓使いのトリスだろ。斧使いのボクっ娘に、双剣使いの無口っ娘と……。

「……あのう、お兄さん？」

「うお、近っ！」

不意に俺を上目遣いで覗き込む美少年（ランス君）の顔に驚き、飛び退る。あ、相変わらざるの距離感だぜ……。

前回の時の簡素な様相と打って変わって、本日は青を基調とした詰め襟の軍服風の服の上に、ブレストプレートを着込んだ冒険者らしい出で立ちだ。背中に背負った短槍と盾で戦う、機動性重視の片手槍型なのだろう。

「え、えーと。なんでございましょうか」

前回の件（触手縛り）の事もあり、トリス嬢に後でどんな因縁をつけられるかと、思わず片言で返してしまう。焦点が定まらず、視線が泳ぎ気味のランス君が仄かに頬を赤らめて話し掛けてくるのが、“別の意味”でも俺の動揺に拍車を掛けた。コワイ。

「その……、この前はありがとうございました。——それとごめんなさい」

「……へ？」

予想外の言葉と共に頭を下げられ、間の抜けた声を漏らす。

「うん、この前は本当に助かったよ。——あ、ボクの名前はアグーラーヴェエ。」

ハーフ・ヴァルガンさ。アグで良いよ」

パツチリとした二重で董色の双眸に、薄桃色の頭髪をサイドテールにしてまとめた垢抜けた容貌のボクっ娘——もとい、アグが頭部の触覚の様なアホ毛を指してはにかむ。

赤いチュニツクの上にブレストプレート、二の腕まであるゴツい
籠手。白いプリーツスカートに、銀製のニーソ脚甲と言うファンタ
ジーな装備だ。

なるほど、『鍛冶の民』のヴァルガンとのハーフか。ゲームの設
定では怪力で鍛冶職人系のNPCとして活躍してた種族だな。

初めて精錬場に訪れた時、いかついおっさんの頭部でみよんみよ
んと揺れ動くピンクのアホ毛には幾多のプレイヤーが衝撃を受けた
ものだ。巨大な戦斧が得物の彼女も例に漏れず、優れた臂力を誇る
のだろう。

「よし、先に紹介を終わらせちゃおうか。——トリス……は後でい
つか。この子はガ・ウエン。ウエンて呼んだげてね。

彼女は口下手だから、ボクがまとめちゃうよー。

見ての通りネビロムで、最年少だけど戦闘力は折り紙付きさ」

アグに肩を抱き寄せられた無口^{つつ}っ娘——ウエンが、口をへの字に
嚙^{つつ}んだままコクリと頭を下げる。

ネビロムは東側の大陸に集落のある戦闘民族だな。太陽の出てい
る昼間に身体能力が向上する“逆吸血鬼”みたいな設定があったと
思う。

ウエンはネルよりも少し背丈が高く、肩口までの白髪、眠た気な
赤い瞳に尖った耳のあどけない幼さの残る顔立ちだ。——そして、
頬と額に三角形を象った様な独特の紋様がある彼女は、ぴったりと
した黒色のレオタード風のボディースーツに獣革の腰布を巻いた民族
的な格好だ。

「ああ、アグとウエンね。俺は術士のコーキ。特筆すべき所がないから簡単に。」

——で、質問なんだけど助かったって何？ 説明してくれるとありがたいんだけども……」

「コーキ……コーキさん……」

何故か俺の名前を反芻する様に呟くランス君を華麗に全力でスル——した俺は、後頭部を掻きながらアグに説明を促す。

「ああ、そうだね——」

「それは私から説明するわ。——短い付き合いだし、紹介の必要は無いわよね？」

「アンタの事は術士と呼ぶわ」

perlポイさんと照会を済ませたトリスが、アグを遮り間に入る。

「こらっ、トリス。いくらなんでもこれから組む相手に失礼じゃないか？」

「そうだよ、トリスちゃん。そんな言い方しなくても……」

「フンッ、ランスは黙っててよ」

二人に咎められ、鼻を鳴らしてむくれるトリス嬢。

「あー、大丈夫大丈夫。——そうだな。人数も揃った事だし、道すがら聞かせて貰えるかな？」

ほら、依頼もあるし。ペルポイさん、挨拶も終えたんで行きましょ
うか」

お手上げのポーズでその場を治めた俺は、こちらの様子を怪訝な
表情で窺うペルポイさんに出発を要請する。

「ええ、そうですね。では、皆さん。改めて宜しくお願いします」

ペルポイさんが至極丁寧に腰を折ると、皆が各々に応答を返す。

やれやれ、楽しい旅になりそうだ……。

頭上を覆う梢から僅かに射し込む陽光が、空中漂う細かな水の粒
子に靡げに溶け込み、仄かな虹色の幕を作り出す。

そこは鬱蒼と樹木が生い茂り、正規の道程を外れた者を飢えた獣
の跋扈する魔域へと誘い、取り殺す天然の迷路——。

何処かから聴こえてくる狼系の魔物の遠吠えが樹木の海に残響し、
それに応じるかの如く、遅れて幾重にもあがる獣の咆哮が樹海を震
わせる。

——クレイル樹海の奥地にまで足を踏み入れると、そこはある種
の迷宮となる。濃霧で視界が遮られるし、足場が悪いしで、もう最

悪。所謂迷いの森ってやつですな……。あ、ランス君がコケた。

現在俺達は、咄嗟の反応に優れたランス君とウエンを前衛。中衛に中継ぎとして、トリス嬢とペルポイさん。後衛に俺とアグと言う隊列で、樹海の南西部——ペルポイさんの入手した情報にある《十字の袂》たもとを目指して進行中だ。

「ウエンちゃん、チェイン（連撃）お願いっ」

盾を持った小鬼コモンゴブリンに短槍の石突きで連打を加えたランス君の硬直時間を補う形で、素早く間合いを詰めたウエンが盾を打ち上げられた小鬼の胴に双剣を叩き込む。

「ちょこまかと鬱陶しいわね……。《飛燕》ひえん——次っ！」

三本の矢を同時につがえたトリス嬢が弦を引き絞り、魔力の込められた矢を放つ。そして、放たれた矢が標的に届かぬうちに、舞うかの如く回転して腰の矢筒から矢を引き抜き、再びつがえて射る。

ヒュンと鋭い風切り音を鳴らして射出された矢は、木の上からスリングショット（パチンコ）よろしく変化した己の尻尾を用いて攻撃を仕掛けてくる猿の身体を次々と射抜く。クレバーエイブ

地上から襲ってくる魔物は前衛二人に斬り伏せられ、木の上からいやらしく奇襲を仕掛けてくる魔物も、名射手トリス嬢の活躍で一蹴。……正直俺の出番は無い。

そんなこんなで、やる事と言えばハッスルしている彼等に支援魔法を掛ける位で、すっかり手持ち無沙汰な状況下の俺に、同じく暇を持て余すアグが必然的に事の経緯を説明してくれていると言う訳なのだが……。

「ケイトだっけ？ まさか、あの白フードの魔法娘が糸を引いていたとはなあ」

「うん、キミには本当に悪い事をしたと思う」

ケイト——あの時、俺に凍りの矢を放っていた心酔っ娘こそが、ランス君を狙う組織からの刺客だったと言うのだ。どうもあの日、食事に思考を鈍らせる毒を盛られた挙げ句、狂化の術を彼女に掛けられていたらしい。

それでケイトは彼女達が良い感じにラリっちゃってるうちにランス君を殺そうとしたのだが、俺が縛ってるうちに状態異常が回復し、結果的に謀殺は失敗に終わったみたいなのだ。

その後、正氣に戻った彼女達はケイトを問い詰めたが、一瞬の隙を突かれて取り逃がしてしまいましたとさ。うーむ。取り巻き（ハーレム）の中に暗殺者が居たなんて意外だったな。

「まあ、あれは偶然だし。成り行きだよ、気にしないでくれ。ともかく誤解が解けてよかったって感じ？」

大袈裟に首を振っておどけた仕草を見せると、アグは口元を押さええてクスクスと笑む。

「ふふ、その偶然で命が救われたんだ。ボクらは幸運だな。——あ、今更だけど、この口調のままでも良いかい？」

「ああ、楽な口調で良いよ。俺も堅苦しいのは苦手だし。

——しかしだ、取り逃がしたって事は、また襲撃される危険性があるって事だよな。もしかすれば、今すぐにでも」

あ。と間の抜けた声を出したアグが立ち止まる。そして彼女は、一拍を置いて俺の肩をポンポンと叩き、取り繕う様にからからと笑い出す。いや、ごまかされねーからなっ！

「コーキさん、どうかしましたかな？」

肩を落として頂垂れる俺に、前に行くペルポイさんが心配そうに声を掛けてくれる。

彼は商人とは言っても、金属鈍器メイスと盾で武装した戦う商人パワーファイターなのだ。しかも、レベルはなんと163——ランス君達も187、160の間って所か。俺だけだな、レベル二桁なの……。

「ちょっと！ 足を引っ張るのは止めてよね」

俺に対してひたすらツンツンなポニテ娘トリスが悪態つき、鼻を鳴らして踵を返す。嘘でもいいからデレをくれ。デレを。

「——彼女の事をあまり嫌わなくてくれるとありがたいな。普段はあそこまでトゲは無いんだが、ランスがキミに憧れを抱いているみたいだね。どうもそれに妬いてるみたいなんだ」

「ぶっ」

アグに耳打ちされたあまりに突飛な理由に驚愕2、呆れ8の割合で目眩を起こした俺は樹木に頭をぶつける。

「おや、大丈夫かい？」

「ダメだ。ライフ0だ。死ぬ前に、その胸に顔を埋めさせてくれ」

「やれやれ、清き婦女子に頼む事柄じゃないね。それ相応の覚悟と責任が必要だけど、どうする？」

蠱惑的な笑みを浮かべ、腰に手を当てて胸を突き出すアグ。あー、一時はどうなるかと思っただけ、こう言う軽口が叩ける相手が居るのは救いだっとな。

「生憎と甲斐性ナシのヘタレなのよね。……残念だ、また怒鳴られる前に自己回復するしかないな」

賢明だな。と笑うアグに続いて一行の後に加わり、口元を覆って大欠伸をする。

さて、このペースだと、もう半時もせずに《十字の袂》に着くだろう。初めてここのクエストダンジョンに挑んだ時の様な期待と興奮を胸中に秘め、俺は奥地へと邁進するのだった。

コーキ：レベル41 術士？

ペルポイ：レベル163 商人

ランス：レベル175 短槍士

トリス：レベル168 弓手

アグ＝ラーヴエ：レベル187
戦斧使い

ガ・ウエン：レベル160 双剣士

14・そんなレベルで大丈夫か？（後書き）

ランス君一行の名前が安易ですけど、統一したかったのでこんな形に相成りました。

アグさんは一行の中では一番おねーさんなのです。

それと、最後のレベル表記は参考値なので深い意味はありません。

15・掘って掘って人任せ（前書き）

ついに四半期4位に入る事が出来ました。応援して下さい皆様
に感謝！

15・掘って掘って人任せ

その後も、幾度かの魔物の襲撃を乗り越えた俺達は樹海を抜け――短い雑草の生い茂る僻地へとたどり着いたのだった。

こざつぱりとした平坦な原っぱの中心には、緑の萌えるこの場にそぐわない配色（黒紫）の朽木が一本。そこから左に降った緩やかな窪地には、花崗岩かこうがんの様な材質の巨岩を基準として、五つの白い石がペンタクル（五芒星）を描く様に等間隔で並んでいる。

「ふう。やっと樹海を抜けましたな。あの木の下で一休みしましょうか」

やれやれと、額の汗を布で拭うペルポイさんが朽木を指して嘆息する。恰幅の良い彼の大きな体格では、長い移動でかなりの体力を消耗してしまったのだろう。

「そうね。朝からずっと歩きずくめで、もうクタクタだわ」

「あはは。トリス、キミももっと基礎体力付けなくちゃね」

「な……ッ！ アンタは術士と喋ってただけでしょうがっ！」

「ちょ……二人とも喧嘩はだめだよぉ」

両手を振り上げて的確に突っ込むトリス嬢と、それをからからと笑いあしらうアグの二人をランス君が目を回して仲裁に入る。――その横では、我関せずと言った様子のウェンが、ヒラヒラと宙を舞う、蝶型のノンアクティブ（非戦闘型）モンスター（パピルス）を目で追っている。

「いやあ、若い人は元気があつてよろしいですねあ」

一足先に朽木の根本に腰掛けて休息するペルポイさんの横に腰掛け、俺もその様子を生暖かく見守る事にした。

「はは、ペルポイさんも十分元気つすよ――ちよつと失礼……《レノウアーチオ》」

ペルポイさんに両手をかざして“自己回復促進”魔法を唱える。本来の用途はHPとMPの自然回復上昇スキルなのだが、どうやらスタミナの回復にも効能があると言う事はネルとの狩りで実証済みだ。

これが一見地味な様で効果は抜群。体感だけど、通常よりも倍は回復速度が違うから、浮いた休憩時間をまるまる行動に使えるのだ。――夜の方にも使えるのだろうか……？ と、ふと疑問に思ったが、試す機会がないので断念する事にした。……情熱を、持て余す。

「おお……これはありがたい。みるみるうちに気力が漲ってきますな！

――さて、休憩がてらに今後の打ち合わせと行きましようか」

「ういーす。少年少女ども。ミーティングだ、集まれー」

いつの間にかトリス嬢に首を掴まれて振り回されるランス君と、それを見てケラケラと笑うアグ——てこてこと蝶々を追いつけるウエンを手招きして呼び寄せる。

最初は若輩者揃いで不安げな表情だったペルポ伊さんが、その様子を微笑ましく穏やかに眺めている様を見ると、それが彼の人柄なんだろうなあと伺えた。

こりゃなんとしても依頼を成功させたいねー。上手く行けば依頼料以上にも利益がある話だしな。その辺に關しては出発前にペルポ伊さんと相談済みだ。

「——ええ、では今から皆さんに説明を始めます」

皆が朽木の根本でペルポ伊さんを囲むようにして腰を降ろすと、彼はゴホンと軽く咳ばらいをして、薄茶色の古紙に殴り書いた伝承のメモを広げた。

——大地を穿つ雷動石が轟く時、三賢者は黒き獣の内腑を求むる。

——宵闇に臨む勇者達は贖罪の焰を点し、猛き狼の首級しゑしを掲げて朽ちた聖木に命を捧げよ。

——されば、十字の袂にて慟哭あきとの顎門は開かれん。

「ふうん。これが秘境へのヒントねえ……」

ランス君の横で足を斜めに崩して座るトリス嬢が、物珍しげにメモ紙を手にとって視線を這わせる。ひとしきり眉根を寄せて紙と睨

めっこし、ウーンと首を捻って隣のランス君を一瞥した彼女は——唇を尖らせて早々に考える事を放棄した。

「……ランス。はい」

「えっ？ 僕っ！？」

「ふむふむ？ ——これがヒントなのかあ。ペルポイのおじ様は目星がついているのかい？」

ランス君に密着して横から紙を覗くアグに、トリス嬢が抗議の声を挙げるのだが、それを華麗にスルーする彼女はペルポイさんに訊ねる。——その横ではウェンが何かの木の実を無表情のままかじっている。

「ええっ！ この《十字の袂》と言うのは、我々の後ろにそびえる崖で間違いないでしょう」

よくぞ聞いてくれましたと言わんばかりに、嬉々と己の豊満なお腹をポンツと叩き、赤茶色の断層が剥き出しになった高く切り立つ岸壁を指差すペルポイさん。

「うーん。ただの崖にしか見えませんけどお……？」

「この崖の上には、十字を象った古い石碑があつてな。それで《十字の袂》——って訳だ。ほら、ここからうつすら見えるだろ？」

「——あっ、ホントだ。見えましたよ、コーキさん！」

手の平を傘にして、崖を下から上まで眺めるランス君に石碑の位置を示唆する。100m程先の崖上の際には微かに十字のシルエツトが見て取れた。その石碑も、クエストでは竜を地底に封じた英雄の墓標って事になってたけど、どうなんだろうなあ。

「おお、コーキさん良くご存知で！——そしてつ、我々の頭上で枝を広げる、この朽木こそが《聖木》だと、私は睨んでいますっ！」

スイッチが入っちゃったのか、興奮し過ぎて食い気味にまくし立てるペルポイさんが、両手を広げて天を仰ぐ。ランス君達一行はこの人、こんなキャラだったの？と顔を見合わせて困惑顔だ。——若干一名だけは黙々と木の実をかじっているがっ。お腹空いたのね、そうなのね。

とにもかくにも、ペルポイさんの解釈は正解だ。崖上の石碑の直線上に根を張る、一本の朽木——幹の周囲が凡そ3m程で、葉の抜け落ちた黒紫色の枯木は表面に満遍なく亀裂が入り、ひび割れている。鈍く光りを反射し、ツルリと手触りの良いその材質は、木のそれよりも結晶化した石に近く、俗に“黒曜樹”と呼ばれる木材によく似ている。

この枯れた朽ち木こそがクエストの最後の鍵になっている《聖木》と言う訳だ。まあ、開始イベントである、《雷動石》をどうにかしないと何も起こらないんだけど……。

「え、と。《猛き狼》って言うのは、この辺りの領域に出る“狼王・リユカリオン”の事でしょうか？——その……、たまに遠吠えも聞こえますし」

ひとしきりに朽木の周りを歩いて調査したランス君が、木を撫でながら遠慮がちに意見を述べる。

——リユカリオンと言うのは、狼王の名の通り、ここら一帯を徘徊する狼型の中ボス級なユニークモンスターの名だ。初心者頃、迂闊にちよっかい出して頭からかじられたのも良い思い出。あの後、軽くトラウマになったっけ、うん。強さとしては低位なので、今の俺達ならまあ問題ないだろう。

「はい、そうだと思います。他にも、この周辺には三つの祠が等間隔で建てられているとか……。——三つの祠、三賢者……関連性のあるモノは虱潰しに調べて行こうと思います」

おお、よく調べてらっしゃるペルポイさん。んー。ここまで情報が出揃ってるなら、とくにダンジョンの入口が発見されてても可笑しくないのだが——「アレ」なんだろうなあ。上体を伸ばしつつ左方向の窪地を一瞥し、短く息を吐く。

「ふむ。内容は概ね理解出来たけど、伝承の最初にある、雷動石——ってなんなんだろうねえ？ “黒き獣” って言うのも漠然とし過ぎているし……」

足を組んで木の根に腰掛けるアグが訝しげに首を捻る。——さて、このまま問答を続けるのもなんだし、嘘も方便。ちゃっちゃと進めてしまおう。

「あー……俺も秘境の事については前々から色々調べててね。雷動石にはちよっと心当たりがある」

「ホントですかっ？」

ランス君が俺の隣に両手をペタンと地面につけてしゃがみ込み、何かを期待する様な眼差しで見詰めてくる。か、顔が近い——が、もういい加減慣れた。人間は成長する生き物である。彼の振り撒くフェロモンを、取り巻き少女達の生足で毅然とレジスト（相殺）した俺は、人差し指でランス君のデコを押し返しつつ説明を続ける。

「ああ、それは——」

「オイラア陽気な炭鉱夫。鍛えた身体とツルハシで、エンヤコラシヨ、ドッコイシヨ。——はあ」

手の平に風の球体の圧縮し、削岩機よろしく地面を慎重に削り取って行くと、幾何学的な模様の刻み込まれた灰色の台座が土の下から顔を覗かせる。——今回の依頼で初めて行う仕事らしい仕事は、なんと穴掘りだった。

俺の脇ではウェンがしゃがみ込み、どうみても『俺に気安く触れると漏れ無く火傷すっぜ?』と、懇切丁寧に忠告するかの如く、紫地に赤や紺の斑点の入った毒々しい警告色をした蛙型のモンスター（ポムフロッグ）を静かに観察している。

……彼女は俺の護衛らしい。他の四人は三つの祠を調査しに行ってしまった。

「……」

「あつ、こら。つつついちゃダメでしょ！　なんか毒液染み出てるからっ」

木の枝で蛙をつついて弄ぶウエンに制止を促し、額を抑える。どうしてこうなった。それもこれも全部、雷動石起動用の仕掛けが丸々この下に埋没しているからだ。畜生めっ。

《雷動石》とは、朽木の左側の窪地に鎮座した花崗岩風の巨岩の事だ。本来なら周囲に設置された五つの石に雷属性の魔力を通す事で中央の雷動石に連動し、起動させる簡単な仕掛けなのだが――。

周囲の石に魔力を通わせても反応は無し、俺の記憶中の雷動石は下方の台座部分が露出していたはずだが、今ではそれも土の下。

……俺の勝手な推測ではあるが、注いだ魔力を充填する役割のある、雷動石下方の台座に嵌めこむ魔石が何らかの理由で故障ないし、紛失――そのまま放置された結果がコレ（埋没）なのだと思う。

交換しとけよ。と思ったが、台座に嵌め込む充填魔石自体が、^{バッテリー}イベント入手品だったしなあ……。

そんなこんなで俺は、祠の搜索をペルポイさん達に任せて魔石の状況を確認すべく、一人えっちらおっちらと穴掘りに勤しんで居る訳だが……なんともみみっちい話である。うー、腰が痛い。

——あ、何も俺が掘らなくてもいいじゃないか。

ポンと手を叩いて得心した俺は外套についた砂埃を払い、早速インベントリ内からソフトボール大の茶色い玉を取り出して詠唱を始める。程なくして発動待機時間を終え、爛々と煌めく玉を俺は地面へと放り投げた。

「《サモン・ゴーレム》」

存分に魔力の込められ放られた玉は、慣性の法則に従って緩やかに落下。それと同時に玉を中心として魔法陣を展開——見る見るうちに周囲の土を取り込み身体を形成して行く。

『ム…………』

そして、俺の眼前に姿を現したのは、体長2m程の土人形——太く遅しい四本の腕を持ち、頭部と足に当たる器官は無く、地面を這いずる様にして移動する異形な魔法生物だ。^{ゴーレム}胸部には核となる“茶色い玉”が、仄かな光りを放ち収まっている。

「よし……ゴーくん。後を頼めるか？」

名前の安直さはご愛嬌だ。台座の指差し、作業を伝えたと、頭部が無いからだろうか——ゴーくんは上体を揺らして了承の意を示す。

一見、その無骨な風貌から繊細さに欠ける彼（？）だが、四本の腕をかざして器用に台座についた邪魔な土だけを吸収して行く。俺は傀儡系スキルの熟練度が低いから、戦闘で扱う機会はなかったん

だけでも、こんな汎用性があるなんてな……。

「凄いで、ゴーくん。頼もしいぜつ。よっ、穴掘り名人！」

『ム』

黙々と作業を進めるゴーくんが、四本のうち一本の手の平をこちらに向けてヒラヒラと振り、俺（主人）を追いつく動作を見せる。

「創造主に対してその振る舞いつ?!」

発掘をゴーくんに丸投げした俺は、掘り掘りする彼の一挙手一投足に反応を見せるウエンを観察したり、スキルの改造、調整を行いのんびりとした時間を過ごした。

30分程も経てばゴーくんが台座を綺麗に掘りだしてくれた、が——案の定、魔石が収まるべき所には何もなく、そこには半円状の窪みがあるだけだ。

「つか、やつぱりか。充填魔石のストックは……六個。——ま、先行投資って事で」

曇り一つない、無色透明なソレを半円状の窪みにあてがうと、カチリと言う音を立てて隙間なく嵌まり込む。

「後は魔力を流すだけ……か。ウエン、一旦皆を呼ぶぞー？」

俺が後ろを振り向き訊ねると、ゴーくんをペタペタと触るウェンが、コクリと頷く。

「よっし、いっちょ派手に打ち上げるか」

右手をにかけて、“花火”の詠唱――そして射出を行う。ヒュルヒュルと独特の風切り音を鳴らし、天高く打ち上げられたそれは、一定の高度にまで達すると、腹にズシリと響く破裂音を轟かせ、青空に極彩色の菊の花を咲かせる。

「たーまやーっ」

今のは割とポピュラーな割物花火。夜だともっと綺麗なんだけだな……。

――ネタスキル《夏の風物詩》。色んな種類の花火をランダム生成で打ち上げるスキルだ、ちなみに殺傷能力はほぼ皆無と断言している。これを合図にペルポイさん達はこちらに戻って来てくれるはずだ。

「……ん？」

パラパラと降り注ぐ花火の残滓を眺めて居ると、袖を引っ張られているのに気付く。そちらに視線をやると、ウェンが上を指差し、何度も袖を引いている。

「……ははあん？ もっと見たいって事だな」

俺がニヤリと笑み、訊ねると、ウェンは何度も顎を引いて返答する。その後、ウェンをゴーくんの上に乗せてナイアガラ型、土星型……等など、次々と花火を打ち上げ続けたのだが――。

突如、根本から力任せにへし折られた樹木がこちらに吹き飛んで来る。

「……………」

『グルルルル……………』

「お?」

豪快な破砕音と共に樹木を薙ぎ倒し、正面の茂みを掻き分けて俺達の前に姿を現したのは――「ごわごわとした濃灰色の体毛に、三対六眼の金色の瞳。

鋭利な歯の並ぶ深く裂けた口元から下へ突き出るのは、思わず自重しろと言いたくなるサーベルタイガーも真つ青な二本の鋭い牙。

強靱さを感じさせる洗練された肢体に、先端が二股に分かれた黒い尻尾を持つワゴン車サイズの巨大な狼の王――その名も、リュカリオン。

「……………おお。探す手間が省けた（調子に乗り過ぎた）……………な」

花火の音にすっかりご機嫌斜めな様子で殺気立つ“狼王”の背後からは、取り巻きの狼達スレイヴ・ウルフが涎を垂らしてぞろぞろと姿を現す。…………ざつと二十頭つてとこかね。

「……」

ゴーくんから飛び降りたウェンが腰に佩びた双剣を引き抜き、クルクルと回転させて逆手で腕を構える。

「本日初戦闘だなっ」と

俺もオクスタンロッドを具現化し、肩に担いで詠唱を始める。

『ヴォオオオオンッ！！』

金色の六ツ眼に怒気を孕んだ狼王が天を仰いで咆哮を挙げると大気が震え、それに応えるが如く、取り巻き達が次々と咆哮を挙げる。

——今ここに、開戦の火蓋が切られたのだった。

15・掘って掘って人任せ（後書き）

誤字、脱字等があればご報告して頂けると助かります。

16・フレームアウト（前書き）

更新が遅くなって申し訳ございませんでした m (m

16・フレイムアウト

リユカリオン
狼王に統率された狼達は先ほど下された号令から大地を蹴り上げ、
スレイヴ・ウルフ
跳ねる様に疾駆する。

低い唸り声を挙げ、突っ込んで来る奴らの陣形は、扇状に展開して俺達を取り囲む形だ。集団で狩りをする狼らしく、数の利を生かして各々が一對のペアを組んで連携し、こちらに襲い来る。

トリス嬢に俺の護衛を頼まれたウエンは、圧倒的物量で迫る狼達相手に臆する事なく、落ち着いた様子で向かい来る第一陣を断ち切るうと双剣を水平に構えて悠然と歩を進める。

実に頼もしい……が、俺も曲がりなりにも二十歳を過ぎた男だ。いくら実力者と言っても、さすがに中学生くらいの娘さんに護つて貰うだけってのは自尊心が傷付くつもんだ。

「ウエン、近付いて来た奴だけ頼む。——ゴーくん、前方10mまで進行、“越えた”奴らを蹴散らせ」

スタンバイ
魔法の発動状態に入った俺が声を掛けると、ウエンはピタリと立ち止り、こちらの意を汲んでくれたのか、首だけをこちらに向けて顎を引く。

俺の指示を受けたゴーくんは身体を這いずらせて進み、大きく四本の腕を広げて狼を迎え撃つ体勢を取る。

「頼んだぞーっ——《ウェアリィ・スワンプ》」

最初の狼集団が攻撃有効範囲にゴーくんを捉え、飛び掛かる寸前で俺は魔法を発動させた。

『ギャツ?!』

不意にゴーくんの前方の大地がぬかるみ、狼達の身体が沈み込む——これは足元が『土』と言う状況下でのみ使用出来る妨害スキルで、対象の移動を妨げるだけに止まらず、沼から脱出した後も移動速度減少、回避率減少等のバッドステータスを付加するなんともいやらしい魔法だ。

それを嫌がらせとばかりに二、三設置して行くが、本能で動く狼達も馬鹿ではない。何匹かの仲間が沼地に沈めば、直ぐさま危険を察知して沼地の間を縫うようにして駆けてくる。——泥濘で進行方向を制限し、こちらが誘導した通りに狼達が移動してくれて自然と笑みが零れた。

「おっ。わざわざそっちから集まってくれて嬉しいねえ」

《ソニア・プリズン（荊の牢獄）》

突如、地面が揺れ蠢いて隆起し、一カ所に集めた狼を囲う様にし、半径5メートルの円形型に鋭い刺がずらりと並んだ荊の蔓が大量に飛び出す。

現れた荊は互いに複雑な菱形網状に絡み付き、悍ましいドーム型の牢獄を形作る。そして、俺が腕を振り下ろすと荊の刺壁が中心に向かって一挙に集束。——ギシリと軋みながら圧縮された牢獄は、

狼達の痛苦の断末魔と共に真紅の華を咲かせて四散した。

「おおぅ……。現実^{リアル}で使うと少々酷だな……。なんか悪役っぽいし」

地形を生かし、これ幸いと土属性の中級規模範囲魔法を使ってみたのはいいものの、想像以上に凄惨な様子に思わず顔を顰め、口角を引き攣らせながら視線を前方に向ける。

沼にはまり込み、運よく串刺しを免れた狼達も、俺が“指定”した境界線を越えた事により、碌に身動きも取れないままに容赦無くゴーくんの拳骨を頭上から叩き込まれ、次々と戦闘不能に陥っていく。

この泥濘ないし、拘束術しかり、俺は大魔法でドカーンと暴れるのよりも、こう言う地味で狡い（こすい）戦いの方が好きなんだよな。こう、性に合うと言うか……。もちろん派手な大魔法も好きなのだが、性格の地味さが戦闘スタイルに滲み出しているのかも知れない——ま、今更なので気に止めない事にした。

「……」

ウエンは俺の脇で戦闘を寡黙——と言うか沈黙のままに眺めているが、先程から尖った耳を垂らし、ソワソワとしてどうにも落ち着きが無い。……えーと、もしかして。

「ウエン。……やりたいのか？」

俺の質問に、垂れた耳をピンと立ててコクコクと首を上下させて答えるウエン。……そっぴや戦闘民族だっけか、この娘。

「んじゃ、攻守交代！俺は支援に回るから任せ——早っ！え、はっや」

言い切る前に脇目も振らず突っ走って行くウエンに、俺は苦笑しつつも身体強化魔法を施し、その後に続いた。

そんなこんなで、四本の剛腕で狼達を掴んで、投げて、振り回して縦横無尽（やりたい放題）に圧倒するゴーくんと、神風娘ウエンの活躍の甲斐もあり、取り巻き連中はほぼ壊滅。後は全身の毛を逆立て、低い唸り声を挙げてこちらを睨みつけるリュカリオンと、取り巻きの四匹を残すのみだ。

「残りはお前らだけだな。さ、遊ぼうかワンちゃん？——まずはお手からだな」

杖に付着した血を振り払って地面に突き刺し、右手を狼王に差し出して手招きをする。

『グアアアアッ！！』

果たして俺の安い挑発が効果を成したのかは定かではないが、狼王が今までの物よりも遥かに大きな咆哮を轟かせ、俺とウエンは堪らず耳を塞ぐ。

そして、激しく耳を打つ轟音が止むと、狼王の背後の藪やぶからは唸り声と共に新たな取り巻き狼達が次々と姿を現す。——所謂、取り巻き召喚だ。

「おっとー……これじゃあ、お手をするにも手が足りないな。

ゴーくん、腕を増やしてみないか？　ここは思い切って、ヘカトンケイル（百本腕）とかどうよ」

『ム』

こちらを振り返り、いらん事すんと言わんばかりに、腕を左右に振るゴーくん……ってウェンもかよ。俺は肩をすくめて魔法の詠唱に入るのだった。

「雑魚は消えなさいっ！」

『ギャ……ッ』

キラキラと光る魔力粒子の軌跡を描き、鬱蒼と生い茂る樹木の隙間を縫って疾^{はじ}る矢がコモンゴブリン達の眉間に次々と突き刺さる。

「もうっ、歩き難くて堪らない——よっ！」

前方のコモンゴブリンを《フェイルノート（必中の弓）》で射るトリスちゃんに、続くアグちゃんが背中に背負った《アルカイド（破軍の戦斧）》を装備し、魔物を藪ごと薙ぎ払って道を切り開く。

つい先程まで空にコーキさんが打ち上げたと思われる信号が上が

つていたのに、魔物——恐らく狼王の大きな咆哮の後からそれがピタリと途絶えてしまった。二人は無事だろうか……安否が気掛かりで胸が締め付けられる。

「大分近付いてきましたな。この林を抜ければ、あの野原だと思います。」

皆さん、もう一踏ん張りですぞっ！」

ペルポイさんが円形の金属盾バックラーでスレイヴ・ウルフを殴り付けて怯ませ、鋏のついたメイスを振り下ろす。そして、前方を指差すとお腹をポンツと叩いて揺らした。

「嗚呼、これだけ動いているのに私のお腹ときたら……。さっ、行きますよ！」

口惜しそうにペルポイさんがお腹を摩って走り出す。その様子が高んだか可笑しくて、先程までの緊張が吹き飛んだ様に思えて僕たちは顔を見合わせて破顔した。

林を切り抜け、野原に辿り着いた僕たちの前で——土媒体の魔法生物レムが四本の腕で狼王を押さえ込み、その脇ではウエンちゃんがり巻きの狼達を擦り抜け、狼王に一心不乱に攻撃を仕掛けている。

一見隙だらけのウエンちゃんの背後から飛び掛かろうとする狼は、攻撃の寸前でガクリと動きを止めて、コーキさんの射出する土の杭で正確に撃ち抜かれている。——狼達のその様子はまるで、見えない“何か”に足を捕われている様に思えた。

『グアアアッ!!』

血に濡れた狼王が、組み合ってるゴーレムの左上腕に牙を食い込ませ、そのまま力任せに首を捻って腕を引き千切った。狼王がねじり切った丸太の様な腕は、地面に落ちると土塊になって崩れ去る。

あのゴーレムはコーキさんが……？　だとすれば、精霊術に神聖術……それに傀儡術まで扱えるなんて、軽く見積もっても――。

「……どうやら彼は、ボクたちよりもずっと実力者なのかも知れないね。

ランス、ぼうつとしてる暇はないよ？　ボク達も行くよっ」

呆ける僕の肩を叩いてアグちゃんが駆け出す。ふと我に返ると、ペルポイさんとトリスちゃんはそれぞれ近くの狼達に攻撃を掛けていた。

「う、うんっ！」

右手に持つ《ピ・ナーカ（軍神の焰槍）》の柄を握り直し、僕も皆の後に続いてコーキさんの元まで走る。

「おっ、助かったー。取り巻きが多くてしんどかったのよ――コーくん、ウェン、衝撃波くるぞ。下がってくれ」

こちらに気付いたコーキさんが左手をひらひらと振って僕たちに強化魔法を掛ける。コーキさんは笑みながらも視線は狼王から外さずに、その挙動を見定めている様だ。――事実、その後すぐに狼王は前肢を大地に打ち付け、衝撃波を繰り出した。

それをヒラリと宙返りで躲したウェンちゃんは、逆に双剣で狼王に反撃を与え、ゴーレムは残った三本の腕を交差させて衝撃波から身を守る。

「凄い……コーキさんは攻撃がわかるんですか!？」

「近づ……ああ。大体一定の行動ルーチン——いや、観察した結果だな」

僕が詰め寄るとコーキさんは物凄い早さで後ろに飛び退り、両手をバツに交差させて警戒の色を見せる。なんでコーキさんは僕と距離を取るんだろ……？ 僕としてはもっと仲良くなりたいのに、酷いです。

「術士っ！ リュカリオンが魔素を溜めてるわ。なんとかしなさい！」

僕の隣でウェンちゃんの周囲の狼に牽制射撃を行うトリスちゃんが怒号を上げる。視線の先にはゴーレムと組み合ったままの狼王が、低い唸り声を挙げて口内に炎の魔力を集束させている——あれはブレス（火炎放射）攻撃だ。

……それにしても、トリスちゃん。なんとかって……うう、相変わらずだなあ。

「はいはい、お嬢様。なんとか、ね」

《アースニードル》

肩をすくめてコーキさんが放った土の杭は“ゴーレム”に突き刺

さり、先程の狼王の攻撃で欠損した腕が再生される。そして、素早く腰のベルトに刃の着いた杖を差し込み、狼王に向かって駆け出すその姿にトリスちゃんが短い悲鳴を挙げる。

「なっ、正面から……。消し炭にされるわよ!？」

何時でも回避行動を取れる様に油断無く構えるペルポイさんにアグちゃん、魔素を溜める狼王から離れたウエンちゃんを尻目に、引き絞った矢の様に駆けるコーキさんは次の術式を展開した。

「ゴーくん、思いつ切り殴れ（アースシェイカー）！」

コーキさんの両手から光りの帯が伸びて狼王の首を縛り付けて固定する。そして、四本の腕を凝縮させ——まるで“巨人の拳”のような形態に変化したゴーレムが、狼王の固定された顎下に潜り込み、全身を武器に打ち上げ攻撃を行う。
アップバーカット

『…………ツ?!』

その衝撃に狼王の口から突き出した二本の長い牙は、鈍い音を立てて根本からへし折れ、口内に溜めていた赤い魔素は掻き消えて煙りの様に四散する。

こう言う場合、通常は僕たちみたいに万全を期して攻撃に備えるか、相手の足元を狙って体勢を崩して行動を阻害するのが定石^{セオリー}だけど……こんな破天荒なやり方をする人を、僕は初めてみた。

「…………あんなの、あり？」

「あはは、無茶苦茶だね」

「いやはや、頼もしいですな」

そう思ったのは僕だけでは無いみたいで、他の皆も目を丸くして呆然としている。

「そのまま、エアリアル（上空攻撃）アシスト」

ベルトから杖を外したコーキさんが疾駆しながら指示を下すと、ゴーレムは元の形態に戻って狼王とコーキさんの間に入り、狼王の前肢をつかみ取る。

そのままゴーレムの背を台にして駆け上がり、跳躍したコーキさんは狼王の首筋に杖を突き立てる。そして、勢いのままに空中で身体を翻して逆さまになったコーキさんは悪戯な笑みを浮かべた。

「延髄直結は痺れるぞつと——《サンダーフォール》」

コーキさんが黄色い術式を纏った右手を振り下ろすと、狼王の首に突き立つ杖に轟音と共に一筋の稲光が走り、全身を大きく震わせた狼王は、脚を折って力無く地面に崩れ落ちる。

「よしっ——お？ お、おおおっ？！」

——そして、僕たちを驚愕させた張本人は跳躍の勢いを見誤ったのか、背後の樹木の枝を折りながら藪の中へと消えて行ってしまった。

「ええっ？！」

「……アホだわ」

「彼は出来るアホだよ。そう信じたい」

群れの主を失い、蜘蛛の子を散らす様に撤退する狼を一瞥して嘆息するトリスちゃんと、戦斧を地面に突き立てて伸びをするアグちゃん。

「コ、コーキさん、大丈夫ですか？」

「……」

慌てて藪に飛び込んだペルポイさんと、ゴーレムを撫でるウエンちゃんと共に、僕もコーキさんの搜索に向かうべく駆け出したのだ。
った。

16・フレームアウト（後書き）

残酷、15Rタグ無しなので戦闘描写がぬるいかも知れません。要望があればタグを追加して、今後は血生臭く無い程度に描写して行きたいと思います。

今回の話しには（）等のルビが多く入っているので、鬱陶しい！読みにくい！と思う方が居れば修正&mp・今後の執筆の参考にさせて頂きたいです。

17・追跡者と達観者

いささか寝心地の悪い茂み（ベッド）に体重を預け、呆けたままに頭上を仰げば……開けた梢から覗く、何処までも青い蒼天と、ヒラヒラと舞い落ちて来る青葉の小雨。そして、遠ざかってゆく文字通り狼狽えた様子の甲高い獣の鳴き声。

「うへ。葉っぱが入った……」

口内のパサパサとした舌触りの葉っぱを吐き出し、木の枝で擦った頬を撫でる。いやはや。魔法の出力しかり、今回の力加減^{ジャンプ}しかり、こっちに來て一週間も経つてのに上手く行かないもんだ。

ゲーム感覚の癖のままに動くと、どうもやり過ぎてしまう傾向がある。この辺も慣れだろうなあ。今回は大丈夫だったけど、レベル1のアースニードルなんて通常は俺の腕サイズなのに、集中を乱して気を抜けば、同じレベル1でも丸太サイズになるんだもん……。

この世界だと、魔力量でサイズが変わるんだろうか？ 消費魔力は同じとは言え、どうにも不格好窮まりない。

「コーキさーん。大丈夫ですかー？」

どうやらペルポイさんが救出に来てくれたらしい。俺は片手をヒラヒラと振って無事を伝えた。

「うーす。大丈夫です、ちょっと張り切り過ぎました」

頬を引き攣らせて自嘲気味に笑む俺に、
「いやいや」と破顔して手を差し出すペルポイさんの腕を取り、引き起こして貰う。

その肉付きの良い手を握ると、昔の職場の同僚のおっさん達を思い出してなんだか嬉しくなった。——いや、おっさんの腕を握って嬉しいってのもどうかと思うが。

……まあ、あの頃は充実してたしな、イロイロと。亜麻色の頭髪を揺らして笑うアイツの顔が脳裏に浮かび、チクリと疼く腹部を抑える。

「コーキさあああんっ」

「ぬっ?!」

咄嗟に危険を感じた俺が半歩身体をずらすと、木の根に躓き、こちらに両手を広げて飛んで来たランス君が茂みに頭から突っ込んだ。なんで毎回コケたり、全力で飛び込んで来るんだ？ ラブコメの主人公か、オイイツ！

暫く、茂みに突き刺さったランス君をペルポイさんと呆然と眺めた後、お互いに何を言うまでもなく顔を見合わせて小さく頷く。

「その、なんだ。大丈夫か？」

「たふけてください」

遅れてきたウェンと、茂みからランス君を引き抜いた俺達は、狼の素材回収をしていたトリス嬢達と合流し、《聖木》の下で一旦昼食休憩を取る事にした。

彼女達が回収してくれた戦利品は以下の通りだ。

狼王の首級^{しゑし}×1

狼王の鋭牙×2

狼王の――

……と、他にも狼素材が多数。今回必要なのは、首級だけなので割愛する。

狼王系の素材からは敏捷性に補正の掛かる装備が作れたはずだ。買い取り希望者が居なければ、素材は依頼終了時に、ペルポイさんがギルドの買い取り価格よりも割高で買い取ってくれるらしい。特に素材を必要としない俺は、了承の旨を伝えた。

「……で、術士。アンタ、一体何者なの？」

薄桜色のナプキンを膝に広げ、上品にサンドイッチを食べるトリ
ス嬢が鋭い視線をこちらに向ける。

「はあ……？」

この世界の携帯食はサンドイッチが普及してるんだな。——等と
思考に耽って居た俺は頼杖を突いたまま、間の抜けた返答をした。

「とぼけたって無駄よ？ アンタが《バイロップ真紅》——いいえ、少なくとも
グロッシュ《灰紅》級の実力を持つてるのは子供でもわかるわ」

ビシリと腰に手を当て、したり顔でこちらを指差すトリス嬢に、
俺は肩をすくめて両手を挙げる。

彼女の言う灰紅、真紅とはギルドの五つあるランクを示す称号の
様な物らしい。確か、ギルドで貰ったパンフ（冊子）にも書かれて
いたが、住所不定の俺がギルドに入るには条件が面倒だし、特に興
味がなかったから流し読みしてたな。——真紅は上から二番目だ
ったと記憶している。

ゲームに慣れ親しんだ俺としては、英数字でランクを示してくれ
た方が至極わかり易いのだが……、どうもいまいちピンと来ない。
色が赤く、濃くなって行く程にランクが高くなると覚えればいいの
だろうか。

ちなみにランス君達は下から二番目の《スベサー蜜紅》に当たるらしい。
もちろん、ギルドに未登録の俺はそれより下の見習いクラスになる。

初心者ダンジョンに入り浸ってる俺には、どのランクがどれ程強

いとかさっぱりだわさ。トリス嬢が何を基準にランクを判別してるのかは甚だ疑問だが、あれこれと問い質される言われはないと思う。

「なんだ、そんなに俺と親密になりたいって？」

「な……ッ。誰がアンタなんかと！」

「つまり、そう言う事だろう。いらぬ詮索は無粋だよ、トリス」

そう言う事。と俺が付け足し、場を治めてくれたアグに視線を送ると、彼女は微笑して首を傾げる。しかし、それでまた以前の様にトリス嬢から暗殺者と疑われるのは勘弁して頂きたい。ある程度の事情は話すべきだろう。もちろん、馬鹿正直に話すつもりはないけれど。

「いや、実際は隠す程のもんでもないんだけどな。俺は物心つく前に親に捨てられた身の上なもので、ギルドにや未登録なんだ。

——で、今回の依頼を成功させてコネを作ったときについてワケ」

戦闘技術に関しては、生き延びる為に血の滲む様な努力をして身につけたと言う事にした。——努力については、何かに没頭したくて寝る間を惜しんでレベル上げに時間を費やしたのだから、一応嘘は言っていないぞ、うん。

しみつたれた雰囲気にならない様に、俺が身振り手振りを交えて笑みながら説明をすると、トリスは顔を曇らせて押し黙る。いくら明るく語っても、こんな話を聞かされれば、余程精神の凶太い奴で無い限りこれ以上は踏み込めまいて。

「そう……。悪かったわね」

「コーキさん。この依頼、必ず成功させましょうね！」

割と素直に頭を下げるトリス嬢と、真摯な表情で俺の手を取り、寶石の様な碧眼に氣力を漲らせるランス君。……あれ？ トリス嬢の事だから、もつと突っ掛かって来るかと思っただが、とんだ肩透かしである。きつと根は良い子なのだろう。

仄かに胸中に去来する罪悪感を ま、いつか。 と、即刻脳内のごみ箱にポイした俺は、茶色いパンに魚の姿焼をそのまま挟んだだけの斬新な食べ物――バトラーさん手製のサンマもどきサンドを口に運んだ。……意外とイケるな、これ。

「なるほど。それでキミは新ダンジョンを発掘し、ギルドの評価を得ようと算段してると言うわけだ？」

ウェンの口の周りについたソースを拭いながら、アグが得心した様子で言う。

「ご明察。ギルドから“それなり”の評価を貰って置いて損は無いし、……何より得られる利益も美味しい」

サンドイッチの残りを口に放り込んだ俺は、ウェストポーチに仕舞っていたパンフを取り出し、ページを二、三めくって、ある項目に目を通した。

そこには、ギルドの紹介用に簡略化された大雑把な事柄しか書かれてないが、記された内容をかみ砕くところだ。

——未確認、もしくは未登録のダンジョンを発見した場合、内部の探索、調査情報を最寄りのギルドに報告した者には、その後そこから得られるギルドの利益の一定額を支給する。

つまり、俺達が《盲目竜の顎門》^{あぎし}を発見したとしても大本の所有者は、基本的にここら一帯を管理しているフランチェスの物となるのだが、発見者である俺達のパーティーにはそれに伴うギルドの収益から、それなりの手数料が貰えると言うワケだ。

出発前にペルポイさんから詳しい事を問うた結果——手数料は1%程度との事だったが、中から採れる鉱石や、手に入る素材の事も考えれば大きな利益になるだろう。“幻”と謳われる黒甲殻竜^{シュヴァルジエイド}素材は値崩れするだろうけど、全体の利益から見れば瑣末^{さまつ}な問題だ。

ま、込み入った話は依頼が終えた後に、依頼主で口伝の持ち主であるペルポイさんに一任すればいいだろう。頭の悪い俺は、そういう権利だとか、なんだとかの内容に疎いし、ギルドに俺達の記録の残った状態で、商人の彼が利益を独り占めする様な事になれば沽券に関わる事だしな。

そもそも俺の目的は金よりも、新ダンジョン発掘でギルドから得られる評価がメインだったりする。今の所ギルドに登録するつもりは無いが、ある程度の信頼を得ておけば、いざという時に役立つかも知れない。

もし、必要に迫られる時が来れば即座に対応出来る様に保険が欲しい。そんな打算も込みで、俺はある気掛かりを抱えながらも腹を決めて依頼を受けた。……しかし、そんな俺の懸念も、どうやら杞憂に終わっただけらしい。

《盲目竜の顎門》は、何百年も不可侵の秘境と言われるだけあって、“見学”を考える人間は案外少ないみたいだ。発見さえすれば働かなくとも金が入る——これだけ美味しい話なのだから、俺はもつと見学希望者が付けて来ると思ったのだが……前方の林の影に一人と、左の茂みに一人。潜伏スキルのレベルが低くて、バレバレだつっの。

こちらの人数を考えると、他にも大勢仲間が居ると考えた方が良さそうだな。わざわざ目の前で、必要以上に土系の魔法を多用する所まで見せたのだから、せいぜい対処法を考えて欲しいものである。

「おや。疲れが取れませんかな？」

見張り役のお粗末な潜伏に辟易とした俺が、呆然と林を眺めて眉間を揉んでいると、肉等の具材がたっぷり入った大きな饅頭を、一口大に千切って食べるペルポ伊さんが怪訝な表情で訊ねてくる。

大柄な外見に見合わず、ペルポ伊さんの昼食はそれ一つらしい。彼曰く、ダイエット中との事。……人のオカズにまで手を出す、あの生意気な大飯食らい（ネル）にも見習って欲しいものだ。

「なんつーか。こんなに気を張るのって久々で」

「はは、コーキさん程の使い手でも緊張するんですなあ」

「よして下さいよ。少し魔法は使えますけど、見たまんま貧弱なんですから」

その分、前衛は私が頑張りますよ　と豊満な腹を揺らして意気込むペルポ伊さん。

「あはは。でも、依頼主にばかり戦わせる訳にはいかないよね？」

「……」

果物ナイフで林檎の様な果実の皮を剥いて兎型にするアゲと、それに視線を向けたまま頷くウェン。

「登録者の先輩としては、後輩の補助をしてあげる義務があるわね」

「もうっ、トリスちゃんてば素直じゃないんだからー」

「うるさい。ランスの癖に生意気よっ！」

「ふえっ?!」

そして、俺への風当たりが多少柔らかくなったトリス嬢、相変わらずのランス君と、その後も有意義な昼食タイムを過ごしたのだった。

17・追跡者と達観者（後書き）

次回の更新から、残酷タグが付くと思います。そこまで酷くはありませんが、一応予防線と言つことで、平にご容赦下さい。

18・俺達フェティシスト（前書き）

今後の予防線として、今回から残酷タグをつけさせて頂きます。暑くなりましたねー、どうか皆様も熱中症にはお気をつけ下さいませ。

18・俺達フェティシスト

昼食を終えた俺達は、ゴーくんが掘り出した雷動石にサクツと魔力を注入——『盲目竜の顎門^{あぎこ}』出現の第一条件である“雷動石”の起動に成功したのだった。そして……。

『ヴオオオ、オオツ』

起動によって具現した魔法陣から出現した異形の魔物、言わば^{ガー}守護神^{ディアン}と絶賛戦闘中と言うワケだ。

異形の魔物が肉迫する白髪の少女に向かって^{ランス}騎乗突撃槍から連続突きを繰り出す。

「……………」

ヒュンヒュンと鋭い風切り音と共に標的を貫かんとする刺突の連打を、ウェンは赤い双眸を微かに揺らしながら、身体の重心を左右にずらすだけの最小限な動きで躲してゆく。

その異形——赤紫色の目出し帽の様なマスクから碧一色の単眼を爛々と輝かせ、威圧的な眼光を放つ。尖った三角耳は真上にピンと

突き出し、リング状の銀製ピアスがジャラジャラと揺れ動く。

首元には鉾のついた金属製の赤い首輪、上半身には鉾を幾重にも縫い付けた禍々しい赤紫の鎧。右手に巨大な漆黒の突撃騎乗槍、左手には鋭い刺のついた丸盾^{スバクシールド}。

鋭利な爪で大地を踏み締める四本の脚……そして、人間の様な二本腕を持つ“黒き獣”——《オニキス・ベルラール》。前方に大きく伸びた口元からは二本の犬歯を覗かせ、シャープで洗練された顔付きはドーベルマンを彷彿とさせた。

その風貌は、ケンタウロスの上半身が人では無く、犬バージョンと言った所か。

ありていに言うなれば、ワンタウロス？ イヌタウロス？ ……
なんか違うな。——よし、ワンタンで行こう。

「……」

ウェンがワンタンの突き搔い潜り、鎧を纏わぬ下半身をバツ印に切り裂く。

『ゼイイイ……ッ！』

その小さな身体に命中さえすれば、容易に風穴を穿てる必殺の攻撃を紙一重で躲す眠たげな少女——苛立ちで歯茎を剥き出しにしたワンタンは、突きの点攻撃から側面からの面攻撃に切り替えた。

そして、「これでどうだ」と嘲笑うかの如く、目尻と口角をグニヤリと歪ませて渾身の力を込めた薙ぎ払いを繰り出す。

「ウェンちゃん！」

ランス君の警告で横払いに素早く反応したウェンは身体を左半身に翻し、双剣を交差させて突撃騎乗槍をギリギリと耳障りな金属の摩擦音と火花を散らし、後方へと受け流す。

ゲーム中では巨大な大剣をブンブン振り回す怪力幼女なんてを沢山見掛けたが、小柄な彼女が倍以上の体格差のある魔物の攻撃を受け流すのを見ているのは、少々心臓に悪いものがあるなあ。

取り合えず俺は、自信満々で放った横薙ぎを軽々と凌いだウェンに憤慨し、蹴りを放とうとするワンタンの右前肢の前に土柱を出現させてそれをブロック。そして、効果対象の次回の被ダメージ威力を倍増させるスキル《ヴォーパル・ペイン》をワンタンに発動した。

「——トリス、やっちまえ！」

「……言われなくても——《雷轟》——！」

矢を番えてワンタンの隙を窺っていたトリス嬢が引き絞った矢に魔力を込めると、ミスリル製の鏃やじりがついた矢が青白く発光して帯電——渦巻く魔力が限界まで圧縮され、“銛”の様に变化した矢をワンタンの頭部目掛けて射出する。

「防げるものなら防いでみなさい！」

幾重にも展開した幾何学模様の描かれた魔法陣を貫く度に雷光と火花を散らして速度を増す様は、さながら劣化電磁砲レイルガンと言った所か。

『ギヤアア、アアア……ッ——！』

咄嗟にワントンは左手の刺付き盾で防ぐが、スキル効果で威力の倍化したトリスの放った矢は圧倒的な熱量で盾を融解、貫通して腕と片耳を吹き飛ばす。

「今です、お二方っ。行きますぞ！」

「ああ——あの槍はボクが抑える」

「はいっ！」

激痛に口から白濁した泡を吹き出すワントンが、消失した左肘の付け根を押さえ怯んだその隙に、ペルポイさんの合図で連携攻撃^{チェイン}に入ったランス君とアグの前衛三人——そして、途中からウェンも加わり、流れる様な動作で次々と致命傷を与えて行く。

「んー。見事な連携だな」

「まあね。それなりに長い時間を一緒に旅してるもの。……裏切られるなんて思ってもみなかったけれど」

揉み上げを一房摘んで毛先を弄ぶトリスが、ポニーテールを揺らして得意げに話す。しかし、小さくなる語尾と共に普段の勝ち気な表情も陰りを見せ、後半はほとんど呟きに近かった。

この様子だと暗殺者と繋がって居た元・仲間^{ケイト}も、そう短くない付き合いで信頼もしていたのだろう。

「ま、ランス君争奪戦のライバルが減ったと思って気楽にしていればいいんじゃないか？——ケイトだっけ？ 納得行かなきゃ取っ捕まえて殴ってでも問い詰めるんだな」

「な……ッ?!　べ、別に私はランスの事なんかっ。……でも、でも普段は頼りないけど、いざという時頼もしいと言うか。危なっかしくて放って置けないって言うか、そもそも私は――」

一人で頬を染めてあたふたと自己問答し、乙女モード全開なトリス嬢。なんだ、取っ付きにくいと思ったが、意外と面白い娘だったな。はいはい、ゴチソウサマー。

先程までの深刻な表情は何処へやら、このまま眺めて観察しとくのも面白いかも知れないが、どうやら彼方さんの決着がついたようだ。

「オオ、オオオオオッ……」

最後にランス君が繰り出した三段突き（ピアッシング・スピア）が見事に決まり、苦悶の表情で宙を掻いたワンタンは胸を押さえて地面に倒れ伏した。

「お疲れ様、怪我人は居ないよなー？」

「ええ。ウェンさんが魔物の注意を引き付けてくれるので、安心して攻撃に専念出来ますよ」

レノウアーチオ
自己回復促進を掛けながら彼等の元に歩み寄る俺に、額を汗を拭うペルポイさんが破顔して答える。

「……」

「……おや？」

そして、コクコクと顎を引きながら彼の腹を興味深げに叩くウェン——って何やってるのこの娘っ?! 確かにペルポイさんの腹の揺れっぷりは癖になるが……彼女はボタンを見ると、取り合えず押すタイプだな。

「うん、ボクらも概ね万全だよ。……こら、ウェン止めなさい」

「わわっ、ペルポイさんごめんなさい!」

「あはは、いいですよ。私のお腹で宜しければ、いくらでも」

苦笑するペルポイさんから、アグとランス君が慌ててウェンを引き剥がす。アグに襟首を掴まれて耳を垂らすウェンは猫のようだ。

「あ、れ? コーキさん、トリスちゃんは……?」

「ん? ああ、あそこ」

きょとんと首を傾げるランス君に、俺は親指を立てて後方で未だに一人問答中のトリス嬢を指す。

「あは、は……」

「やれやれ、またか……」

「おや、トリスさんは何かの精神汚染攻撃を?」

顔を引き攣らせてにへらと笑うランス君に、眉間を抑えて嘆息するアグ。心なしか頭頂部のアホ毛が垂れ下がっている気がする。

そして、彼女に襟首を掴まれたまま、そーっとペルポイさんの腹に手を伸ばすウェンと、トリス嬢を本気で心配する様子のペルポイさん。

……ダンジョン攻略が楽しくなりそうなパーティーでよかったよ。
——今頃ネルは良い感じにやって行けてるのだろうか。

「……不安だ」

自ら別行動を提案してみたものの、俺は脳裏に浮かぶガキンチョの顔を思い心底不安になったのだった。

そんなこんなで、ペルポイさん達が『後悔、懺悔、贖罪』三種類の苦悩する賢者をモチーフに作られた石像を奉った祠を搜索してくれたお陰で、各々の祠にワントンのドロップアイテム《黒曜鎧装犬の胆》を供え、“贖罪”の祠の松明に火を点した俺達のクエスト進行はあっという間に進んだ。

時刻は夕方、既に日はとつぷりと暮れ、残るは“聖木に命を捧げる”——を達成するのみとなる。

今のところ、無粋な監視者達は俺達から付かず離れずピッタリと一定の距離を保ち、仕掛けて来る様子も人員が交替する様子もないようだ。

……まあ、仕掛けるとするなら、ダンジョンの出現後か、戦利品を持った俺達が出て来た直後が妥当だろうけど。

特に何かされる訳でもないが、コソコソと尾行けられ続けるってのは歯痒いものがあるなあ。

これがゲームならば、PK狙いの相手を遠慮無く森ごと焼き払う所だけど、他に仲間も居るだろうし、彼方さんがまだ盗賊と決まった訳でもないし……ままならんね。

「なあ、ランス君。一つ確認したいんだが、こう言う依頼の時に盗賊紛いの連中に襲われた場合——君ならどう対処する？」

隣を歩くランス君に、この世界のルール確認を兼ねて遠回しに訊ねる。

「え？ あ……、そうですね……。出来るだけ戦いたくはないですけど、殺らなきゃ殺られるだけですからね」

彼は一瞬面食らった表情を見せたが、刹那の逡巡後、自身に言い聞かせるかの様にポツリと漏らす。——この答えから、正当防衛で相手を殺めてしまっても何ら問題無いらしい。

「相手を傷付けずに無効化出来るのが一番なんだろうけどね。……まったく、魔物だけでも手一杯だって言うのに、人同士で争うなんて不毛だよ」

前方を歩くアグが、二の腕まであるゴツイ手甲を嵌めた両手を拳げて、やれやれと肩をすくめる。

「その通りですな。北と東のいざこざには早く決着がついて欲しい
ものですよ。」

私の同業者の中には、戦争になれば稼げると言う輩も居ますが、不
謹慎極まりないですぞ」

同じく前方を歩くペルポイさんが拳を堅く握り締めて憤る。

「確かに殺さずに済むのが一番だけれど、ランスはいつも甘いのよ。
いちいち敵の事を考えてたら命がいくつあっても足りないわ」

背後を歩くトリス嬢が膨れっ面で俺とランス君の間に割って入る。

「ほお。でも、お前さんはランス君のそんな所が好きなんだろ？」

「コ、コーキさんっ」

「な……ッ！　なんで私がランスなんかを！　——いや、でも……」

ニヤニヤと俺が茶化すと、ランス君はあわあわと忙しく両手を
振って大慌て、トリス嬢は再びアッチの世界へと旅立って行ってし
まった。どうか良い旅路を。

「……ここら、コーキ。トリスで遊んで要らぬ仕事を増やさない
でくれないか？」

すっかり自分の世界にトリップ中のトリス嬢を、ウェンと一緒に
引きずるアグが嘆息してぼやく。

「ああ。ごめん、悪かった。後で肩揉みでもして労うよ——なんな
ら他の所でもいいが」

「ほう。例えば何処を揉むと言っんだい？」

アグが笑顔で首を傾げ、同時に肩口に纏めた桃色の髪が揺れる。
ぬう、年下とは思えん切り替えしだな。

「そうだな……ランス君、キミなら何処が良い？　ちなみに俺は足フェチだ」

「ぼ、僕に振らないで下さいっ！　そして、なんですかその唐突な暴露はっ？！」

おお、ランス君に突っ込まれるとはな……。やれば出来る子じゃないか。嗜好を晒した甲斐があると言っものだ。

「コーキさん、……貴方とはこの依頼が終わったら一杯やりたいですな」

ニヤリと口角を持ち上げてサムズアップするペルポイさんに、俺も親指を立てて返す。なるほど、貴殿もかつ！

呆れるアグを尻目に、もはや同好の士として野暮な言葉など必要としない俺とペルポイさんは、無言でガツチリと腕を組み合わせたのだった。

いやー、それにしてもこの世界の人でも人を斬る事に関しては抵抗があるみたいで、ホッとした。主に俺の精神的に。

しかし、この辺の常識を今更知るつても、あれだよなあ。一般常識を素直に訊ねるのも不審に思われるだけだろうし、ネルに聞くにしてもアイツは何処で口を滑らすかわかんねーし……。

それはともかく
閑話休題、今はそんな事よりも目先の問題か。

俺はこちらに飛び掛かる小鬼を程よい位置に誘導しつつ、小陰に潜む尾行者スレスレにアースニードルを発射した。

……意外と根性のある尾行者だコト。簡単に尻尾を掴ましちゃうれない、か。

「コーキさん、どうかしましたか？ 向こうの林に何か――ふあ？」

怪訝な表情を浮かべ、上目遣いで俺を覗き込むランス君の顔を、手の平で押し返して鼻を摘む。

「ああ、なんでもないよ。悪戯が上手い具合に成功しなくてなー」

「……悪戯、ですか？」

「そぞ。――お、聖木のお出ましだ。隠された秘境……燃えるねえ！ ランス君もそう思うだろう？」

俺が視線を向けていた先を見るランス君の肩を掴んで、回れ右と方向転換させた。

「――つわぁ……キレイですね」

茜色の夕日を浴びる黒紫の朽木は、結晶化した樹皮に反射する陽光を蝋燭の炎の様に揺らめかせて幻想的に輝き、その佇まいは枯れてもなお荘厳な雰囲気醸し出している。

その儚げな美しさに、俺を含めたパーティーの一同それぞれが感

嘆の声を漏らす。——キャプチャー（画像保存）機能が使えりやいいのになー。

ギルドに報告する時は、この辺を綺麗に整備してベンチでも置けば、それなりのデートスポットになって集客率アップも狙えるんじゃないだろうか。……ちと街から遠いのが難点だが。

等と無粋な思案に耽りつつも——世界をブラブラと巡り歩いて、
アスガルス異世界絶景百選を作るのも悪くないな、と思える風景を暫くの間堪能したのだった。

18・俺達フェティシスト（後書き）

色々書き方を試行錯誤中です。誤字、脱字等があればご報告頂けると幸いですm(_____)m

19・Let's Exercise!

僕たちの受注した依頼もいよいよ大詰めに差し掛かり、秘境を出現させる仕掛けも残すは後一つだけとなった。

まさか最初の仕掛け（雷動石）が埋まってるなんて思いもよらなかったけど、コーキさんはそれを何処で調べたんだろう？

会話してても、僕の知らない様な事を知っているのに変な所で感心したり、地理に詳しいのに情勢には疎かったり――変わった人だなあと思う。

そのコーキさんは今、皆から離れた所にあぐらを掻いて座り込み、原っぱに転がる岩に背中を預けて瞑目していた。また何か考え事でもしてるのかな？

僕の横では両膝を抱えて座るウェンちゃんがボンヤリと林の方を眺め、鍛冶の心得のあるアグちゃんが皆の武器の手入れを行っている。

「……で、これからどうするの？」

僕が昼に集めた薪の枝打ちをしていると、トリスちゃんが口伝のメモ書き片手に眉根を寄せて両手を挙げた。所謂降参のポーズだ。

「命……、命を捧げる。ううむ」

難しい顔付きで顎に手を当てて、聖木の周りを右往左往するペルポイさん。――うう、僕も何か力になればいいんだけど……ごめんなさい。

“命を捧げる”、か。漠然として今ひとつピンと来ないや。もしかして生贄が必要とかない……よね？

「……そう、そうよ！ 何か供物を捧げるんだわ。ランスもそう思うでしょ？」

腰に手を当てたトリスちゃんが僕を指差し、鳶色の双眸を輝かせて声を張り上げる。

「ううむ。供物、生贄……ですか。

しかし、どうもこの部分だけ他と比べると、情報があやふやでいまいち合点がいかないと言うか――」

大きな身体を縮こませて首を傾げるペルポイさん。

そこにウエンちゃんの双剣を研ぐアグちゃんが、悪戯な笑みを浮かべて連ねる。

「そうだな。なんならランスを生贄にでも捧げてみるかい？」

「ええっ?! 僕をですか？」

そんな僕を尻目に、それは最終手段ね。と腕を組んで思案に耽るトリスちゃん。――そ、それはやだな。

「……口伝なんてものは、総じていい加減なものさ。皆、小難しく考え過ぎなんだよ」

瞑目したままのコーキさんが口を開く。その自信に満ち溢れた物言いに、皆の視線が集中する。

「貴方……何か知ってるのね？」

すかさず、キツと鋭く目元に力を入れたトリスちゃんが問い掛けた。

トリスちゃんの言葉に、目を見開いたコーキさんが人差し指を上突き出し、不敵に笑みながら続ける。

「命、そう命だ。一概に命と言ってもあやふやで不確かなモノだ。それは、俺達生物の根源――即ち生命であるかも知れないし、もしかすれば重要な言い付け――命であるかも知れない……」

「むっ、むう！　す、すると一体?!」

静かに、そしてゆっくりと言ひ聞かせる様に口ずさむコーキさんに、目を剥いたペルポイさんが両手を握り締めて続きを促す。

コーキさんは小さく頷き、軽く咳払いをして説明を続けた。

「これは俺が独自に調べた情報だが、この近隣の村では古来より神々に豊作を願ひ、踊り手が自らの命を削って三日三晩も踊り明かす

伝統の舞があるそう——その名も、ムズ・リアコ」

「むず・りあこ、ですか？ ……はて、私は初耳ですな」

聞き慣れない言葉に訝しげに腕を組むペルポイさん。もちろんそんな舞の話は聞いた事がない僕達も、各々に疑問符を浮かべて首を傾げた。

でも、なんでだろう。コーキさんの至極真剣な面持ちを見ると、納得せざるを得ない異様な迫力があると言つか……。

「ふむ。つまり、狼王の首級しるしを掲げたまま、その舞を踊れと？ それも三日三晩もの間」

「三日間も踊り続けるって……どんな苦行よ」

お互いに顔を見合わせて渋い顔をするアグちゃんとトリスちゃん。

「っん、僕もそれは無茶だと思う。」

「あー、その辺は大丈夫。最初の触りだけで問題ない。……………いし。

——あつ、なんか腰もくびれるっばいよ。女性陣は一石二鳥だな！」

何かをボソリと呟いたコーキさんが、思い出したかの様に付け足した。うーん……。気のせいかな？ “面倒臭い” って聞こえた様な……。

「ほう。それは興味深い……コーキさん、知っているのであれば御教授願えますかな？」

その言葉に最も反応を示したペルポイさんを見てコーキさんは一

瞬苦笑したが、すぐに表情を取り直すとパチンと指を鳴らした。

「もちろんですともつ。早速始めますか」

——そして、現在。僕達はコーキさん指導の下、薄暗い森林の真つ只中で照明魔法ライティングの明かりを頼りに、ムズ・リアコを踊っている訳なのだけれど……。これ、普段使わない様な筋肉を使って結構きついかも。

「はい、ここで両手を腰にーっ。はいっ！ ツイスト、ツイスト」

両手を腰を当てて、足踏みをする様な独特のステップから腰を捻るコーキさん。その背後の聖木には、狼王の首級のカードが貼付けられている。

「こ、心なしか。腰が細くなってきた気がしますぞ……」

僕の右隣りで、息も絶え絶えな様子なペルポイさんがお尻を振りながら言う。

「気の毒だが、それは……」

「気のせい、よ」

どこと無くうんざりした顔でコーキさんに続くアグちゃんとトリ

スちゃんが、重ねて言い放つ。その言葉にショックを受けたのか、ペルポイさんがお尻の速度を上げる。――凄い、凄い気迫ですつ、ペルポイさん！

「それよりも……なんなの、これ？ 本当にこんな事で秘境が出現するのかしら？」

「それにはボクも同意する。後でコーキを問い詰める必要があるな」

「二人とも、きつとこの踊りにも何かの意味が……」

『なんだって（ですって）？』

「ふえっ」

今ひとつ乗り気でない二人に僕がフォローを入れるも、物凄い形相で軽く一蹴されてしまった。……コーキさん、この二人を敵に回すと後が怖いですよ。

「……」

ウェンちゃんと言うと、いち早く振り付けを覚えていつの間にかコーキさんの横に移動し、僕達の前で完璧に踊っていた。――なんだろっ、この敗北感。

あれ？ コーキさんの右手から仄かに白い光りが漏れ出してるのに気が付いた。あれは治癒術の光り？

「……こんなもんか。よし、ここでターンだッ！」

コーキさんの合図で半ば自棄気味のトリスちゃんとアグちゃん、清々しい笑顔を浮かべるペルポイさん。

そして僕とウェンちゃんがその場で同時に一回転をした。

——その刹那、聖木から夜空に光りの柱が上り、辺り一帯が照明魔法の明かりを掻き消す程のまばゆい光りに包まれる。

「おおっ、なんと美しい……」

「うそ……。まさか本当にあの、ヘンテコな踊りが？」

目を細めて呆然と空を眺めるペルポイさんとトリスちゃん。手の平を傘にして首を目一杯動かし、天を仰ぐウェンちゃん。

僕自身もこの光景に言葉を失い、光りの柱を静かに眺めた。

「……ランス、見たかい？」

まさか“ヒーリング”とは。確かに口伝なんてものは大仰でいい加減だな」

僕と同じく治癒術の光りに気付いたアグちゃんが、聖木に肘を突いてもたれ掛かるコーキさんに視線を送りながら、声を潜めてそう言った。

うん。あの瞬間にコーキさんは聖木に手を当てて、木に治癒術で生命力を注ぎ込んだのだと思う。

「あつ、うん……。でも、なんでだろう？」

僕たち二人の視線に気付いたコーキさんは、苦笑しながら後頭部を掻く。

そして、立てた人差し指を口元に移動させて“黙ってる”と、こちらに伝えてきた。

「……確かにトリスには黙って居た方が良さそうだ。ま、彼の理由次第では、ボクからお仕置きの必要になるかも知れないけどね」

そう言ってウィンクするアグちゃんと僕は小さく笑い合う。この依頼が終わっても、コーキさんが居てくれれば楽しそうなのになあ。

天高く伸びる光りの柱は次第に細く集束し、程なくすると空に粒子の残滓を残して掻き消えた。

やはり明るい真っ昼間ならともかく、この暗い中で魔法の光りは目立つみたいだ。俺の口止めに応じてくれたランス君とアグを見て、ホッと胸を撫で下ろす。

取り合えずはトリス嬢に気付かなかったから良しとしよう。あの娘、絶対騒ぎそうなんだもの。

光りが消えて間もなくすれば、地響きにも似た低音が辺りに鳴り響き、木々で羽を休めていた鳥系の魔物が驚いて一斉に飛び立つ。

次いで鈍い破砕音と共に、十字の袂たもと——つまり、俺達の前方の崖に亀裂が走る。

赤茶けた崖の裾から凡そ三メートル程上まで亀裂が入ると、ひび割れた壁面が砂山の様に崩れ去り、その奥からポツカリと口を開けた空洞が現れた。

何処かに空気の抜ける穴が空いているのだろう。空洞からは、生き物の低い呼吸音の様な不気味な風音が反響して漏れ出している。

この気味の悪い音が、竜の咆哮に聞こえなくもない。これが、“黒盲目竜の顎門”あぎと”って言われる所以か。

「……なんと言う……。本当に存在したんだ……」

長年の夢だった秘境の出現に、むせび泣いて涙を拭うペルポイさん。こ、こんなに喜んでくれるなんて……俺も胸が熱くなるっってもんですよ。

彼には暫く余韻に浸って貰うとして、……ランス君達もそれぞれ話し合ってるみたいだな。

さて、今回はクエストダンジョンの中でも低位に属する場所って事と、ゲームとの差違を確認って事で解放した訳だけれど、今後は無闇に隠された上級ダンジョンは解放しない方が良さそうだなー。

なにせ、MMOゲーム基準な上級者向けのダンジョンを解放した所で、それは自殺者を量産する様なもんだ。

この世界で所謂“英雄”と呼ばれる人物の中には、プレイヤー級の実力者も居るかも知れない。

だが、高レベルプレイヤーが死亡状態からの復活を前提にして、束になってやっ倒せる魔物が出る。……なんて場所が近所に出現するとなると、無駄な混乱を招くだけだろう。俺なら引越しを考える。

俺自身もそういう化け物が徘徊する場所には、なるだけ近付かない様にしないとな。基本的に俺の能力だと有利な相手には強いが、苦手な相手にはとことん弱いのだ。

むざむざ殺されに行くような真似はしないと思うが、この森の狼王よろしく、ダンジョン外のフィールドをうるつくタイプの中にも危険なのが――。

いや、まてよ。ここでは各街への“魔物の襲撃イベント”ってどうなってるんだ？

そもそも、この世界の住人がプレイヤーよりも弱いと判断するのは尚早ではないか？――等と、俺がしなくても良い不吉な推論をあれでもない、こーでもないと考えていると、ランス君がこちらに近付いて来た。

……頭の出来が悪い俺が、無い頭を捻っても仕方ない、か。まずは先に目先の問題を片付けてからだ。

俺はランス君を手招きして頭上を仰ぎ、先刻のヒーリングで聖木の枝に実った楕円形の赤い果実を指差す。

「丁度いいや、ランス君。この実を回収するのを手伝ってくれないか？」

「やっぱりこの実も秘境に関わるんですか？」

キョトンと首を傾げるランス君に、多少気圧されつつも頷く。暗がりで見えるからか、ぱっと見は美少女なんだが……嗚呼、遣る瀬無い。

「この実は言わば“鍵”なんだ。全部で六つ生ってるだろ？俺達が六人で果実も六つ。何にせよ、いかにも曰くあり気だろう？」

「……他の事もそうですけど、コーキさんは物知りですね」

感心した風にランス君が言う。

「実際はわからない事ばかりだよ。女心がわかれば最高なんだけだな」

「あは、それは難しいですね」

どうやら天然ハーレム少年にも、わからないみたいだ。彼がコツを知っていたのなら、恥を忍んででも聞き出そうと思ったのだが。

くすくすと笑うランス君と一緒に、杖を使って六つの果実を回収した俺は 絶対にウエンに食べさせるな とだけ念を押し、五つの果実を皆に配って貰う事にしたのだった。

——そんなこんなで、落ち着きを取り戻したペルポイさん達と俺達は空洞に移動し、その中で一夜を明かす事にした。

一口に空洞と言ってもここ自体がダンジョンになっている訳ではなく、実体はあくまでも“入口”。

つるりとした青い岩で出来たこの空洞は、全長が凡そ五十メートル程で、横幅は四メートル程と言った所か。

最奥の広まった袋小路には、幾何学模様の描かれた魔法陣が敷かれている。その中央には祭壇が置かれ、その上に聖木の果実を供える事でダンジョンへの扉が開かれると言う寸法だ。

中は薄暗く、春先くらいの温暖な気候の外よりも少々冷えるが、魔物が出現しない事もあって比較的に安全と言える。——唯一の問題点は、入口を塞がれてしまえば逃げ道がない事か……。

そんな訳で必然的に女性陣が空洞の奥側、俺とペルポイさんとランス君が入口から二十メートル程の場所で寝床を作る事と相成った。

何はともあれ、これで一応は依頼内容である『秘境の発見』を達成した事になるので、ペルポイさんから、最低報酬の5,000ルーク以上の稼ぎは見込めるだろう。

秘境を発見した事をネルが知ったらどんな反応をするか楽しみだなー。

その為にも、まずはハイエナさん達と夜中のダンスレッスンと洒落込もうじゃないかか。

俺が高レベル潜伏効果のついた外套——『インヴィジブル・クロ
ース』を羽織り立ち上がると、ランス君が眉をふにやりと垂れ下げ
て訊ねてくる。

「あの、……コーキさん何処へ？」

「ん、ちよっくら外で腰を振って来る」

そのまま俺はアグに研いで貰ったオクスタンロットを軽く振るっ
て肩へ担ぎ、入口へと歩を進めたのだった。

19・Let's Exercise! (後書き)

ようやく次回で大激突?!

いつもご愛読ありがとうございますm(・|・)m
活動報告の方にも書きましたが、盆休みまで少々更新速度が落ちる
と思われます。ごめんなさい…。

20・翡翠な彼女は強い男が好き（前書き）

お待たせしました。

どうしても一話にまとめたかったので文量がおかしげな事になって
ますが、ご容赦下さいm（――）m

20・翡翠な彼女は強い男が好き

《インヴィジブル・クロース》で姿を隠して森を散策する事、幾数分。

付近で不自然に人の集まる場所を見付けた俺は、慎重に接近を試みた。こう言う時に、フォーカス機能は便利だなーと思う。格下相手ならレベルも表示される事だしなつと。

しかし、自分で扇動しといてなんだが……。

「いいか、てめえら！ 眼シ玉ひん剥いて、よオク見てろよ？ この舞をしっかりと頭に叩き込むんだ。——ツイスト、ツイスト！」

『あいさーっ！！ ツイスト、ツイスト！』

燃えたぎる情熱っ！ ほとばしる汗っ。唸る肉体美？ 艶めかしく揺れる腰……。

——なんだこれは。

上半身裸で獣耳の生えた男が先頭で叱咤激励を飛ばし、ずらりと等間隔に並んだ男達が掛け声を上げながら一糸乱れぬ動きを魅せる。

それはまるで、何処かのダンスパフォーマンス集団と呼んでも過言ではなかった。

——しかし、十数人のむさ苦しい一団が、一様に腰を振る姿は……
…なんと言うか、こう……筆舌に尽くし難いモノがある。

あわよくば、こんな光景が見ればいいな。くらいの軽い気持ちであんな事をしたのを、思わず反省してしまう程の戦慄を覚えた。
——今から“これ”と戦うのか……。

ひい、ふう、みい——ざっと二十人位か。今、空洞を見張ってる二人を入れても、二十人弱……。

バインド
拘束術の効果は単体限定、リゲル・ワーム触手で縛ろうにも、まだ未完成で同時に操れる本数が限られて来るから確実性は無し、と。

勝つだけなら、わざわざ近寄らなくても魔法の射程範囲ギリギリから撃ちまくるだけで事足りる。

だが、彼等がただ森林で踊る事を旨とする、健康志向の高いオッサン集団——と言う可能性も捨て切れない……。いや、ないか。

取り合えず、彼等の見た目の印象から善人とは言い難いな。種族もバラバラで装備も特にこれと言って統一性はなく、布製の身軽な軽装で、武器も小回りの効く短剣や長剣がメイン。見たまんま盗賊って判断でいいのかねー？

弓等の飛び道具持ちは少なそうだけど、投擲武器や魔法を使える人間が居る事も念頭に入れて置かなきゃな。

先頭で踊ってる眉毛ぼさばさで髭もじやの毛玉の様な“ライカン（人狼族）”が頭目だろうか。

見た所、レベルも218とこの中ではダントツだ。他の連中は150以下が大半で、100以下の者が多く見て取れた。

——と言う事は、今空洞を見張ってる二人のが頭領に次いで強いって事になるな。確か、そっちの二人は200に近かったはずだ。

……手強そうなのがこの場に居ないのは少々面倒だが、あまり悠長に考えてる時間はない。当初の手筈通り行くとしますか。

しかし、意気勇んで一歩踏み出そうとした俺は自分の足が微かに震えている事に気が付いた。

対人戦なんてのは慣れたもんだけど、やっぱり命のやり取りとなると別だよなあ。

……なあんて思ってたのは良いものの、実際戦闘に入ったら相手が殺す気で来るかも知れないのに、そんな事考えてる暇なんてないわな。変に意識して失敗するのも馬鹿らしいや。

どんな結果になるにせよ、“郷に入っては郷に従え”——俺なりに出来るだけ頑張ってみますかね！。

武者震いする身体を落ち着かせるべく、俺は大きく深呼吸し……覚悟を決めた。

——かさり。

俺が腰に挿した投擲様の短剣に手を伸ばしたその刹那、不意に頭上の梢が乾いた音を立てて揺れ動いた事に気が付いた。

パッシヴスキル（常時展開型技能）、《戦人の慧眼（攻撃軌道予測）》の効果で首筋にチリチリと熱を感じた俺は、咄嗟に前方に飛び込んで回避行動を取る。

「うへ、バレバレかよっ！」

そのまま麻痺毒を塗布した短剣二本を振り向き様に背後の襲撃者に投擲するが、投擲スキルの拙い俺のそれは相手の丸盾に容易に弾かれてしまった。

“茶色”の塗料で紋様が刻まれた丸盾——きっちり土対策してやがんなあ。

「隠れる、無駄。姿隠しても、ジ・ジル達亜人、鼻強い」

俺の上から木の葉と共に降ってきたそいつの姿で、まず目に付くのは全身を覆う翡翠色の鱗だ。

ギョロリとした楕円形の黄色い瞳は、爬虫類特有の縦瞳孔。前に大きく突き出した口元からは二股になった細い舌がチロチロと揺れている。

茶皮のベルトを腕や腰に巻き付けた上半身には、胸の上部だけを覆う胸鎧を纏い、手には小振りな……いや、人間が扱うには少々大きな手斧。——それは見紛う事なく、洞穴を見張って居た二人の片割れのレピタリア（有鱗族）の姿だった。

「はは……忠告どーも。ついでに見逃しては……くれねーよなあ」

トカゲ人間から距離を取り、中腰で杖を後ろに回して構えた俺の背後から豪快な笑い声が上がる。

「ダハハハハツ。よオ、英雄志望！」

俺が首だけを動かして後ろを一瞥すると、頭目らしきライカンのオッサンがあぐらを掻いて地面にどっしりと座り込み、寧猛な笑みを浮かべていた。

その周りでは、各々に獲物を抜いてこちらに野次を飛ばす取り巻き達がたむろしている。

やはり、ただの踊り好きのひょうきんなオッサン達ではなかったみたいだ。

踊りを見られた事に対する照れ隠しにしては、些か対応が過剰過ぎじゃないかと思う。

「まさか自分から飛び込んで来るたア。蛮勇の戦士か、はたまた命知らずの大うつけか……アンタはどっちだろうな？」

「——さあ？　しいて言うなら、通りすがりの舞の伝道師だ。見たとこアンタは筋が良い、俺の弟子にならないか？」

俺が肩をすくめて答えると、頭目は片眉を持ち上げて口角を歪める。

「そりゃいいや。——ジ・ジル、伝道師殿にご教授願おうぜ。遠慮はいらねえ、ガツンとやっちまえ！」

頭目が自らの掌に拳を叩き付けて指示すると、トカゲ人間は小さく頷いて武器を構え、尻尾を揺らしてこちらに歩み寄ってくる。

前門のトカゲ。後門の毛玉……さあて、どうしますかねー。取り合えず――。

下弦の月を覆い隠した雲が流れ、柔らかな月明かりが下界を照らす。

微かな風が木々の枝と草の葉をざわめかせる中、数十人の盗賊に囲まれながらも斜に構えた雰囲気崩さぬままおどける一人の青年コーキ。

ふう、と静かに息を整えた彼は、肩に担いだ槍杖をゆったりと構えて身構え――左手を前方に突き出した。

「まずはお手並み拝見……いきなりアースニードル！」

コーキの周囲に魔法の発動までの“溜め”を感じさせぬ程瞬時に形成された滑らかな土の矢、その本数は凡そ十本。

それらは術者の意思に添ってゆらりと宙で旋回すると、対峙する

レピタリアに次々と射出された。

「……無駄、対策済み。森の中、雷も効果薄い」

コーキが小手調べで放った土の矢は、姿勢を低くして疾駆するレピタリアが持つ“土属性無効”の細工が施された丸盾でなんなく打ち消される。

「へっ、そんなに甘くないってか」

丸盾を前方に構えながら速度を増して迫ってくるレピタリアに彼は《ウエアリイ・スワンプ（泥濘）》を設置するが、それにも即座に反応する敵にはなんの効果も成さなかった。

「無駄無駄あ！ お前の手の内は全部お見通しなんだよ」

見ているこちらが暑苦しくなってくる様な顎髭を撫でて破顔する頭目らしき男。

そんな頭目の男を、レピタリアの盾による殴打の嵐を躲しながら一瞥したコーキが一言。

「……だよなー。俺が何度も鳶を操って足引つ掛けても、アンタ踏ん張って耐えてたもんな。

頭目自らが敵前観察なんて、よっぽど人手不足なんだろう」

「そうそう、口惜しいがその通り……って、コラアツ！ あれは全部てめえの仕業だったのかー！」

おっと。と口元を抑えるコーキに、怒りを顕わにした頭目が目を

剥いて立ち上がる。

「ジ・ジル！　いつまで遊んでんだッ。早くガツンと――」

「違う！　ジ・ジルずっと本気。……こいつ、ただの術士違う」

自慢の手斧の連撃を涼しい顔であしらうコーキに、勢い良く攻めていたレピタリアが距離を取ってたじろぐ。

「なんだ、もう終わりがー？」

攻めあぐねるレピタリアにコーキは軽く上下に飛び跳ねながら脇を絞め、宙に拳打を空撃ちする。

明らかに体格差のあるレピタリアの戦士と杖一本で互角に渡り合う人間に、周囲で野次を飛ばして観戦を決め込んでいた盗賊達も次第に押し黙り始めた。

「か、頭ア。俺、なんか嫌な予感がするっす。

ジ・ジルと格闘するなんざ、並の術士じゃありませんぜ？　このヤマ諦めませんか……？」

「馬鹿野郎っ。何言ってやがんだ！　たかが一人に逃げたとなっちや良い笑いモンだろうーがっ」

頭目が近くに控えていた頬に傷のある男の提案を怒鳴りつけて一蹴する。

頭を小突かれた頬に傷のある男は、涙目で殴られた箇所を摩りながら畏まった。

「へ、へい。すいやせん」

「……だが、それも一理ある。俺ア、やばそうな相手とは戦わねえ主義だ。——逃げちゃおっか」

『へ？』

舌を出してテヘツと首を傾げる頭目に盗賊達の視線が集中する。

頬に傷のある男は信じられないと言った表情で小突かれた頭を指差し、同僚に慰められていた。

レピタリアと戦っていたコーキも、口をへの時に開いたまま呆気に取られているようだ。

「え、逃げちゃうの？ もっところ……、一斉に掛かれー。とかないの？」

未だに呆れ顔の表情のままのコーキが頬を掻きながら頭目に訊ねる。

その質問に頭目は腕を組み、眉を顰めて答えた。

「馬鹿野郎。相手の力量も測れずに盗賊なんて陰気な商売やってられつかよ。“楽に勝てる相手から確実に奪う”——命あつての物種だろうが！」

「は、はあ。そりゃ、ごもつともで……」

胸を張って堂々と答える頭目に、後頭部を押さえて申し訳なさそうに目線を落とすコーキ。

盗賊に正論言われちゃったよ。と、漏らしながら爪先で土を弄り随分と落ち込んでいるようだ。

心なしか氣勢を削がれた様子のコーキが、周りを警戒しつつどうしたものかと頭を掻いて思案に耽っていると、脇の藪から思わぬ闖入者が現れた。

「——モップ。お客人をお連れしましたよ。……おや？ お取り込み中でしたか」

「おまつ、ウルパソ！ いつも頭領って呼べってガツンと言ってるだろうがっ」

どうやら頭目のライカンの名はモップと言うらしい。藪を掻き分けて現れたのは丸い色付きグラスを鼻に掛け、若草色の大きめな口ーブの裾を引きずって歩く子供の姿だった。

「……見張りの片割れか。こんなちっこい盗賊も居るのかよ」

年の頃が二桁にも満たないであろう闖入者の愛らしい風貌にコーキが肩をすくめる。

「おや……気付いていましたか、さすがですね。しかし、ちっこいとはご挨拶ですね。こう見えても四十が近いんですよ。」

まったく損な種族ですね、我々ニール（小人族）と言う種族は——」

一見すると小さな子供の様な姿だが、くすんだ銀髪を後ろでまとめたその男はニールと呼ばれる種族の成人らしい。

ニコニコと胡散臭い笑みを浮かべたウルパソと言う男は、落ち着いた物腰で油断ならない雰囲気纏っていた。

「んな事はどうでもいい！ ウルパソ、退くぞ。こいつは思ってた

以上の格上だ。勝てねえ喧嘩すんのは俺様の主義じゃねえ」

かぶりを振って部下に撤退の指示を下すモップを、ウルパソが色付きグラスの縁を持ち上げながら制止させる。

「ええ、私もそう思っ心強い協力者を連れて来ました——さ、出て来て下さい」

ウルパソが左手に握った紐を引くと、彼が出て来た藪が揺れて暗がりから、また一つの“影”が現れる。

その“影”の登場にコーキは左手で顔を覆って大きく嘆息を吐き出す。

「……おいおい、マジかよ……」

——そこには、たどたどしい口調でがつくりと項垂れる金髪の美^{ニス}少年の姿があった。

「う、ごめんなさい。その、コーキさんが心配で……出て来た所を捕まっちゃいました……」

両手を縛られ、盗賊から首筋に短剣を当て行われた仲間の姿を見てコーキは、舌を鳴らして齒噛みする。

「ダハハッ！ でかした、ウルパソ！ ……形勢逆転だな。どうするよ、命乞いでもしてみるか英雄さんよオ？！」

ウルパソの連れてきた“協力者”とコーキとを何度も見比べたモップは、笑いを堪え切れずに吹き出し、腹を抱えて面白おかしく破

顔する。

「……はいはい。降参ですよ、コーさん」

人質を見るや否や、解りやすく強気になるモップをじろりと一瞥したコーキは、杖槍を対面するレピタリアに投げ渡して両手を挙げた。

「——で、俺らはどうなるのよ。頭領？」

呪印の施された手枷をブラブラと揺らしてコーキが樹木にもたれ掛かる。

“魔力封じ”の呪いが掛けられた手枷が珍しいのか、隣でペコペコと頭を下げるランスの頬を時偶引っ張りつつも、彼は手首を捻って興味深げに観察していた。

「ああ？ 手下共が残りの女とデブオヤジを捕まえてくるまでじつとしてな。」

——ま、大人しくしてりゃ別に命まではとりやしねえよ。売れるところに売った方が金になるからな」

一行の内で一番警戒していた術士を捕らえた事で良い気になった頭目はレピタリアのジ・シルと祝杯をあげていた。

今この場には頭目であるモップと側近のジ・ジルとウルパソだけを残し、他の部下達は総勢で洞穴の四人を捕らえに赴いているのだ。

「だそうだ。ランス君、君はきつと高く売れるぞお」

それを聞いたコーキは振り返り、再びランスの両頬を掴んで引つ張り回し始める。

「ふおふえんひゃひゃい。……うう、頬が伸び切っちゃいますよ」

仲違いする二人の姿に呆れた様子のウルパソが頬杖について首を捻った。

「それにしても……その手枷を付けられていると言うのに、貴方随分と元気ですね？」

盗賊団の虎の子である、《真紅》バイロフ級の冒険者にも通用すると言う拘束手枷。

——装備対象者の魔力を封じ、虚脱状態にする効果のあるそれをつけられても平然としているコーキを、ウルパソは目を細めて訝しげに見遣る。

「ああ、怠いと思ったらこれの効果か。初めて見る道具に興味津々でさ。

ウルパソさんだっけ？ アンタみたいな“子供親父”な種族を見るのも初めてで、そっちのが重要って言うか——」

「こ、子供親父……。それは私の事ですか？」

悪気なくサラリとしたコーキの発言にモップとジ・ジルは酒を吹

き出して爆笑し、肩を落としたウルパソはローブをずりりと擦り下げた。

「ダハハッ、面白え奴だ。どうだい英雄、うちに入らねえか？ 優遇してやるぜ？」

頭目の思わぬ提案にコーキはきょとん目を見開いたが、すぐに俯き、肩を震わせて笑いを零し始める。

「あはは、それも面白そうだ……でも、今日で終わる盗賊団に興味はないよ」

「あア?! そりゃ一体どういう事だっ？」

不敵に笑うコーキに苛立ったモツプが盃を投げ捨てて立ち上がり、詰め寄ろうとするが……それを抑制するかの様に彼の足元に一本の矢が突き刺さる。

「——な……ッ?! 何者だ? ジ・ジル何処からわかるか?」

「無理。ジ・ジルも、解らない」

敵の攻撃に即座に反応したモツプが巨大な金棒を、ジ・ジルが手斧を、ウルパソがボウガンを手取るが、気配の感知に長けた彼らが敵の接近を許した事で、その様子は目に見えて慌てふためいていた。

「差し詰め、盗賊に囚われた王子+その従者を助けに来たヒロインって所だろ——なあ?」

コーキが虚空に問い掛けると、何もなかった空間がブレて歪み、漆黒の外套を羽織った三人組が現れる。

「真打ち登場よっ！ 覚悟なさい悪党共！ ……それと、アンタはランスの頬を引っ張りすぎ。ずっと見てたんだからね？」

茶色いボニーテールを揺らして現れたトリスに鋭く睨みつけられ、堪らずサツと目を逸らすコーキ。

「部下の皆さん方には、ギルド員の方が到着するまで洞穴の中で眠って貰ってますよ。

入口が一つしかないの、そこを塞いでしまえば分断するには持つてこいですな」

お手製の麻醉玉を片手にウィンクするペルポイ氏。彼の横ではウエンがその麻醉玉をお手玉にして遊んでいる。

そんな彼女達の姿をざっと見回したランスが目を瞬かせて首を捻った。

「あれ……、アグちゃんは？」

……おっと。すっかり忘れていたな。ボクもコーキから借りた外套のフードを脱いで姿を可視化し、ランスに手を振り答える。

しかし、よくもまあ、亜人の鼻もごまかせるなんて上等な代物を何着も持つてるもんだとつくづく思うよ。

収集が趣味だと言っていたが、本当に一体何者なんだろうか。

「やあ、ここだよ。——つまり、キミ達盗賊団を確実に生け捕りにする為に戦力を分断させて貰ったと言うわけだ。

最初にコーキが見付かったのも、ランスが捕まったのも全部手の内と言う事だな」

突然の出来事に口をパクパクと開いて呆然としたままの盗賊三人組に、手枷を嵌めたままのコーキが一步、一步近付いて行く。

その時、硝子の碎ける様な破碎音と共に手枷に亀裂が走り……手枷は真つ二つに弾け飛んでしまった。

「お？ この手枷、“故障”してみたいだな。……ラッキー」

「そ、そんな。あ、ありません……」

手首を摩りながら接近してくるコーキにウルパソは腰を抜かして後退る。

三人組の居た所までたどり着いたコーキは、傍に立て掛けてあった己の槍杖を担いで頭目のモップを指差し、口角を吊り上げた。

「——さてと、“形勢逆転”だな。どうするよ、命乞いでもしてみるか……頭領さんよお？」

一度やってみたかったんだ、コレ。とご満悦なコーキの悪乗りにも、ボク達も顔を見合わせ一笑し、付き合う事にした。

「男らしく“ガツン”と頼むよ、頭領」

「そうね。“ガツン”と生きの良いのを、よ・ろ・し・く」

「……………」

腕を組んで流し目を送るトリスト、手の平に拳を打ち付けるウエ

ン。

「ふーんだ。私はデブじゃないです。ちょっと人より少しふくよかなだけですっ」

「そうです。ちょっと、ふくよかなだけですよねっ、ねっ」

鼻を鳴らしてランスの縄を解くペルポイ氏とそれを苦笑いを浮かべて宥めるランス。

三人の盗賊達はすでにコーキの拘束術によって菱目形に縛られて身動きが取れなくなっていたが、すっかり意気消沈してしまった側近を尻目に頭目のモップはプルプルと唇を震わせて雄叫びをあげた。

「ち、……チツキショーッ!!」

「うるさいです、モップ。ちょっと術士殿、ついでに口も縛ってやって下さい」

「無念。だが、ジ・ジル強い雄、好きだ。コーキ、つがいは居るのか？」

バタバタと足を揺らして涙目ながらに懇願するウルパソと、コーキに何やら熱っぽい視線を送るジ・ジル。

「えー。俺、鱗ある娘と長い事やっていける自信ないわー。……脱皮とかすんの？」

コーキは渋い顔をして両手でバツテンを作りながらも、夜遅くまで三人組を質問攻めにしていたらしい。

——斯くして、この夜。モツプ率いる盗賊団は全員捕らえられ、翌朝到着したフレンチェスのギルド員に受け渡されたのだった。

20・翡翠な彼女は強い男が好き（後書き）

The・噛ませ犬な盗賊さん達でした。今後の彼らの脱走劇にご期待下さい（？）

追記

申し訳ありませんが、読者様に混乱を招きそうなので後半部の数年後のシーンをカットさせて頂きました。

カット部については、今後閑話として文量を追加して投稿したいと思います。

読者様に多大なご迷惑をかけてしまい、誠に申し訳ありませんでしたm（――）m

21・気になる疑問と足りない覚悟

パチパチと音を立てて爆ぜる薪をぼんやりと眺めながら欠伸を噛み殺し、俺は次の木を焚火へと投げ入れた。

昨晚、なんとか死傷者を出す事なく盗賊団を撃退して事なきを得た訳だが、念には念を入れて男衆三人が交代で仮眠を取りつつ、ギルド員の到着まで彼らを見張る事となったのだ。

正直面倒臭い話だけど、夜空に浮かぶ満天の星々の下、大自然の中で焚き火を囲んで……ってのは、——昔、父親に連れて行って貰ったキャンプみたいで悪くはないと思う。……たまに聞こえる狼王達の遠吠えの合唱が、ちとうるさいが。

——オオオオン……ッ。

……訂正、結構うるさい。寝ろよ、犬コロ。

そんな見張り中の暇潰しと言えば、モップ達三人組から話を聞くことだった。……正確には、一方的な質問攻めと言った方が正しい

かも知れないが、まあ些細な問題と言う事で。

今現在、その三人はグースカと寝息を立てて眠ってしまっているが、魔力を封じる拘束具や、俺の知らない種族“ニール（小人族）”——想定はしていたが、やはり目新しい情報が入ると心が躍るな！。

自分のまったく知らないスキルや魔物も居そうだと言うのに、不安よりも期待のが勝ってしまうのは、我ながら根っからのゲーマーだなあとつくづく思う。

例えるなら、ネットゲームでアップデートの前情報を手に入れ、実装を今か今かと待ち侘びる心境だろうか。

……だが、そんな俺に衝撃を与えたのはウルパソが漏らしたこの一言だった。

『貴方もその道具を持っているのですね』

それは俺が何気なく《デバイスライザー（携帯端末）》を開き、時刻を確認した時の事だ。

鳶色の瞳に僅かな畏怖を孕ませたウルパソが、それまで接ぐんでいた口を重く開いた。

最初は何の事かわからなかったが、この世界で冒険者に支給されると言う《デジタライド（携帯端末）》は、言わば電話の子機のような形で、色も白で統一されてるらしい。

そういえば、俺が最初に遭遇した現地人のジンバルトさんが持つ

ていた物も、子機のような形をしていたと記憶している。

それに比べて、俺——《AKO》のプレイヤーが持つ物は基本色こそプレイヤー個人でカスタマイズ出来るが、折り畳み式で液晶画面側の上部に歯車の様な装飾がついてるのが特徴だ。

ちなみに俺のは黒色。ピンク色とか冒険してみた事もあったけど、結局は現実で使用している端末の色に落ち着いた。

それはさておき、『貴方も』って事は他にも所持者が居ると言う事だ。ウルパソ自身もこれが何の道具かが気になったみたいで、俺が問い掛けると彼はつらつらと語りだした。

——聞くところによれば、ここ数日フレンチエスの日陰者達の間では、“ある人物”の話題で持ち切りだと言うのだ。

曰く、異常者。曰く、快樂殺人者。曰く、魔女。

ふらりとフランチエスにやって来て“希少な”魔物の素材や、市場で稀に見ぬ魔道具をギルドに売り付けたその華奢な女は、ならず者達の格好の獲物だったと言う。

偶然、売買の現場に居合わせた盗賊崩れの冒険者は仲間を集め、街を出た彼女が人気の少ない場所に行くのを見計らい襲撃を掛けた。

そして、三十人からなるそのならず者の一団はただ一人を除いて、全て例外なくその場で短刀で腹を刺し貫かれて死んだと言うのが、腹に短刀を残されたまま生き残った男の証言らしい。

しかし、その生き残った男も短刀の刃に塗られた遅効性の猛毒で

絶命したらしく、実質的にはその女にちょっかいを掛けて生き残った者は居ないとのコト。

そんな馬鹿な話があるかと一笑に付した他のグループを、俺の持デバイスライザーつ道具と同種の物を片手間に弄る女が殺すのを、噂の真相を確かめようと監視していたウルパソは目撃したと言ったのだった。

名前と年齢は共に不詳。狐の頭部を模った面で顔を隠した小柄な……亜麻色の髪の女。

必ず最後の一人の腹には短刀を残し、一方的な蹂躪を笑って愉しむ彼女に関わらない事にすると言ったのが、『危ない橋は渡らねえ。安全な橋を俺達が建てる！』をモットーとする彼らの盗賊団が出した結論らしい。いや、建ててどうするの。

——それにしても……何、その怖い女。亜麻色の頭髮と腹を刺すっただけで、脳内の危険センサーが全力で警笛鳴らしてるよ。

これだけではとても判断出来ないが、……他にもプレイヤーが？……もし、俺の知ってるプレイヤーとかだったらどうしよう。

凶器は多分メデキア・ククリかな？ 狩場に因っては魔物がポロポロ落とすから、俺のインベントリ内にも大量の在庫が残ってるや。

たまたま似たような道具を持っていた現地人の危ないお姉さんでした——な可能性も捨て切れないが、フランチェスに戻ったら、ギルドでガアヴのおっさんに聞いて見るとしようか。

あの人は夕方頃からあそこで酒飲んでるし、その女の事が少しは分かるかも知れない。

「――……キさん、コーキさん？」

「え、……ああ。どうしたランス君」

息の掛かるほどの眼前に迫った端整な顔を呆然と眺めると、彼はキョトンと首を傾げた。

「あれ？ ……えっと、そろそろ交代の時間なので、コーキさんも休んで下さい」

その時、彼が「近いつて言われないや……」と然も不服そうに呟いたのを俺は聞き逃さなかった。何を期待しとるんだ、何を。

「ご苦労さん。――飲むか？」

俺がウェストポーチから保温瓶取り出し、珈琲をカップに注いで差し出すと、ランス君はそれを受け取り頬を綻ばせた。

「……で、結局あの三人の中だと、どの娘が良いの？」

「な、なんですか。いきなり」

俺の唐突かつ、ざっくりとした質問に顔を赤らめて狼狽えるランス君に、単純な興味が三割と、暇潰しが一割と答える。

「じゃ、じゃあ……残りの六割はなんですか？」

「悪ふざけと、妬み、僻み。……そしてやっぱり妬み」

「ほとんどが悪意じゃないですか！ 茶化さないで下さいよ、もお」

こんな感じで、どうにも“短刀の女”の事が気になり、すぐに寝付けそうになかった俺は、ランス君と他愛もない会話をして過ごしたのだった。

夜が明け、朝靄も晴れやらぬうちに《グリーズ・ランナー》と呼ばれる、カンガルを少し大きくした程度の小型な騎竜に乗り、ギルドから派遣された冒険者の一団が到着した。

驚く事に、その中には俺の知っている顔も見取れるではないか。

「……ぬ？ おおつ。フジミ殿、フジミ殿ではないか、あの節は世話になったな！」

鎖帷子の上に白銀の鎧を着込んだ二メートル超の壮年男性がこちらに気付き、からりと破顔して声を掛けて来る。

背には円錐形の突撃騎乗槍を背負い、何より特徴的なのは下半身の四本の馬脚だ。

——やはり『馬並』なのだろうか。……と下種な勘繰りをしてしまうが、俺は確認する勇氣も度胸も持ち合わせて居なかった。

「奇遇ですね。お元気そうで何よりです——」

短く刈り込んだ白髪に、目尻に皺の刻み込まれた灰色の鋭い双眸を持つ頬のこけた偉丈夫——ケンタウルス人馬族のジンバルト。それが彼の名だ。

……そっぴや、俺の名前が“フジミ”だと勘違いされたままだったっけ。

切り立つ崖に開かれた《盲目竜の顎門》への入口をしげしげと眺めるジンバルトさんに、名前の誤解を解きつつ聞いてみれば、どうやら彼はたまたま派遣隊を編成する際に、現場に居合わせた信頼の於ける冒険者だと言う事でこの依頼を頼み込まれたらしい。

『大方、即座に段取り出来る騎竜の頭数が足りなかったのだろうな——で、人馬族のワシが通り掛かった……』と『そう言つて両手を腰にあてて豪快に笑う彼は、相変わらず四十を過ぎた見た目の老練な印象と違つてフランクそのものだった。』

ジンバルトさんも秘境の事が気になるらしく、後日編成されるであろう探査隊に立候補すると意気込んでいるみたいだ。

「しかし、御手柄だったな。

あやつらはとにかく感が鋭く、撤退も早くてギルドもほとほと手を焼いていたそうだ」

捕らえた盗賊達、そして秘境について話すペルポイさんとギルド職員の女性とのやり取りを横目に、腕を組んだジンバルトさんはうんうんと首を上下に振り動かす。

確かに、引き際の判断が目茶苦茶早かったな。ここではそういう

物なのかと思つたが、彼らは別段に諦めが早く、立ち直りも早い前向きな盗賊団だったらしい。

そんなこんなで談笑を交えつつ、秘境発見のあらましを俺が掻い摘まんでジンバルトさんに話していると、騎竜に跨がった冒険者の一人が彼を呼びにやってきた。

「ジンバルトさん、そろそろ――」

「ぬ、うむ。……さて、引き渡しも終えたようだし、盗賊達を護送せねばな。

お主らの探索に、天空神エル・ファルスのご加護があらん事を――
フアージ。

コーキ殿、また縁があれば再会しようぞ」

彼は十字を切る様な形式の祈りを捧げると人好きのする笑顔を浮かべて踵を返し、他の冒険者達と盗賊を引き連れて行ってしまった。

……ん？　そういや、ランス君とトリス嬢の姿が見えないな。こんな朝っぱらから逢い引きでもあるまいに。

「なあ、アグ。あの二人は？」

起き抜けで、サイドにまとめていた桃色の髪を下ろした状態のアグに訊ねると、彼女は大きく伸びをしてシャツの隙間から白い肌と臍を覗かせる。

「うん？　ああ。何やら慌てて朝食の魚を捕って来るとかで小川の方に向かって行ったが……」

きつと、うつかり足を滑らせて川に落ちた揚句、揉め事と一緒に濡れて帰って来るんじゃないか？ 多分。——と、付け足してアグは頭部のアホ毛を摘んで位置を正し、口に白いリボンをくわえて髪を結わえ始めた。

なんか、またえらく具体的な内容だな……。

ま、とにかくにも、盗賊はこれで一件落着。後はダンジョン攻略を怪我なく終わらせて依頼達成。見事クエストクリアって所だな。盲目竜の顎門は全三階層。依頼の拘束期間は三日の予定だったが、今日中にも攻略は終わるだろうと思う。

野営も新鮮だけど、ひ弱な現代っ子としては柔らかいベッドが恋しいし、気張って行くとしますかねー。

——それから程なくして、びしょ濡れとランス君とトリス嬢が、必死の形相で狼王と一緒に帰還なさったので俺達は朝から豪勢な食事を取ることが出来たのだった。

朝からステーキもどうかと思ったが、これがあっさりとしていて中々に美味い。

少しばかり肉を分けて貰ってネルの土産にでもするとしよう。

ぼんやりと発光する魔法陣の敷かれた袋小路。外と比べるひんやりとした洞穴内の最奥に鎮座する祭壇の前に俺達は集った。

赤銅色の無駄な装飾品がない質素な祭壇上には観音開きの匣はこが備えてあり、それを開くと“いかにも”な窪みが縦二列、横三列の、計六つ現れる。

「——さあ、皆さん準備はよろしいですか？」

ペルポイさんが青い瞳をキラキラと輝かせながら、昨晚聖木に実った楕円形の赤い果実を懷から取り出した。

秘境に特別な思い入れのある彼にとって、この冒険に対する意気込みも一人ひとなのだろう。

彼の問い掛けに俺達は一様に頷き、果実を取り出す。

ペルポイさん、トリス嬢……と順番に果実を匣に備えて行き、俺が最後の一つを窪みへと納めた。

——グウン……ッ。

虫の羽音の様な低いノイズ音と共に魔法陣が一際強く輝き、足元に敷かれたモノと同じ様な幾何学模様の描かれた魔法陣が天井に出現する。

3D映像の如く立体化した魔法陣は上と下で互いに逆回転し、洞穴の中間部で交わって凝縮。袋小路はまばゆい光りに包まれ、俺達の背後……ちょうど祭壇に対面する形で岩壁に“穴”が現れた。

直径が凡そ二メートル程なその穴の表面は、シャボン玉よろしく虹色に輝く膜で覆われ、幻想的な雰囲気醸し出している。

「おお、これが秘境の門……！」

「こーら、ウエン。危ないから一人で入っちゃだめだよ？」

興奮からか、頭上のハンチング帽を脱いで握り締め、胸を押さえるペルポイさん。アグは門の膜を口を真一文字に結んだままに恐る恐るつつくウエンの手を繋いで宥めている。

「わあ……綺麗だね、トリスちゃん！」

「えつ、あ。……う、うん」

珍しくはしゃぐランス君に両手を握られ、伏し目がちに照れるトリス嬢。——なるほど、さりげないボディータッチか……ッ。

——ヴオオオオオ……。

なんとも詭^{あつ}え向きにこれから探索に臨む俺達を招き入れるかの如く、洞穴の隙間から風が吹き込んで顎門が哭^ないている。

——あ、ここから先は気を引き締めて行かないとな……忘れてたけど俺、レベル低いままだわ……。

さて、何はともあれ、いよいよ俺達の盲目竜の顎門攻略が始まったのだった。

21・気になる疑問と足りない覚悟（後書き）

久々のケンタさんですが、本格的な出番はもう少し先になりそうです。

閑話・一日目。いち！（前書き）

お久しぶりです。

えらく予定が狂っちゃいましたが、要望の多かったアノ子のお話です。

二万P突破の記念のつもりが遅くなってしまい申し訳ありませんでしたm——m

閑話・一日目。いち！

諸国から幅広い交易品や商人が集い、『捜し物ならフランチエスへ』とまで謳われる商業都市の西部から、国境沿いの大河にまで広がるクレイル樹海。

“狼王”と呼ばれる大狼が率いる群れが跋扈するこの樹海には四季折々の果実を実らせる木々が自生し、中心地には“歎きの空洞”と呼ばれるダンジョンがあったり——“狼王”の縄張りにさえ足を踏み入れなければ、駆け出し冒険者にとって手頃な狩場となっている。

そんなクレイル樹海の一角で、身の丈に余る幅広長剣ブロードソードを携えた小柄な少年が魔物と対峙していた。

彼の名はネル。今年で十三になる“訳あり”な自称冒険者の少年だ。

頭部には額を覆う様にして焦げ茶色の布を巻き付け、簡素な布の服の上にはほつれ気味な若草色の外套。

長めの揉み上げにピンと外側に跳ねた濃紫の頭髮に薄灰色の双眸。跳ねた頭髮と相俟って少年の大きく吊り気味な双眸は、見るものに小生意気そうな印象を与える。

「……なんだよ。オレは今、機嫌が悪いの！ 用がないならあっち行けよ」

じいと己を凝視する存在に業を煮やしたネルが服の裾を握りしめて魔物を見遣る。

するとネルを獲物と見定めたタルカスと言う枯木の魔物は、かたんことんと乾燥した生木を打ち合わせたかの様な小気味よい音を鳴らして一歩ずつ近付いてくる。

「ふんっ。そっちがその気なら……お前なんか薪にしちゃうからな！ べっっだ」

ネルは鼻を鳴らして悪態をつく、右腰に佩びた愛剣を多少もたつきながらも抜き放ち構えた。

「……迷った」

その後も魔物と数回の交戦を繰り返したネルは、未だに当てもな
く藪を掻き分けて樹海をさ迷い続けていた。

歩く度に右腰に佩びた愛剣はずり下がり、途中で立ち止まっては
何度も剣の位置を修正している。

「……なんだよ、もっつ。

それもこれも全部コーキのせいだ！……ばか。ばあかつ」

ネルは頬を膨らませて服の裾を掴むと、路傍に転がる石ころをブ
ーツの爪先で思い切り蹴飛ばす。

彼が何故これ程までにご立腹なのかと言うと、答えは至極単純。

本来ならば、コーキが秘境探索に赴いている間に他で臨時のパ
ーティーを組み、この樹海にある“歎きの空洞”に向かうはずだった。

しかし、依頼の待ち合わせ場所に赴いた所で先方から『實力不足
を理由に同行を断られてしまったのだ。』

“石無”^{ミュー}と呼ばれるネルやコーキの様な非ギルド登録者のこ
う言う扱いは別段珍しい事でもないのだが――。

本当の理由はネル自身の容姿が実年齢より更に幼く見えるのはも
しろんの事、相手方のパーティーに多種族を蔑む排他的傾向にある
エルフが二人居た事だろう。

『詳細な募集内容を明記していないとは言え、お前の様な子供に
前衛を任せたとあっては一族の恥だ。』

いつも一緒に居る物好きな人間とままごと遊びでもしているのがお似合いではないか？』

これは、リーダーの高慢そうなエルフ男の言だ。

いつもコーキとギルドに換金に向かっているので、リーダーのエルフも二人の事を見知って居たのだろう。

ネルは自分の事だけではなく、一緒に居たコーキの事まで馬鹿にされた様な気持ちで腹が立ち、エルフの男から迷惑料として相手から差し出された僅かな金銭を突き返し、怒りのままに西門から飛び出して来たのだった。

「……ホントはコーキも迷惑してるのかな？」

ネルは先刻まで荒々しく進めていた歩を止めて呟くと、そっと愛剣の鞘を撫でた。

己にこの剣を託した友人に似た容姿と、自身の“眼”で直視^みたコーキの暖かい雰囲気^{きふく}に惹かれ、半ば強引に同じ宿に飛び込んでかれこれ一週間が経つ。

特にこちらの事情を深く訊ねる訳でもなく、自分を拒絶する様子もなしにするりと受け入れてくれたコーキに甘えっぱなしだったが、内心ではどう思っているのか不安で心細い。

最初こそはダンジョン進入と言う目的があって声を掛けたのだが、今となつては彼と友人としてこれからも長く行動を共にしたいとネルは思う。

自身の生い立ちや本当の目的はまだ明かせないが、いつか打ち明けられる日が――。

「……うん。オレの問題だもんな、コーキは巻き込めない」

ほうと物憂げに息を吐き、ネルはよいしょと鞆から愛剣を抜き放って正眼に構えた。

そのまま剣を軽く振るって切っ先を地面に突き刺すと、ネルも剣と対面するようにして地面に座り込む。

「なあ、お前はと思う？ 仇討ちなんて馬鹿だと思うか？」

その問いに意思の無い剣が答える筈もなく、樹海にさあと一陣の風が吹きすさぶ。

今の季節は温暖な春だ。

――でも、なんだかその風は肌寒くて冷たい。

ネルは素肌が顕わになった両腕を撫でる様にして抱き、剣の腹に寄り掛かって額をコツンとぶつけた。

「……ダメだ。こんな気分の時には美味しい物を食べるに限るな、うん！」

ネルは何かを思い出したと言った具合に勢い良く顔を持ち上げると、肩に下げた鞆から花の刺繍がついた布を掛けられたバスケットを取り出す。

隙間から仄かに食欲のそそる良い匂いが溢れ出す布を持ち上げると、小麦色に焼けたカリカリのパンに挟まれ、甘辛いソースが絡められた鶏肉の芳醇な香り。

そして、肉と一緒に挟み込まれた赤や緑の鮮やかな野菜がネルの目を輝かせる。

「オレの好物のペイルバードの甘辛煮っ！……と、一緒に挟まってるのはオレの苦手なコロロの葉……」

それはネルが今お世話になってる宿——雪鳥の止まり木の若女将、フランが今朝持たせてくれたものだった。

自分の好物と苦手な野菜との共演に戸惑うネルだったが、野菜を残すとベジタリア星と言う別の惑星の王子に呪いを掛けられ、漏れ無く短足になる。

しかも呪いはそれだけに止まらず、最後には生え際がエム字になる……等と言うコーキの根も葉も無い与太話を思い出して身震いする。

話の締めにはいつもの様に、『俺なら泣いちゃうね。そう、俺の知り合いにも——』と、額に手を当てて嘆き悲しむコーキの話に出てくる知人の悲愴な姿を想像してネルは……。

「やだ。絶対、やだ。」

もしかして、前に話してた重い剣持ってた人と同じ人なのか？ 最後には足が無くなっちゃうんじゃない……」

コーキのほら話を本気で信じるネルは両手を合わせ、憐れなその知人に黙祷を捧げてからサンドイッチを一口。

しかし、不思議な事にいくら頼張っても苦手なコロロの葉特有の

苦みは一切感じられず、ネルは怪訝そうに小首を傾げた。

「んっ、そっか。フランさんが濃い味付けにしてくれてるんだな」

若女将の心遣いに感謝しつつ、早くも一切れをぺろりと平らげたネルが次に手を伸ばした時、バスケットの底に包み紙に包まれた何かが入っている事に気付く。

なんだろうと開いて見ると、その中には白に赤コントラストの栄える渦巻き型の棒付きキャンディが三つ。そしてメモ用紙が添えられていた。

「おっ、ペロキャンにいい……。なんだこれ、コーキから……？」

無地のシンプルなメモ用紙には、箇条書きでこうしたためてある。

——ネルへ。野菜、ちゃんと喰ったか？ フランさんに頼んで一緒におやつを入れておいた。

飴は一日、一本まで。口に銜^{くわ}えたまま走り回らないよーにする事。怪我したら渡しておいた薬を飲む事。腹を出したまま寝ない。

……等など、まるで子を心配する親の書き置きのような文面を見てネルは可笑しくて噴き出してしまふ。

「ふふっ、母様みたいだ。変なの」

ネルは平穩だった日々を懐かしむ様にメモを一頻^{つしき}り眺めると、それを丁寧に折り畳んで懐にしまい込んだ。

「よし、残りを喰ったら鍛練の続きを……？」

ふと視線を下に戻してみれば、先程まで膝元にあったバスケットが忽然と消えている。

「おお、何処行った?!」

疑問符を浮かべたネルが辺りを見回してみると、少し先の木陰で白い小さな生き物がバスケットに顔を突っ込み、中を物色しているではないか。

「アイツは……クレバーエープ? でも、それにしても毛の色が普通と違うな」

凡そ三十センチにも満たぬであろう小さな体躯に、尻尾の先が二又に分かれた短毛の子猿。

それは特殊に進化した尻尾に魔力を用いた弦を具現させ、硬い木の実や石ころ、稀には魔力球などを射出して遠距離攻撃を仕掛ける臆病な猿の魔物だった。

尻尾を手足の如く器用に扱い、まるでスリングショットで攻撃を仕掛けてくる様に見える事から、別名“森の射手”とも言われている。

だが、一般的なクレバーエープの体毛は紫色。ネルの前に現れたこの魔物の体毛は白雪の様に白く、何より美しかった。

「すっげー、ちょっと綺麗かも」

初めて見る特異な魔物に目を丸くして喜ぶネルだったが、クレバーエイプの口元についた“茶色い染み”を目にしてポカンと口を開く。

「……あゝッ！！ おまつ、それはオレんだぞ！」

「キユイ？」

ネルの悲鳴にも似た絶叫に気付いたクレバーエイプがきょとんと首を擡^{もた}げる。

その顔は眉毛の位置にある灰色の模様が『ハ』の字に垂れ下がっていて、とても愛嬌があるではないか。

「あ、う。か、可愛い。」

——じゃなくてだな！ それはオレのなの！ 今すぐ返せっ」

子猿の愛くるしい姿に思わず頬を綻ばせるネルだったがハッと我に返り、バスケットを力強く指差す。

しかし、当のクレバーエイプはそんな事お構い無しと言った具合にネルのおやつであるペロペロキャンディを、なんと丸々一個頬に詰め込んでしまったのだ。

「ああっ！ オレのペロキャン……。痛っ?!」

目の前でお口の^{ペロキャン}の恋人を奪われ、情けない声を上げて虚空をつかむネルだったが、そんな哀れな彼の額には子猿の容赦無い追い撃ち（木の实。とっても硬い）が降り注ぐ。

泣きつ面に蜂とはまさにこの事だろうか。木の実が額にペチンッ

と音を立てて命中したネルは膝を折り、力無く地面に突っ伏す。

「……………」

最早、誰が見てもこれまでかと思われた。

……だが、ネルの心はこれしきの事では折れなかった。寧ろ心は沸き立ち、打ち震えるのだ。

「……ふつ、ふふ。上お等だあ！」

お前なんか取っ捕まえて喰ってやるっ！！」

「キュツ?!」

肩を震わせ、ゆらりと幽鬼の如く立ち上がったネルの虚ろな笑みを見たクレバーエイプは余程身の危険を感じたのか、全身の毛を逆立てて樹海の奥へと逃走を始める。

「逃がさんつ、オレの昼飯い!!」

素早く愛剣を引き抜いて鞘に納めたネルは途中で放置されたバスケットを拾い上げ、藪の中へと飛び込んだ。

げに恐ろしきは人の執念。食い物の怨みのなんと恐ろしい事か。

——ネルの辛く長い戦いが今、幕を開けるのであった。

閑話・一日目。いち！（後書き）

タイトルの通り、続いちゃいます。

その2の投稿は文章が整い次第2〜3日中にUP出来ると思います。

感想、応援メッセージの返信が出来て居ませんが、嬉しく拝見させて頂いてます。

お返事は次回の更新時に必ずするつもりなのでどうか見捨てないで下さいorz

閑話・一日目。に！

「んん……あの猿何処行つた？ あーあ、走つたら余計体力使つちまつたなあ」

ネルは衣服についた葉っぱを払い落としながら息を吐く。周囲を見渡しても何処までも同じ様な景色が広がるばかりだ。

唯一の変化と言えば、辺りに靄が立ち込めて来た事だろうか。どうやら気付かぬうちに樹海の深域の方にまで踏み込んでしまつていたらしい。

「あちゃー……。狼の縄張りに入っちゃまったかも」

頭に血が上つて一心不乱に駆け出して来たネルだったが、自分の置かれた状況に気付き、背中に冷たい汗が伝う。

森の浅域を徘徊する鈍重な魔物なら二、三匹が同時でも、重い剣を振り回してなんとかなる——だが、相手が深域をうろつく俊敏な狼なら話は別だ。

奴らは動きが速く、未熟なネルの剣技で急所を狙うのは難しい。なにより、基本的に二匹以上のチームで行動する狼を相手にするのは分が悪かった。

体調が万全の状態なら“ちょっとした特技”で多少周りを囲まれてしまっても打破する事ができるだろう。

しかし、ろくに食事も取れてない状況下で気力の消耗が激しい特技を扱うには今の状態だと不安が残る。

「ったく、今日は良い事ないなあ。早く帰って来いよなー……ばか」

ネルは男の浪漫とやらを求めに樹海の奥へと赴いた連れ合いの顔を思い浮かべてばやく。

長らく一人で放浪していた為に独りきりは慣れっこだと思っていたが、どうにも物足りない。

無邪気に笑い、鼻歌混じりで脳天気に出発して行った男の事を考えるとなんだか――。

「……ムシヨーにイライラする。決めた、今日はもう帰る！」

今日はどうにもツイてない。こんな日は街で美味しいものでも食べて過ごすに限る。

そうだ、東門の屋台で買い食いしよう……現在の懷事情と相談して帰還を決意するネルだったが、ここでふと重要な問題に気付く。

「……でも、その帰り道がわかんねえんだよねー！」

その時、右へ左へと頭を抱えて唸るネルの耳元へ聞き覚えのある動物の鳴き声が流れ込んで来る。

それは間違いなく先程ネルを襲ったクレバーエイプの物だった。すかさず鳴き声に反応したネルは帰還の事はさておき、声のあった方へと息を殺して慎重に歩み寄った。

「うん？　なんか様子が変わだぞ」

ネルが藪の隙間から顔を覗かせ様子を窺っていると、そこには先程の白いクレバーエイプが一匹と鋭い牙を剥いて唸るスレイブウルフが二匹。

どうやらこのスレイヴウルフ達は、件のクレバーエイプを喰らうつもりらしい。

周りに身体の小さなクレバーエイプが身を隠せる遮蔽物はなく、足に血を滲ませた手負いの子猿が牙と爪をくぐり抜け、木の上まで逃げ遂す事は困難に思える。

既にクレバーエイプは逃走を諦め身体を丸めて蹲うすくまっているが、スレイヴウルフ達は攻撃の手を緩めようとはしない。極限まで獲物を弄ぶつもりのようだ。

所詮は魔物同士の小競り合い。弱った所で漁夫の利を得るのが通常の冒険者が取りうる定石だ。なんら恥ずべき行為ではない。

——しかし、弱りきった小さな獲物を面白半分にしたぶるのが気に食わない。気付けばネルは剣を抜き、スレイヴウルフの前に飛び出していた。

「お前、さっきからギャンギャンうつさいぞ！　って言うかコイツはオレの獲物だ、こらぁ！」

あわよくば……とネルが手前のスレイヴウルフに放った側面からの奇襲はするりと躲され、虚しく空を切る。

「なら、これならどうだ」

ネルは初撃を躲されても慌てる事無く前へ踏み込み、着地点を狙って剣を切り返し、逆袈裟斬りを放つ。

だが、その斬撃も素早いスレイヴウルフの頬を掠めるだけで致命傷には至らなかった。

「もう！　避けんなよっ」

『グルルルッ』

頬を裂かれたスレイヴウルフが突然の闖入者を恨めしげに見遣る。

ネルとしては最初の奇襲のうちに一匹を仕留めたかったが、上手く行かずに失敗。相変わらず二対一のままで戦況は芳しくない。

口では強がって見せるが剣を握る手にも自然と力が入り、身体が強張る。

そこにネルが緊張した隙を突き、もう一匹のスレイヴウルフが脇

から飛び掛かって来た。

「うわっ?!」

咄嗟にスレイブウルフの体当たりを剣で受けるが、体重の軽いネルの身体は浮き上がって倒されてしまう。

——そして、その衝撃で剣を手放してしまったネルにスレイブウルフが飛び掛かる。

「……やっぱ」

鋭い牙の立ち並んだ死の顎門が喉元に迫る絶対絶命の状況下で、ネルの脳裏に浮かんだったのは走馬灯でも神への祈りでもなく、ある男の一言だった。

『困った時は——』

「痛そうな所を思いつき蹴っ飛ばせ！」

無我夢中で放った蹴りは牙を剥いたスレイブウルフの大口を捉え、灰色の狼は短い悲鳴を上げて宙に舞う。

それは、ネルの目の前で身長の数倍もある巨大な蛇すらも杖で薙ぎ払い、蹴り倒した事のある『まほーつかい』の言葉だった。

「ど、どーだ。こんな時の為に底の厚いブーツを履いてるんだゾ！」

ネルは拳を振り上げて勝ち誇るが、その声色は若干上擦っている。

果たして真相の程は定か（低身長をごまかす為）では無いが、飛び掛かって来たスレイヴウルフ自身の体重が乗ったネルの蹴りは抜群の効果を示したようだ。

思わぬ反撃に手酷い痛手を受けたスレイヴウルフは追撃を止め、ネルと距離を取る。

「コーキみたいに、一撃でぶっ飛ばせれば楽なのになぁ……」

剣を拾い上げたネルは背後で蹲るクレバーエイプを横目で見遣った。

クレバーエイプは未だに身体を丸めたまま身動き一つ取らないでいる。すぐにスレイヴウルフを倒すのは難しい。

……しかし、このままだと瀕死のクレバーエイプは直に死んでしまっただろう。

ネルはエルフの男に言われた『實力不足』の言葉が頭を過ぎり、歯噛みする。

「……そんなのわかってる。だから、オレは――」

八方塞がりの最中、ジリジリと確実に距離を詰めてくるスレイヴウルフにネルが意識を集中させた時の事だった。

突如謎の風切り音と共に空に閃光が走り、大きな炸裂音が耳を打つ。

「え？ な、何だあ！？」

突然樹海に鳴り響いた轟音に羽を休めていた鳥達は飛び立ち、スレイヴウルフは顔を見合わせて狼狽える。かく言うネルも、事態が把握出来ずに呆然と空を見上げる事しか出来なかった。

『ギャウツ！』

『ガルル……』

得体の知れない不思議な現象に二匹のスレイヴウルフは唸り声を上げ、ネルを疎ましげに睨みつけながら藪の中へと消えて行く。

その後ろ姿をクレバーエイプを抱き上げたネルが見届けていると、一拍の間を置いて再び天に昇る風切り音。そして色鮮やかな光りの花々が蒼穹に咲いた。

「……花火、か？ とにかく助かった……。お前、ツイてるな」

ネルはクレバーエイプを膝上に寝かせると、すかさずコーキから“緊急時用”と渡された蒼い液体で満たされたビンのコルクを引き抜き、恐る恐るクレバーエイプの口へと当て行っただ。

「ほら、大丈夫か？ ゆっくり飲めよ」

ネルが優しく促すと、クレバーエイプは細長いビンの半ばまでを満たす液体を少しずつではあるが飲み干して行く。

衰弱は想像以上に酷いものだったが、この薬は余程効能があるのだろう。

ネルの心配も余所に傷口は見る見るうちに塞がり、土気色だった顔色も徐々に回復傾向にあるようだ。

浅く不規則だった呼吸も落ち着きを取り戻し、ネルはホッと胸を撫で下ろす。

まさか魔物を助ける事になるなんて……今回だけだぞ。

ネルは寝息を立てるクレバーエイプの鼻を指先でくすくす撥り、そう思うのだった。

「キユウ……」

白いクレバーエイプが薄目を開き、つぶらな瞳を瞬かせる。

それに気付いたネルは膝の上で覚醒した子猿を顔の高さまで抱き上げ、極上の笑みを浮かべた。

「おつ。気が付いたか！　よかったなあ、おま——」

笑顔を浮かべるネルの額には、クレバーエイプの尻尾から繰り出

された垂直チョップがピシリと炸裂。

「痛つてえ……。何すんだよう」

突然人間に抱き上げられてクレバーエイプは興奮したのだろう。ネルの手からスルリと抜け出し、茂みの中へと跳ねて行ってしまった。

その様子をネルは打たれた額を摩りながらも、嬉しそうに微笑む。

「ま、いつか。元気になったみたいだし。

……。あつ。でも薬無くなっちまった。コーキの奴、怒るかなあ……。」

空になったピンを腰のポーチに挟んだネルはキョロキョロと周りを見渡し、藪に手を伸ばす。

今度こそ街に戻ろう……。ネルは茂みの中に隠して置いたバスケットを拾い上げ、勘の赴くままに街の方向へと進みはじめた。

異常に気付いたのは歩き始めて程無くしてからだ。

生い茂る雑草を踏み締める音が、自分以外にも後からついて来ているのではないか。

ネルが立ち止まればその音もぴたりと鳴り止み、歩き始めると再び一定の感覚から音がついて来る。

大方、ついて来る者の正体は目星がついていたのだが、流石に我慢の限界に来たネルが後ろを振り返ると、白い綿飴の様な子猿がネ

ルと同じ様に後方を振り返っていた。

「……………」

「……………」

ネルがクレバーエイプに向かって一歩踏み出すと、クレバーエイプは同じだけ後ろに下がる。

再び一人と一匹の間に静寂が流れ、今度は逆にネルが下がって見ればクレバーエイプは近付いて来た。

ジイツと互いの視線が交差し、頭上では梢が風に揺られてサラサラと踊る。

——このままでは埒が明かない。

静寂を破り、先に動いたのはネルだった。クレバーエイプが後退るのもお構い無しに一歩、また一歩と進み——。

「がおっっ！ 喰っちゃうぞ」

「キユイツ?!」

ネルが両手を広げて目一杯脅かして見せるとクレバーエイプは目を剥いて飛び上がり、木陰に隠れる。

その反応に確かな手応えを感じたネルは、胸を張って誇らしげに威張るのだった。

「へへん。勝ったぜ」

だが、当のクレバーエイプは幹の後ろから顔を覗かせ、未だにネルの様子を怖ず怖ずと窺っている。

折角、食べ物への恨みは忘れて見逃したと言うのに一体全体なんなのだろう？

ネルが困惑気味に自分の姿を足元から上を順に見遣ると、ふと右手に持ったバスケットに目が止まった。

「……なんだよ。まさか、オレのペロキャンを狙って？！ ダメだ！ 絶対やらないぞっ」

これ以上おやつを取られてなるものかと、バスケットの口を固く閉じて身体に抱き寄せるが、クレバーエイプは不思議そうに小首を傾げるだけだ。

どうやらクレバーエイプはネルに危害を加えるつもりは無いらしい。ネルは害意が無い事を察するとフムと小さく顎を引いてしゃがみ込み、手を差し出して見た。

「キツ？！ キュウ……」

木の影から様子を窺っていた子猿は身体を僅かに跳ねさせるも、恐る恐るとネルに近寄って来て――。

「うん？ なんだ、コレ。……くれるのか？」

クレバーエイプは両手で大事そうに抱えていた“何か”をネルの手に添えて一鳴き。

ネルは小石や鉱石等の不純物が多く不着した石の塊をまじまじと見つめ、頬を綻ばせた。

「そっか、お前の宝物なんだな。ありがとな」

ネルに頭を撫でられたクレバーエイプは擦ったそうに目を細める。自分を助けてくれた人間に喜んで貰えて、子猿はとても嬉しそうだ。

ネルは愛らしいクレバーエイプを抱き上げ、ほお擦りをしながらも思う。

「……猿って喰えんのかな」

「キユイツ?!」

ネルがポツリと漏らした一言にクレバーエイプが毛を逆立てて飛び跳ねる。しかし、ネルに両脇をしっかりと掴まれて抱き上げられ、満足に動く事が出来ない。

クレバーエイプの慌てるその様が可笑しくて、ネルは破顔して目尻を拭う。

「あはは、冗談だよ。

——なあ、お前樹海の出口わかるか? ……迷っちゃってさ」

服の裾を掴んでネルが気恥ずかしそうに訊ねるとクレバーエイプはネルの腕から飛び降り、少し先へ進んでピタリと立ち止まってこちらを振り向く。

まるで“ついて来い”と、言いたげなその仕草にネルは頷き、歩み出す。

この魔物との交流をコーキが帰って来たら自慢するんだ……と彼の驚く顔を想像してはにかみ、子猿の後に続くのだった。

閑話・二日目。に！（後書き）

ネルに友達（？）が来ました。

コーキ達がサクサク倒せた狼もネルには強敵だったり。

次回からは再び一人称で本編に戻ります。

22・盲目竜の顎門・一（前書き）

明けました、おめでとunggざいます。

お待たせ致しました。

年内更新と言いつつ、遅れてしまった事にこの場で深くお詫び申し上げます。

22・盲目竜の顎門・一

――黒。闇よりも尚暗き、闇黒。

まず頭に思い浮かぶのは、この一言に尽きるだろう。

壁面に現れた“門”を潜ると辺りは黒いペンキをぶちまけたかのような底無しの闇に包まれ、冷たくも澱みの無い、澄み切った空気が俺達を迎え入れた。

一歩先すら見えない闇の世界で、自分の身体だけが見えると言うのは存外に恐ろしいもので、にわかに星一つとない夜空にほっぽりだされたかの様な感覚を覚える。

静寂の中で水面みなもに滴る水音や、靴底で床板を踏み締めた時の感触がなければ、軽くパニックを起こしてしまいそうだ。

「随分と陰気臭い場所ね。とっとと明かりをつけましょう？」

俺の右後方からトリス嬢の涼やかな声。直ぐさまライティング（

照明魔法）の行使出来る彼女とランス君、そして俺とで詠唱に取り掛かる。

『ライティング』

三人の声が重なり、それと同時に三つの光球が宙に現れ、ゆつたりと円の軌道を描いて辺りの全貌を照らし出す。

平らな石畳が敷き詰められた円形のエントランスは凡そテニスコート半分程の広さで、周りは青みを帯びた岩壁で覆われていた。

俺達を囲むその岩壁は凹凸が少なく、滑らかな光沢を放っている。

「ここが、盲目竜の顎門……」

「ふうん。思ってたよりも普通なのね、拍子抜けだわ」

緊張した面持ちで両手を胸に抱き周囲を見渡すランス君と、訝しげに眉根を寄せて首を捻るトリス嬢。

「こら、依頼主に失礼だぞ。……どうやら興奮し過ぎていて、それ所じゃなさそうだが」

「素晴らしいッ！ この貴重な体験を、是非とも冒険日誌に記さねばっ」

アグが腰に手を当て、トリス嬢のぞんざいな物言いを窘めるが、当のペルポイさんは鼻息荒く手帳に筆を走らせる事に夢中のようにだった。

俺は右手に握った槍杖に意識を集中させ、脳内で行使したい魔法を選択する。

すると、瞬く間に槍杖が発光し、洞穴内の陰影をより色濃くさせた。

いつ見ても夏の夜店で売ってる光るオモチャだよ——と感慨に耽りながらも周囲を一望する。

「さて、この暗闇で魔物に襲われたら一溜まりもないし、一人一人の武器に明かりを付与して……ん？」

そこまで言って気が付いた。一人、足りなくないか？ 今一つ思考の読めない白髪無口っ娘の姿が無い事に気付いた俺は、そこはかとなく困惑気味な表情を浮かべたランス君に問い掛けた。

「なあ、ランス君。ウェンは何処行っただ？」

「ほえ？ ……あー。ウェンちゃんなら、ここに……」

彼は形の良い眉を垂れ下げてぎこちなく微笑み、背を向ける。なんと、ランス君の外套が不自然に盛り上がっているではないか。

不自然な瘤はモゾモゾと動き出し、外套の隙間から口を真一文字に引き絞ったウェンの頭がひょっこりと姿を現す。所謂、二人羽織モードだ。

俺が説明を求める様に視線で訴え掛けると、困り顔の彼が口を開くよりも先に、それに気付いたトリス嬢が声を荒げた。

「な……っ?! ウェンったら、またそんな所に入って——早く出

て来なさいっ」

「うぐつ。トリスちゃ……首、絞ま、苦しい……」

すかさず頬を上気させたトリス嬢が、ウエンを引きはがしに掛かる。

——しかし、彼女の白い細腕はランス君の首に食い込み、すらりと伸びた両足もランス君の腰を渡って腹部から回され、身体をガツチリと拘束していた。

「ウエンは暗闇が苦手だね。不意に闇に包まれると、いつもあんな感じなんだよ」

この攻防を一瞥したアグは、如何にも日常茶飯です。と言った具合に投げなりに言い放つと、巨大な戦斧を軽々と肩に担ぎあげた。

「はー、なるほどね。しかし、これはなかなか……」

俺とペルポイさんは、きゃいきゃいと戯れる少年と少女達を横目に顔を見合わせる。

「ええ、とても凄く……」

美少女とあんなにぴったり密着するなんて、けしからん（羨ましい）！

——と、言う俺達の羨望の眼差しは、徐々に鬱血していくランス君の顔を見るうちに、憐れみのそれへと移り変わってゆく。

「……意外とそうでもないですね」

「……生きててナンボですからな」

そんなこんなで、初っ端の入口から若干躓きつつも、俺達のダンジョン攻略は始まったのだった。

「――ふう。皆さん、ここいらで小休憩としましょうか」

円錐型の突起がついた鈍器を片手に、ペルポイさんが額の汗を拭く。

彼の足元には頭部の陥没した巨大なカエルが、だらりと舌を垂れ下げ伸びていた。カエルの滑らかな仔牛大の体軀は、全身がピンク色で表面が薄い粘液で覆われている。

途中、何本かの分かれ道を相談を交えつつ進退を繰り返す事一時間。

緩やかな曲線を描いて前方に伸びる通路は広く、例えば魔物と戦闘になっても、自由に立ち回れる程に余裕があった。

うすら寒い洞穴の壁は滴る水分で表面が湿り、圧迫感を感じさせぬ程に確保された天井から垂れ下がる“石灰の氷柱”。

モニュメントのように地面から突き出た大小様々な石柱……さながら鍾乳洞と言った所だ。

出現する敵はそれなりに手強かったが、一定数の魔物が無尽蔵に保持され続けるフリーダンジョンと違い、クエストダンジョンは一度倒してしまえば再登場までに時間が掛かる分、探索は順調に進んでいると言えるだろう。

「うう、流石に手強い魔物が多いですね。服がベトベトになっちゃいましたよ」

ランス君が短槍についた粘液を振り払い、肩を落とす。

先ほどトリス嬢に盾にされる形で、髭のような触手を生やしたナメクジに存分に弄ばれた彼の衣服は、所々が透明な液体に塗れ、着衣が乱れていた。

「そうそう、その粘液も売れるんだぜ？」

「この液体がですかっ?!」

「ああ。触手もな」

「一体、どんな使用方法が……」

ゴクリと生唾を飲み込み、拾い上げた触手をまじまじと凝視するランス君。

微かに彼の頬が紅潮しているのは、俺の気のせいだと言う事にしておきたい。

ゲーム中では、この《ベトベトした粘液》と《濡れた触手》を、インベントリ内に数千単位で溜め込んでいる収集家^{へんたい}も数多く居たもんだ。

かく言う俺の引退した元・相方もそのうちの一人で、『魔法の無効化』と言う便利な指輪と共に、触手はもちろんの事、女性型モンスターの下着やらなんやらのドロップアイテム各種を俺に託し、ソイツが休止したのはごく最近の事だった。

“あっち”に心残りがあるとするなら、もしもアイツが戻って来たとき、預かった品を返せないって事くらいだろうか。

未だにゲーム中で所持者が数人程と言う神器級アイテムを持ったまま雲隠れするのは、なんとも目覚めが悪い話である。

「書き置き（メール）でも残しとくべきだったかねえ」

「……？　どうかしましたか？」

俺がポツリと漏らした独白に、近くで触手を拾い集めていたランス君は訝しげに小首を傾げた。

「いや、何でもない。

こつちに来る前に、自宅の寝台下に隠した“魔導本”の類いは内密に処分してくれて、友人に頼んでおくべきだったと思ってねー」

今のご時世で貴重な紙媒体だから、ネットで競売に掛ければ結構な額になると思うんだよな——と続く言葉を、俺は込み上げる欠伸と一緒に飲み込んだ。

程なくして魔物の素材回収も終わり、俺達は各々に腰を下ろして休息を取る事となった。

「さっきから聞こえるこの水音は……川が通っているのかしら？」

弓の弦を調整していたトリス嬢が手を止め、方々へと耳を傾ける。

戦闘中こそ気付かなかったが、トンネル状の通路には、耳を澄ませば聞こえる程度の微かな水流の音が反響していた。

「この様子だと、深層には地底湖ないし、それに属する物があるかも知れませんか。」

進行の妨げにならなければ良いのですが……」

メッシュ
製図作業に取り掛かっていたペルポイさんが筆を休め、指先でこめかみを解きほぐす。

その言葉に、いつも澄まし顔のアグが珍しく表情を曇らせてたじろいだ。

「う……。まさか、泳いで進むって事はない、よな？」

「ぷつ。アグってば、泳げないものね」

身体を揺らして吹き出したトリス嬢が、からかうような口調で言う。

アグは気恥ずかしそうに腕を組むと、視線を上方へと逸らして抗議した。

「し、仕方ないだろう。」

半分とは言え、ボクには『鍛冶の民』の血が流れているんだ。言わば、立派なボクの個性だよ」

泳ぎが不得手と言うヴァルガンの種族設定は、混血の彼女にもしつかりと受け継がれているのだろう。

ゲーム中でも筋骨隆々で屈強なヴァルガンのおっさんNPCを海や湖のマップに連れ出すと、何かと理由をつけて逃走を謀ろうとするイベントが発生し、必死に励ましながらクリアを目指すと言うクエストがあつたくらいだ。

「はは、個性で言うならトリスの胸も……」

そこまで言いかけた俺の頬を掠めて、鋭い風切り音が耳元を通り過ぎた。ちらりと背後の壁を一瞥すれば、硬い岩を穿ち突き刺さった矢がビィンツと振動している。

「——よし、調整はこんな感じで良さそうね。
……で、私の個性が何ですって？」

「ホットパンツから覗く美脚が素晴らしいと思うんだよねー、うん」

「そう？ それはどうもありがとう」

次の矢を番えようとしているトリス嬢に俺が素早く訂正を加えると、彼女は極めて社交辞令的な微笑を浮かべ、名残惜しそうに弓を降ろした。

そんな俺の横では頭頂部に黄緑色の梨のような果実を乗せたウェンが、そわそわと何かを待つようにして立ち尽くしている。

「そこで待ってても、ウエンに矢は飛んで来ないと思うぞ？」

「……！！」

きょとんと幼さの残る顔を硬直させて失望した様子のウエン。どうやら——もとい、やはり順番待ちをしていたらしい。

「ほら、ウエン。良い子だから座ってようね。……しかし、本当に一人で行かせてよかったのだろうか」

アグはウエンを手招きして隣に座らせると、足を組み替えて元来た入口側の方向を見遣る。

冷えた洞穴内で濡れた衣服のままだと体調を崩しかねないという理由で、着替えに向かったランス君の心配だ。

この場で着替えたかどうかと思ったが、『恥ずかしいです……』と赤面してモジモジと恥じらう彼の衣服をひん剥くのは、色々と抵抗があった。乙女か。

「子供じゃあるまいし、大丈夫でしょ。……と言いたい所だけど、ランスって、少し歩けば面倒事に巻き込まれる厄介な体質なのよね……」

トリス嬢は胸の上で腕を組み、物憂げに深い溜息をつく。過去に巻き込まれたトラブルの事を思い出しているのだろう。

俺はここに至るまでの道筋を脳内に思い描きながら、茶々を入れ

る。

「心配しなくてもここに来るまでの間に致命的な罠の類いは無かつたし、大丈夫だろう。」

——ただし、一つ前の分かれ道。あの先は、でっかい蛇が蜷局とぐろ巻いてたから危ないな」

「そうそう、確かに大きな蛇が居た。あの通路はボクとコーキとで見回ったんだっとな」

思い出したといった具合に、アグがポンと手を叩いて相槌を入れる。

まさか着替える為だけにそんな遠くに行くはずが……と、俺達が続けるより先に轟く地響きと震動。そして、何処か聞き覚えのある間の抜けた悲鳴が遠方から飫「だま」する。

「これも一種の才能と言うか……頭の痛い話しだね」

アグは肩口で結った頭髮の毛先を弄び、苦笑い。

俺は震動で落下してくる鍾乳石を杖で弾き、頭を抱えて頂垂れるポニテ娘に視線を向けて頬を掻いた。

「あ……、次から首輪でも付けてトリスが管理するって方向性で行かないか？」

「善処するわ。それよりも、この轟音……本当に“蛇”なの？ 察するに、下位の竜種並の規模はありそうよ」

「概ね蛇で間違いないだろう。ボクはあの手のウネウネしたタイプは水泳の次に苦手だよ」

その“概ね”ってのが信用ならないのよ、と剣呑な面持ちで呟きながら身構えるトリス嬢の脇では、蛇を模しているらしいウェンが両手をするによると波打たせている。

「くう……ッ！ 探検に巨大生物はつきものですな。私、年甲斐もなく血が滾^{たぎ}ってきましたぞ！
皆さん、どうか無理はなさらずに、いつでも逃走出来る段取りはしておきますから！」

豊満なお腹を叩いて揺らすペルポイさんの手には、強烈な閃光を放つお手製の目眩まし玉や煙幕玉が握られていた。

盗賊退治に使った睡眠薬といい、今回の探索には自身で開発した商品の実用テストも兼ねているらしい。

地鳴りとランス君の悲鳴が間近に迫り、淡い光りに包まれた皆の身体が、支援魔法の効能を正常に示す。

「コーキ、相手の氣勢を削ぎたい。天井が崩落しない程度に大きいのを頼む……むしろ、倒してくれても構わないんだぞ？」

両手で握り締めた戦斧を腰溜めに構えたアグが、こちらを横目に悪戯な笑みを零した。

俺は肩を竦めて彼女に返答し、迫る魔物に有効な魔法の詠唱に取り掛る。

「スカートの裾だけは、しっかり押さえといった方が良さそうだぞ」

俺の忠告にアグが怪訝そうに小首を傾げたその時、通路には風の奔流が渦巻き、短い悲鳴を発した彼女は慌てて裾を押さえた。

『風の悪戯（ただの偶然だよ）』作戦が失敗に終わり、言うんじやなかった——と寂寥^{せきりょう}の念に駆られる俺の周囲には、次々と半月状の鋭利な刃が具象化する。

ひゆるひゆると風音を立てるその刃の総数、十二。

大まかな的中点を予測し、通路の上部におおよその狙いを定めていると一際大きな破砕音と共に天井の一部が吹き飛び、奥から少年の影が飛び出して来た。

「ランス君、——伏せろ！」

「ふえっ。は、はい……っ！」

叫ぶのと同時に俺の射出した風の刃は、地面に突っ伏したランス君の頭上を飛び越え、全て余す事なく通路に吸い込まれ爆散。逃げ場を失った空気の奔流が土埃と一緒に通路へと吹きすさぶ。

「ランス、大丈夫なの？！ 一人で出歩く度に変なモノまで一緒に連れて来るのは止めて頂戴よ」

「あう、ごめんなさい……」

果たしてトリス嬢の言う『変なモノ』の中に、俺との初遭遇は含まれているのだろうかと考えながらも、俺は再び風の刃を具象化させる。

今なお、粉塵が漂う通路には巨大な影が揺らめき、異形の存在が鎌首も擡^{もた}げて俺達を見下ろしていた。

22・盲目竜の顎門・一（後書き）

寄せられた誤字、脱字報告は順次修正していく次第です。
いつもありがとうございますm（――）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1437t/>

Heretic

2012年1月4日12時47分発行